



特集「ボーダースタディーズ・セミナー2010」

- | | |
|--------------------------------------|-------|
| 永久凍土研究を通して見えたロシア | 3 頁 |
| 岩花 剛(北海道大学大学院地球環境科学研究院) | |
| アムール川とオホーツク海:陸海境界・国境を越えた環境システムの発見と保全 | 25 頁 |
| 白岩孝行(北海道大学 低温科学研究所) | |
| 中口国境の現況について:木材貿易を中心に | 50 頁 |
| 永井リサ(大阪大学) | |
| 文学と国境:菊田一夫「君の名は」における北海道と沖縄 | 82 頁 |
| 横濱雄二(北海道大学大学院文学研究科 映像表現文化論講座) | |
| 内なるボーダーと外なるボーダー:なぜインドからカーストがなくなるのか | 103 頁 |
| 鈴木隆泰(山口県立大) | |



ボーダースタディーズ・セミナーについて

私たちのグローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」は、現場の「声」を大事にすることをモットーとしていますが、「ライブ」とは現地調査や取材に限るものではありません。ある意味で研究者が日々、研究室で格闘する現場こそ境界研究の「最前線」だとも考えています。グローバル COE プログラムが、大学における教育・研究の「拠点形成」を目的とすることを鑑みれば、私たちの所属する北海道大学のなかで、ボーダースタディーズのネットワークをつくるのが重要です。

現在のプログラムに直接かかわってはいない、しかし、私たちの境界研究と結びつきの深い研究者を発掘し、かつ連携を行う。この目的で始めたのが、ボーダースタディーズ・セミナーです。

「ライブ・イン・ボーダースタディーズ」第4号は、休暇期間を除いて、ほぼ月1回のペースで行ってきた2010年のセミナーの様様を皆様にお届けします。

セミナーは地道な研究会ですが、異分野・複合領域にまたがる報告の多様さと広がり、境界を考えるための想像力と新たな知見をもたらしてくれています。今後は学内のみならず、学外の研究者もより広く深く巻き込むかたちで、私たちのプログラムのリソースを、境界研究に関心を寄せる方々に対して、より開放していければと考えています。今後もボーダースタディーズの「ライブ」を引き続きよろしく申し上げます。

(拠点リーダー 岩下明裕)





永久凍土研究を通して見えたロシア

日時 2010年2月9日(火) 17:00-18:30、スラブ研究センター4階大会議室

報告者 岩花 剛(北海道大学大学院地球環境科学研究院)

(司会) 今日の報告者は岩花さんです。我々は一応ロシアを重要なフィールドとしてやっているセンターですが、前回、[山下哲平さん](#)をお招きしたときに、ロシアの専門家が実はおられるということで、今日は岩花さんのロシアに関するご報告をお聞きすることになりました。特に最近言われる文理共同の実例としても非常にまた興味深いものがあります。ただ、我々ほとんどが永久凍土という名前しか知らないレベルですので、いろはの「い」から教えていただければと思います。

(岩花) ご紹介ありがとうございます。地球環境科学研究院の方で特任助教をしております、岩花です。私は18歳のときに北大に入りまして、それから、理学部を卒業して、低温科学研究所で学位を取り、ポスドクや特任をやりながらずっと北大にいます。大学院のときからロシアを研究対象としてきましたが、ロシアの専門家というよりは、永久凍土の研究、自然科学者として見てきたロシアについて、ここで皆様に報告をしたいと思います。

これは皆さんご存知の霜柱ですが、どこからこの霜柱氷の水が来たかご存知でしょうか。

(会場) 地中から毛細管現象。

(岩花) かなりいい線です。学生に問いますと、空気中の水が凝結したなんて言う人が半分以上です。地中から出てきたというのは正解なのですが、毛細管現象で出てきたわけではないです。この霜柱の研究といいますのは、日本では1934年、自由学園の女子高生の自由課題でやられた研究が発端だといわれています。彼女たちは卒業研究課題として、この美しい霜柱はどのように立つんだろうというこの単純な疑問で研究を始めました。彼女たちは、簡単な実験で霜柱の氷が大気中の水分が集まって凍ったものではないこと、土壌水が凍結して膨張したものではなく、地中から水分を吸い上げてニョキニョキと生えてくることを確かめます。こういうものを土の凍上現象と呼んでいます。



これは実験室で実験をした模様ですが、上断面を氷点下に保って下面はプラスの温度にする。そうするとこのように氷が土中に成長します。透明な部分が氷です。氷はアイスレンズと言って3次元的にレンズ状に飛び飛びに成長していきます。地表面が凍結する際に一番上に出てきたものが実は霜柱なんです。このように凍って地面が持ち上がる、それから解凍したら沈下する。凍結融解するとういうことが起きます。凍土の断面を取りますと、こういうアイスレンズがいくつも見られます。

実際、北海道の北見などでは凍害といって道路のアスファルトが持ち上げられてヒビがはいるため、非常に問題になっています。この現象は昔からあるのですが、突然昭和20年代ごろからこういう問題が出てき始めました。つまり街が都市化しまして交通が発達し、道路を除雪することに関係しています。それまで積雪によって寒気と地面の熱交換が遮断されていたのが、地面が直接冷やされるようになって効率よく地中が凍結し、先ほどのような凍上現象が起こってくる。こういう凍土は、我々の生活に密接した問題になります。

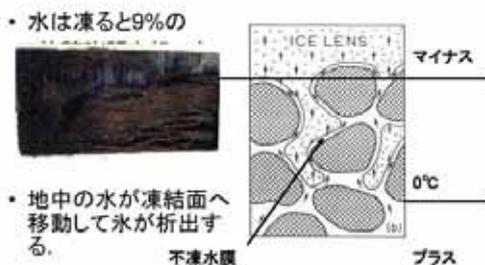
なぜ、土が凍ると盛り上がるのか。第一に、水は凍ると体積膨張を起こす。この分で地面が盛り上がるという説がありますが、これは間違いで、凍結によって体積が収縮するベンゼンを水の代わりの液体として使っても凍上現象が起こります。それから毛細現象で持ち上がるというのも実は違います。毛管現象では、凍上によって建物を持ち上げるほどの圧力が説明できないのです。どうしてこの氷ができるのか。ここではアイスレンズができる。こちらはマイナスの氷で、下の方はプラスで、零度線というのはここに存在します。それからアイスレンズができ始める面というのは、このマイナスの領域から成長し始めるというのが分かっています。

この零度線とアイスレンズのできるライン、その間の領域には、実は零度以下でも凍らない水、不凍水というのが存在するということが分かっています。物理学の概念に物質のポテンシャルというのがありますが、例えば水の場合、その水が存在する場所や溶存する塩分量によってその水



が持つ“移動可能性”みたいなものが違ってきます。例えば土の中だと、より高い場所の地下水は、より低い場所へと移動しようとしています。これも高いポテンシャルを持った水がポテンシャルが低くなる場所へ移動するという風に理解します。この不凍水においても周りの土粒子径や温度・圧力、塩分濃度などの違いで化学ポテンシャルというものが場所ごとに定義できます。化学ポテンシャルは、難しい式なのでここでは出しませんが、要するにポテンシャルの高いところから低いところに不凍水が吸い上げられて、凍結前線で氷の結晶として成長するということが分かっています。要するに、化学ポテンシャルの差による水の吸い上げだというふうに説明することができます。でも実は、本当の意味での凍上現象の全体像は解明されていません。

なぜ土は凍ると盛り上がるのか？



凍上・融解沈下

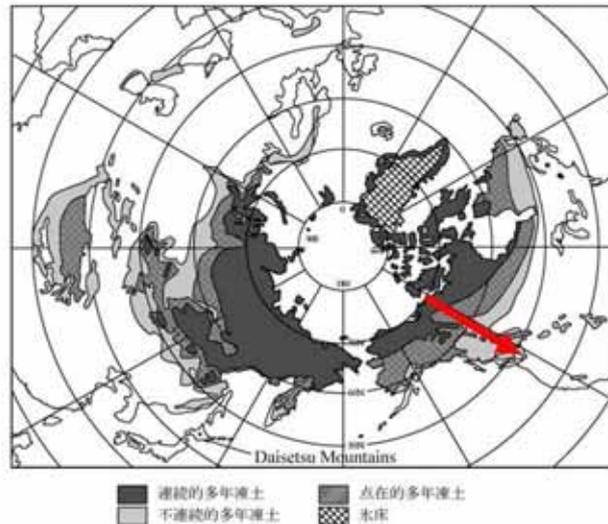


もっと寒いロシアでは、凍上、融解、沈下というのを繰り返し経験しますから、至る所にひび割れが見えています。木造の家屋はもっとひどく、見るからにベランダがゆがんでいます。陥没して水浸しになったところをコンクリートで埋めているような家もあります。このような土地でロシア人は暮らしているのです。

永久凍土の認識というのがいつからロシアでなされたのか。1640年、レナ川地方ヤクーツクのあたりで、ここを統治していた者が、ときの王様に「真夏においても地面が完全に融けません」という報告をしています。この辺が文献に登場した永久凍土の認識の始まりであると、ロシアの永久凍土の教科書にも載っています。それから中央シベリアの極北ノーバヤゼムリャで、「60センチほど掘ると氷がある、これは今までに聞いたことのない事実である」と報告されています。もちろん原住民たちにとっては永久凍土の存在は身近でしたが、このようにしてシベリアを開拓するに当たって、ロシア人と永久凍土の闘いが始まったのです。

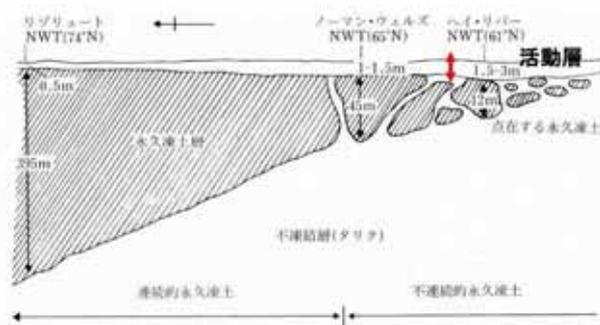


北半球の凍土分布図



現在知られているこの永久凍土の分布で北極点から眺めた地図がこれです。このように一番黒い部分が連続的に永久凍土の分布する領域、このまだらの部分は不連続に分布する地域で、東シベリアに主に分布しています。実際に永久凍土というのはどんなものかというのを知るために、このライン上の断面図を観てみます。

永久凍土の南北プロファイル





最北はもちろん寒く、永久凍土層が 400m ぐらいあります。年がら年中凍っている層です。これが南に行くに従いだんだん薄くなり、不連続永久凍土というものになります。それと同時に、いくら寒くても夏の気温はプラスですから表面から数十センチまでは融解する層になります。季節的に凍結・融解を繰り返すこの層を活動層と呼んでいます。

北半球では、この活動層の厚さは、北では薄いのですが南下するに従いだんだん厚くなっていきます。従って、この土地で生活する動植物の主な生命活動は、すべてこの活動層の中で行われていると言っても過言ではありません。永久凍土は氷の塊だと思われている方が多く、もちろん氷の塊も含まれるのですが、定義では「2年以上にわたり零度 C 以下の土壌または基岩」が永久凍土となります。

極北シベリアの地表面を見ると、限られた場所ですが、カメの甲羅状、編み目状の模様が見えます。これは永久凍土帯によく見られる特徴的な地形で構造土といわれています。真ん中が盛り上がっているものから真ん中がへこんでいるものまで、いろいろあります。山の上の永久凍土帯にもあります。この正体は、夏から冬にかけて凍結するとき、地表面が凍結、収縮を起こしましてひび割れます。そのひび割れを三次元的に見たのが、あの編み目状の構造土です。永久凍土帯で割れ目が入ると、次の春先に融雪水がこの割れ目に浸透します。その下は永久凍土層なので、この水は即座に凍ってしまいます。そういうものを、割れ目を埋めたくさび状の氷の形からアイスウェッジ「氷楔」と呼んでいます。これが 100 回、200 回、300 回と繰り返されると、このような非常に分厚いアイスウェッジができると説明されています。

実は同じような模様がこの火星にも見られ、シベリアにあるような永久凍土が火星にもあるのではないかということがいわれています。ただし、火星では 1 マス 200m ですが、地球上で見られるのはせいぜい 20m。この違いは今、謎といわれています。

こういう土地で建物を建てる時にロシア人はどうするか。ちゃんと建てようとする、このようなパイプ網を埋めてから土を盛り、その上に基礎を造ることをやります。実はこれはロードヒーティングではなく、クーリングのためのパイプ網です。氷をたくさん含んだ永久凍土は溶けてしまいますと、陥没することはお分かりだと思います。このようなことが起こらないように、地面を溶かさずに建築する。

これはヒートパイプと申しまして、外気とパイプの熱を効率よく交換させて、長い冬期、寒気を地中に伝えて凍らせるというようなことをやっています。あるいは高床式にして換気をしてあります。建物の中の熱が地面に伝わらないようにするための工夫もされています。

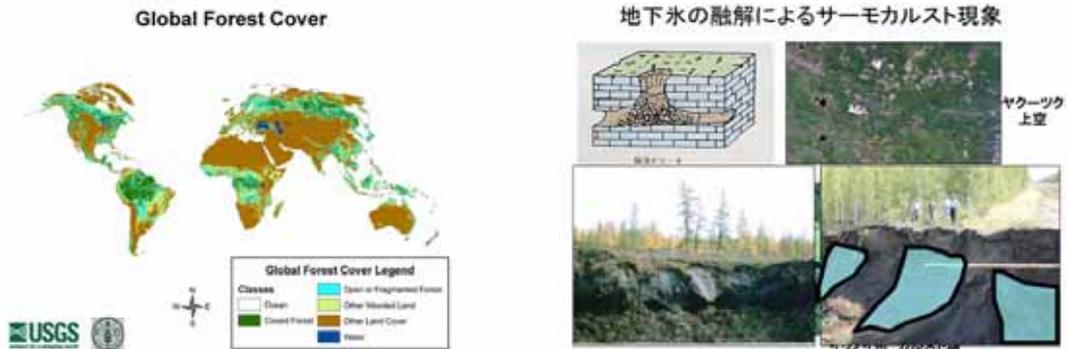


ユーラシアの永久凍土の成り立ち



これは旧ソ連時代の永久凍土の分布です。これを見ますと、緯度が同じ場所でありながら、西側はほとんど永久凍土がないという不思議な分布になっている。この理由は、非常に昔にさかのぼらないと説明できません。つまり、2万年前をピークとして、スカンジナビア半島の真上にスカンジナビア氷床というのが存在しました。雪と同じように氷が載っているおかげで、このときの氷河期の寒気が地面に伝わりにくかった。それが西側には永久凍土が発達しなかった一方、東側にはたくさん永久凍土が発達している大きな理由の一つです。このように、ロシアと言いましても東と西では違うのですが、植生はどうなっているのか。これは世界中の森、緑の部分が森ですが、大森林地帯は西も東も満遍なく広がっているわけですね。アマゾンの熱帯雨林に匹敵するぐらいの面積が、ロシアには生育しています。

我々はそういう背景の下、低温科学研究所の国際協力研究が、サハ共和国にあるヤクーチアというところで始まりました。



永久凍土帯で起こっていること

これは飛行機から撮ったヤクーツクの上空の写真です。タイガと呼ばれる北方針葉樹林が非常に青々としています。今日は、この私が見てきた永久凍土帯で起こっていることを少し紹介します。

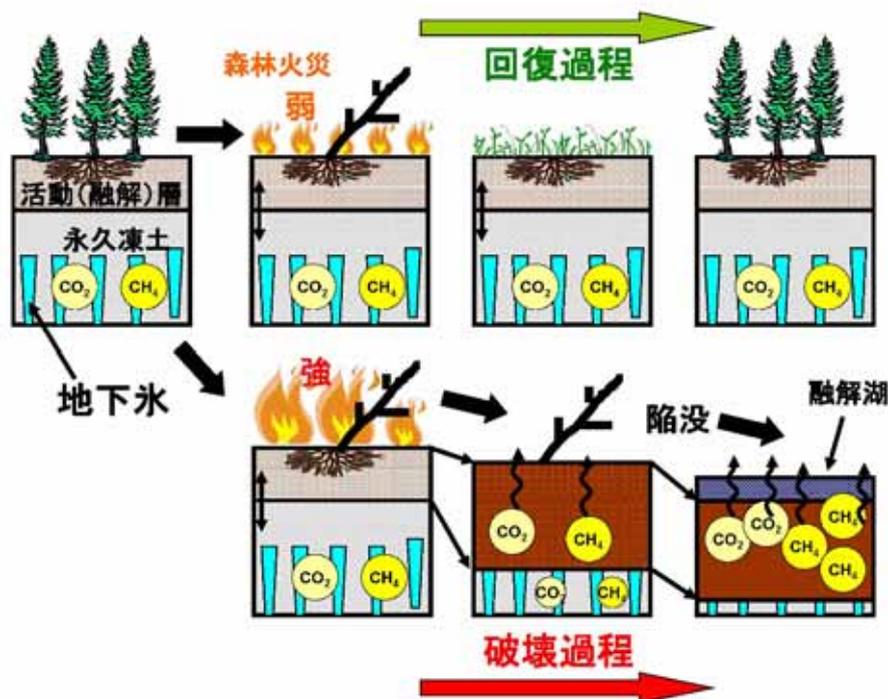
ランドサット衛星で見たヤクーツク上空ですが、先ほどの大きな湖がたくさんあります。それから森林がパッチ状にはげた部分がたくさん見られます。これは、先ほどお見せしました永久凍土の塊が融解して陥没した跡です。こういうのをサーモカルスト地形というふうに呼んでいます。カルストといいますのはもともと石灰岩のある地域が、石灰岩がその雨水によって溶かされて、下に空洞ができて陥没し、そこに水がたまることによってカルスト湖というのできる。これが石灰岩ではなくて、氷が溶けてできたということに類似を見いだして「サーモカルスト」と名付けられた現象です。

ヤクーツク周辺の地下にもこのようなアイスウエッジの氷がたくさん存在する場所があり、この部分が融解・陥没することによってできる現象です。大きなものではこういうサーモカルスト湖というものが形成される。このあたりは年間降水量が 230mm ぐらいです。日本の年間降水量はだいたい 1,000mm-2,000mm ぐらいです。砂漠の年間降水量というのは 50mm とか 100mm です。ステップ気候と同量の雨しか降らない非常に乾燥した地域ですので、いったん地下水が溶けて湖になりますが、どんどん乾燥して最終的には干上がってしまいます。干上がると太古の昔から存在した永久凍土の氷がすべて蒸発してなくなりますから、氷の中に存在していた塩類はずっと残るわけです。ですからこのような白い地表面が残る。周りに生育していますタイガ林は、塩類の多いところでは生育できないので、最終的に森がどんどん失われてサーモカルスト地形ができます。



このような森林が何らかの原因でかく乱を受けた後の地表面の変化を考えます。もともとのカラマツ林が、例えば森林火災、例えば伐採などを受けて植生の層がなくなったとします。そうすると、ほとんどの場合はこの直後に夏であればどンドン草が生えてくる。それからファイヤーウィードと呼ばれる、火災の後にすぐ生えるような草で覆われまして。その次に先行種であるシラカバの森になって、それがまた元のカラマツに戻ってくる、というパターンがほとんどです。ただし、ある場所ではサーモカルスト現象が起こり、このような水浸しになりサーモカルスト湖ができ、湿地化、乾燥化を繰り返して、最終的には先ほどの何も生えていない、草しか生えていないアラスと呼ばれる草原になってしまう。これは 8,000 年ぐらい前からでき始めたと言われています。

このサーモカルスト化を破壊過程とすると、回復過程というのは元の植生に戻ることで、何がいったいこの 2 つの運命を分けているのか、これが主な我々の研究目的の 1 つでありました。それに関連して、永久凍土帯の森が何らかの原因で破壊された場合どうなるのか、何が起こるのかというのを示した模式図です。



回復の場合は永久凍土層が守られており、また戻るなのでここに示した永久凍土は守られます。これが先ほどのサーモカルスト過程になると、何万年もかけて堆積された永久凍土の氷に含まれ



た温暖効果ガス(二酸化炭素とメタン)が大気中に一気に放出されます。それに加えて、このような湿地帯になることによって、田んぼのようなメタンガスをどんどん生産されて大気に放出されるような環境になります。よく沼地でぶくぶくと泡が出ているのを見たことがあるかと思いますが、あれは土の有機物を、微生物が分解してメタンガスを放出している。これは長期的に続く温暖効果ガスの放出源というふうにいわれます。つまり永久凍土融解は、一番初めにお見せしましたようにインフラ設備への悪影響、それから生態系変化への影響がその大きいというふうに説明できるわけです。

具体的にどういう観測をしていたのか紹介をします。ヤクーツク市から約 25km 離れたネレゲルという場所にサイトを設け観測を行っています。年降水量は 240mm 以下です。ここの永久凍土の厚さは約 500m。年平均気温はマイナス 10℃です。

ヤクーツク、皆さんロシアに関係される方が多いと思うので、どういう民族が住んでいるかはお存じかもしれませんが、この中の半分ぐらいはヤクート人です。実は日本人はこれだけでありまして、非常に親近感の持てるアジア民族と一緒に仕事をしておりました。

Neleger サイト





ヤクートの文化とそれからロシアの文化が合体したような食生活を送ります。もちろんシベリアは蚊で有名で非常に苦勞します。蚊は熱と二酸化炭素に反応するセンサーを持っているらしいので PC なんかを動かしておきますと、もうキーボードの上に群がって、ぶちぶちつぶしながら打ったことがあります。ベンチレーションで空気を循環させて気温を測っているのですが、あるとき温度がいきなり高くなったのでおかしいなと思って見に行くと、モーターの熱に集まった蚊がジャム状になって、ファンが止まっていたという恐ろしいことがありました。日本人はこの蚊が怖くて、みんなネットとゴアテックスのカップを着て頑張っている調査しています。現地の人はぼりぼりかゆいところかきながら働く、非常にたくましい人たちです。子供たちは先ほどのサーモカルスト湖で水遊びをする。6月なんかは非常にきれいなお花畑が広がる。夏はプラスの40度、冬はマイナス40度になるそういう場所でした。ここで我々は植生の有無によって永久凍土がどういうふうに変化しているかという観測をしています。簡単に言いますと。実際に森林に覆われた場所、それから実験的に伐採した場所を設けて、1990年から10年以上かけていろいろな観測を行っています。



森林及び攪乱地における微気象観測

1999年から無積雪期のみ



カラマツ林: F site



実験伐採地: C site

左は森林サイト、右は攪乱地(実験伐採地)で地表面に出入りする熱を測ってエネルギーバランスを比べています。地面の中に永久凍土の層があります。それから先ほど申しました活動層の領域があります。左から春先、そして右の方に行くに従って秋になります。雪解けが終了した時点から地面が溶け始めます。だんだん溶けていき、あるところで一番深い融解深を観測し、秋口から冬にかけて上と下から凍結が始まって、未凍結層はなくなってしまふ。

この領域の中で木々たちは水を吸い上げて成長しているのです。一方、この攪乱地の方はこの植生層が失われるわけですから、太陽からもらうエネルギー・バランスが崩れ、何らかの理由でこの永久凍土が多く溶けていくだろう。そういう意味で「？」マークが残っている。ここに我々は



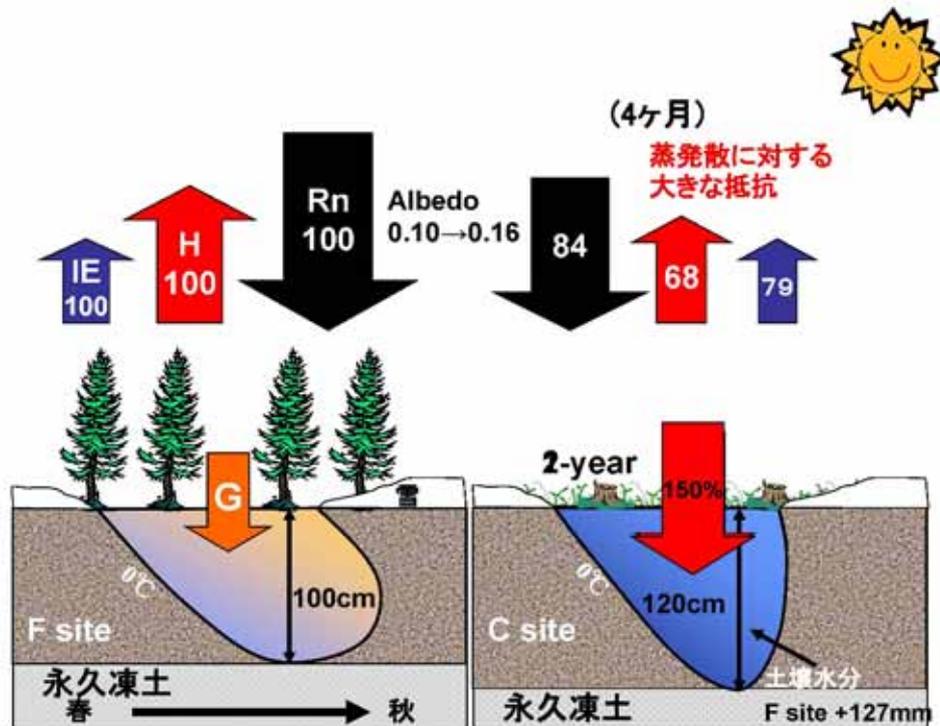
あるボリュームを考えて。この黒で示しました正味放射量 R_n (太陽から与えられるエネルギー)がこのボリュームに入力されたときに、3つのエネルギーとして消費されることを示しています。

この赤い部分は、大気とこのボックスの中の温度交換です。青い部分は、このボックスの中に存在する水を蒸発させる潜熱に使います。その差し引きで残ったものは地面に伝導しまして、そして永久凍土とかを溶かす、あるいは活動層の温度を上げるエネルギーに使われます。このようなエネルギー項目を一つ一つ測ってやります。それでこのようなエネルギー収支の比較を今日まで続けています。

もともと大きな目的はシベリアの森林、タイガ森林がどれぐらい二酸化炭素を吸収・放出しているのかを知ることから始めました。サーモカルスト現象が始まるきっかけとなるエネルギー収支などは、実際に森林を伐採するとこの場所は乾燥化するのか湿潤化するのかという単純な疑問にも答えを持たず我々はやりました。

簡単に結果を示すと、森林の方ですべて 100 であった値が、森林がなくなることによって、こういうふうに数値が変わるということを出しました。このアルベドとは、地表面が太陽光をどれだけ反射するかという数値ですが、伐採された場所は黒っぽかったタイガ林に比べてちょっと明るくなりますので、太陽からのエネルギーは 80%しか残らない。

これに対して、大気とこの場所の熱のやりとりというのも 70%に抑える。さらに重要なのはこの蒸発散です。蒸発あるいは木々が水を吸い上げて蒸散するという作用も抑えられると。その一方、熱は地中に伝達する、伝導するエネルギーというのは 30%にもなります。エネルギーバランス変化の結果、伐採の 1 年目には融解深の増加が見られました。

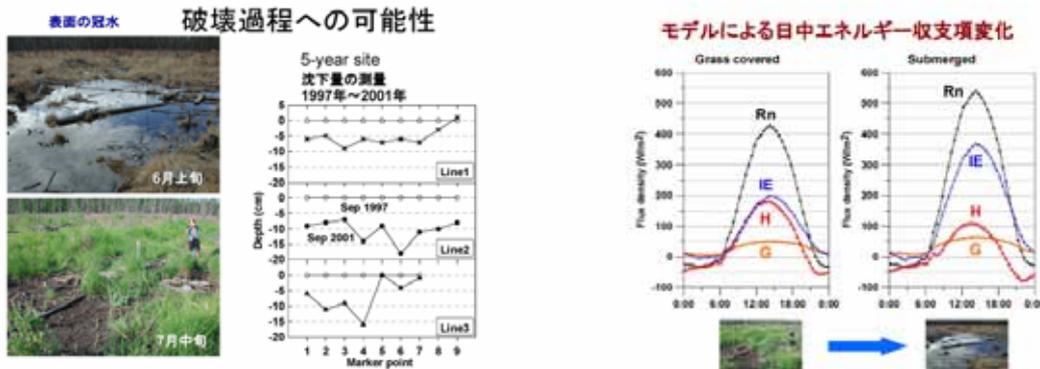


しかしここで一番重要なのは、木々がなくなったことによって活動層の水を吸い上げて大気中に放出するという、蒸散作用というものがなくなることによって、実はこの場所では地面が湿潤化するということが分かりました。つまり、地表面からの蒸散よりもこの木々が水を吸い上げる量が多かった。それから水の流れがこの永久凍土があることによって下に浸透せずに蓄えられる。こういう特殊な条件では、木を伐採するとその場所は水浸しになってしまうことが分かりました。

一時的には水浸しになり、2年目は逆に地中熱流量(地面に流入する熱量)がさらに増えるのですが、融解深はストップします。これは1年目に土壤水分が非常に多くなった結果、その年の冬の凍結期を越えた活動層は非常に氷に富む状態になります。大量の氷が存在する伐採地と、それからやや乾燥した森林、2つの場所ができることとなります。伐採地2年目に関してはいくらエネルギーがたくさん入ってきたとはいえ、多くの氷を溶かさなければならない場所であるため、夏の融解は進行しにくくなっているのです。つまりこのような場所で攪乱が起こったとしても、そんな簡単には永久凍土は解けないということが、この実験で分かりました。この土壤水分とエネルギーのやりとりで、永久凍土の融解深が抑えられている間に、表面の植生はどんどん回復して行きます。この森林生態系では、地表面のかく乱を受けた場合でも永久凍土の大規模融解は起こりにくく、表面植生が回復する自己回復能力があるというのが我々の結論です。



それでは破壊過程、すなわち永久凍土が劇的に融解するのはどういう場合があるのか。これは他の伐採地で時々起こる現象を見ていれば分かるのですが、つまり伐採 1 年目に土壤水分が非常に増えるといいましたが、この度合いが非常に大きく、地表面に水が出てきてしまった場合。



これは春先にこういう場所があったのですけれども、そういう場所では地面の沈下量がものすごいことが分かりました。つまりこの水浸しの状況とそれから草に覆われた状況で、エネルギーバランスが劇的に違うということが理解できます。

これはコンピューターの数値モデルによって再現した、エネルギーの分配の位置変化です。太陽エネルギーは日中が一番大きいですね。そして蒸発散、温度のやりとり、地中熱流量というふうに分割されますが。これが水に覆われた場合とそれから乾燥して草に覆われた場合ではこれだけ違う。こういう水面が維持されることが、サーモカルスト現象のトリガーの 1 つの必要条件となってくると思います。

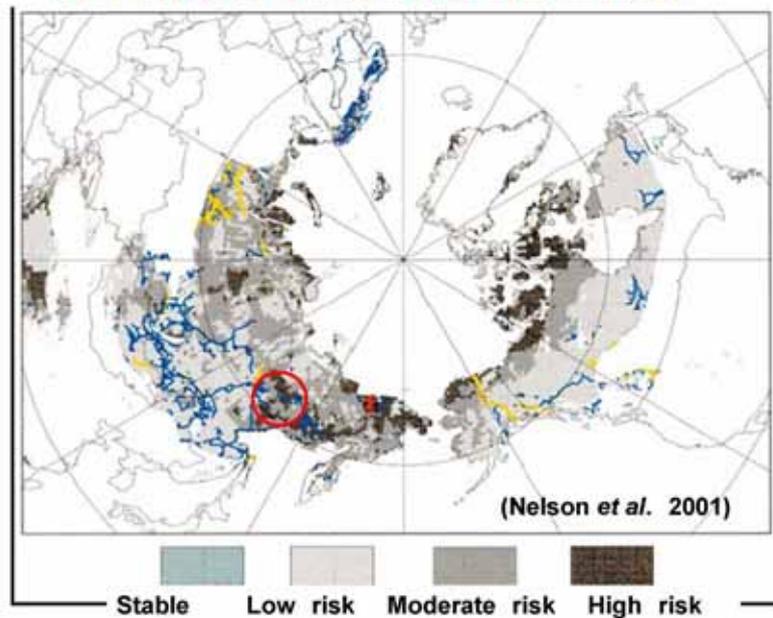
これを模式的にまとめますと、普段は攪乱されても数十年、百年ぐらいたてば元の植生に戻るのですが、何らかの原因で土壤水分が増加する要因というのがこういうものがあるんですが、地表面が水浸しになるということが続いた場合に起こる。まだ現状把握の段階ですが、徐々にモデル化させていきたいと考えています。

このサーモカルスト現象が始まってしまうと、数千年も続きますから、今後の地球全体の気候を左右しかねない現象となります。

それでは、どれぐらいそういう永久凍土が溶けたら困る場所があるのか。地図は当然作られています。ヤクーツク市はこの辺りに位置します。一番ハイリスクな場所。それからヤマル半島。これはガスプロムなんかの天然ガスを採掘する場所です。この黄色いラインとかブルーのラインは、パイプラインとかパワーライン。そういうダメージを受けるだろうという可能性のある場所にインフラが配備されてあります。この赤い場所には原子力発電所などがあります。



北半球の多年凍土融解リスクマップ



つまり、まとめますと、永久凍土が融解すると、まず地中の中に何万年も眠っていた温室効果ガス(氷の中の非常に高濃度の二酸化炭素とメタンガス)が一気に放出される。それからこれまで二酸化炭素を吸収していた森林が突然湿地になる。これは温暖化効果ガスの吸収源が放出源になるということを意味します。しかし、この永久凍土の融解のメカニズムについては、私は少しお見せしましたが、よく分かっておりません。地下水の量はどれぐらい地球規模で存在するか。これも分かっておりません。従って、二酸化炭素とメタンの放出量も分かっておりません。だから気候への影響も分かりません。こういう状況に置かれているのが正直なところです。

最近のヤクーツクの様子をちょっとリポートしてみます。これは紅葉で木が茶色になっているわけではありません。この2005年から4~5年間、非常に降水量が多く、冬になる前の秋の時期に大量の雨が降るということが続きました。これが気候変動と関連しているかどうか分かりませんが、この土地の底には永久凍土がありまして、要するにどこにも流れていけないような場所が多いわけです。



そうすると、雨がたくさん降ると水浸しになる面積が多くなって、ついにはこのタイガの木々たちが根っこの酸欠で死んでしまう。こういう現象はここ 100 年ぐらいなかったらしく、もしかするとこれから劇的な生態系の変化が起こる始まりなのかもしれないというふうに思います。人々の生活にも非常に影響しまして、永久凍土の中をくりぬいて食料の貯蔵庫にしている人たちが多いのです。魚を捕ってくると地下の倉庫に蓄えるわけです。ここはマイナス 10 度ぐらいに年中保たれております。これが水浸しになってしまった。ここの家の人はこの穴を掘ったのは 30 年前だというわけで、30 年間はそういうことはなかったわけです。水浸しになると、一冬越すと全部凍り付いて、もうそこは使えなくなって、氷の上に食料を置いているというふうな状況です。

この後は、私に関わってきたロシアの他の部分についてスライドショー的にお見せしていきたいと思います。

グドリュツェフ記念凍土学教室
での授業風景



これは私がモスクワ大学に在外研究員として 1 年間行っていたときの写真です。世界で唯一凍土学を専門とする学科、学科の単位で凍土学、学科全員が凍土に関する学問をやっているという場所がモスクワ大学。そこで一般凍土学という授業は、ほぼすべて地質学、地理学の学生が受



けなければならない必修科目です。彼らは、経済大国ロシアの拠り所であるヤマル半島に送り込まれるべく教育されている。ヤマルでは天然ガス、ガスピロムが非常にお金を投資しまして、数十年かけて天然ガスの一大特権を築いています。ここはもちろん永久凍土帯ですから、凍土の研究が必要で、ソビエト時代はチュメニ油田などに依存していたのですが、現在の経済的な拠り所はヤマル半島の天然ガス。凍土を研究していると、学会などがこのヤマル半島の麓で開かれたりします。人が住めそうにないような場所で、原住民はテントを張って遊牧民が暮らしています。ナディムという拠点の街の中でガスピロム専用のダイヤモンド・ホテルという、1泊300ドルのホテルがあります。でもガスピロム後援のおかげで、このホテル代はただで泊まれる。行ったのは2004年ですから、もうロシアが飛ぶ鳥を落とす勢いだった。それでヘリコプターに乗せられて、天然ガスの採掘基地を惜しげもなく見せるわけです。この下は全部永久凍土ですから、どれだけ大変なことをやってのけたのか、どうだ、すごいだろーというような、本当にそういうツアーでした。そこで働く人たちの生活サポートも非常にしっかりしており、食堂もしっかりしているし、ヨウ素不足に対応する岩盤浴をする保養施設もあつたりして、至れり尽くせりの場所です。

また2005年にアルタイ地方に行く機会がありました。ここは4カ国国境が重なっている境界地ですので、ここに入る際には特別な許可が必要です。私のパスポートはたくさんロシアのビザがありまして、その時有効だったビザを見つけてもらえず、期限が切れたビザを持って入域しようとしていると国境警備員に誤解されました。私のカウンターパートの人が呼び出されて、1時間、2時間出てこなかったのです。1時間、2時間して出てきたら酔っ払って出てきて「お前のビザは期限切れだったからむちゃくちゃ飲まれたよ」と言われ、「いやいや、ちゃんとしたものがここにあるでしょう」と言ったら「ああ、どちらにしてももうOK。どうでもいいからもう行こう」という感じで。

この地は学問的にも空白地帯です。まだ地理学的な調査がよく入っておらず永久凍土がどう分布しているかも分かっていない。アメリカの研究者も狙っている場所です。すんなり入れたのでびっくりしました。どこに行くにも、どこに行っても、ロシア人の自然科学者は非常に強いフィールドワーカーの集まりです。どこでも何でも生きていけそうという技術を、学生のころから仕込まれます。学部2年生ぐらいから夏休みの1、2カ月はフィールドに送り込まれて、食料もたいして持たずに送り込まれるというようなスパルタ教育がなされている。それは普通のことです。

また、今年(2010年)の話ですが、極北シベリアの拠点チョルダに行ってまいりました。今の上司が始めた研究サイトがここにあります。ここにコリマ川、インディギルカ川があり、ソビエ



ト時代から若者地質学者、地球物理学者が、給料を3倍やるからここで地下資源を探查してこいと言ってどんどん送り込まれた場所です。80年代ぐらいまでは『コリマ』という学術雑誌が毎月発刊されていた場所です。ソビエト連邦が崩壊したらみんな逃げ出して、非常に寂れましたが、電気も水道もあってちゃんと人は住んでいるというような場所です。毎年1年に1回だけ船で北極海から大量の物資、食料を運んで来る。それ以外はちょくちょくと飛行機で食料が運ばれる。ですから毎年秋口になると、今年の冬が越せるかどうか、燃料は足りるのかという問題がニュースで流れます。主な産業は漁業です。非常に豊富に魚が獲れます。それから野生動物が豊富なので肉もとれる。あと、マンモスの牙を大量に船からジープで運び込んでいるのを見ました。我々はこのツンドラ域でも蚊にまみれて調査しています。

私の中ではいろいろなロシア人というイメージがあるのですが、ロシア人が環境に対してどういうふうにいるのか、そして我々研究者は研究結果をどうアウトリーチしていくべきなのか、今のGCOEグループではその問題をたたきつけられています。

Умом Россию не понять、ロシアは頭では理解できない、一般的な尺度では測れない、ロシアに特別な状態がある、ロシアを相手にするのなら信じるのみであるという、非常に有名な詩があります。ロシアにいと、ロシア人自身もあきれられるようなことがたくさん起こるわけです。そういうときに「何でロシアはこうなんだ」と僕は日本人として言うと、いつも頭で理解できないのだ、というふうに論されるわけです。ロシア人は自虐的な何かユーモアというのを持っています。もちろんソ連崩壊で打ちのめされた事実もありますが、我々外部者が彼らと同じような批判をすると、非常にプライドをむき出しにして反論してきます。

やはり、僕はいろいろな国に行きましたけれども、人と接した中で、あんなに強いというか、あらゆる意味で強い国民はロシア以外には見当たらない。それは大自然が彼らをそうしているのではないかと。怠け者だとか非常に粗悪なものを作るとか、そういうイメージがあり、彼ら自身もそう言いますが、本当は自分達はそういうふうには思っていないと思うんです。非常に自信を持って、俺たちはこんなところで生きて、何年もやってきたんだと。もちろん独自の自動車業界なんかは海外の企業に頼り切りの状況で、町では日本やドイツの車ばかり走っている。しかし、同時にアメリカがスペースシャトルを飛ばせないような時代でも、ロケットをずっと飛ばし続けているのもロシアという国です。これからも地下資源をどんどん掘っていくと思います。特に億万長者のあのアブラモビッチなんかは、極東のチュコトとかの方へ行って金とか銀とかを掘っていて、これからどんどん発展していくのだろうというふうに私は感じています。この発表に特にまとめはありません。こういうところで私はこういうことをやってきましたということこ



ろであります。ありがとうございました。

(司会) ボーダースタディーズで言うと、極地研究というのは非常に相性がよく、極地とか北極圏の研究とかは結構あるのですが、しかし永久凍土の話が出てきたというのは初めてです。6月にフィンランドの研究者にお前も北極に行けと誘われているので、今日はいいい勉強になりました。いろいろ多岐にわたる話なので、どなたからでも質問を何なり。

(田畑、スラブ研)

講演の中盤のところ、いろいろなことが分かってないということと言われて、自然科学というのはそんなにたくさん何も分かっていないということが分かったということが、一番今日は感銘を受けたところです。

あまり関係しない質問ですが、石油ガスのことだといつも本村真澄さん(JOGMEC)が来てくださり、いろいろな話をしてくださります。彼が1つ言うのは、地球温暖化のことで、温室効果ガスが増えて地球温暖化するという常識が逆だと。つまり、地球温暖化があるから温室効果ガスが増えているのではなく、まったく反対のことを言っているのですが、自然科学者の間ではそういうことについてはどういうふうに理解されていますか。

(岩花) 気候変動関連の多くの研究者は、本村さんとは逆の、温暖効果ガスが原因で地球温暖化するというのが共通認識です。それに対抗する形で温暖化懐疑論の人たちがいくらかいるのですが、そのうちの懐疑論の中の一部は、温暖化の原因は温暖効果ガスがトリガーではないという方がおられる。しかし非常に少数派であり、根拠とする研究が説得力に欠けているものが多いと考えられています。だから逆に、本村さんがどういう理論でそう言われるのか興味があります。

(司会) [今度1度対決してもらいましょう。](#)

(兎内、スラブ研) ずっと前に永久凍土について話を聞いたことがあり、それで湖、沼みたいなのができて、だんだん陥没して行って、森林が失われていくというプロセス説明を受けたと記憶しています。今日お話を伺うと、そうなることもあるし、そうならないこともある。そうならない方が多い、というお話だったと思いました。ただ、衛星写真を見ると結構丸い禿げた場所というのはかなり広がっているような感じになっていて、これからも増えていくと思った方がい



いのでしょうか。それともあまり増えないかもしれないと思った方がいいのでしょうか。

(岩花) 増えるのは確かだと思います。逆戻りできないような現象なので。ですが、それはどれぐらいの期間でどれぐらい減るかという問題になってきます。そういう意味では、予測でしか言えないのですが、今お見せした、あのパッチ状の穴といいますのは、8,000年間かけてできたものです。

ですから、我々が生きているせいぜい100年とかの間に目に見えて増えるかということ、そうではないと思いますし、もしかすると劇的に穴が大きく広がるかもしれないとも言えるのですが、私の考えは、できやすい場所にはもうできてしまっていて、これからは相当なショックを与えないとあれはできないのではと思っています。

(兎内) その下にある温室効果ガスがどんどん出てきて、温暖化が飛躍的に進むのではないかとこの危惧は、もしそういう線で理解すればそれほどひどくはならないと。

(岩花) そうですね、正直言ってそんなことは起こらないかもしれない。起こらないだろうなと思いつつ、ただ、それはいろいろな仮定を置いて、計算してみないとインパクトというのは分かりません。分からないことをたくさん羅列しましたが、信頼性の議論をわきに置いてでもモデルのシミュレーションを使って推測していきようなことが必要とされるのかもしれない。

(宮崎、北大 GCOE「統合フィールド環境科学」) さきほどのアラスとの違いで、土質とかそういうのは何か違うのでしょうか。

(岩花) あります。今日、エネルギーバランスの比較を見せましたのは、地面の中にどちらもあれだけの巨大な氷がある場所で、表面がかく乱を受けるとどうなるかという話ですね。でも実際は、すべての場所にあの巨大地下氷があるわけでない。掘ってみないと分からない。何かこの辺はたくさん穴がぼんぼんできるな、この辺はほとんどないなということで、掘ってみると氷がなかったりとかという状況証拠はあるので、場所によっては全くサーモカルスト現象が起こらない可能性、場所は当然たくさんあります。

(宮崎) この違いは全部掘ってみないことにはよく分からないというか。



(岩花) いろいろな物理探査、間接的な方法で知る。直接掘ってみる。石油を発見するよりは簡単だと思うので、僕は本当にそれをやるべきだと思っています。どれぐらい氷が地下に眠っているかという課題は、石油とかダイヤモンドを当てるよりは簡単だとは思いますが。

(後藤、[比較地域大国論](#)) ロシア人の環境意識は結構受動的というか、もう神様に逆らうことはできない、人がその環境に対して何かをするというよりも、なるようにしかならないというふうな意識をされているかと思うのです。科学者としては、やはり変動する気候というものを何とか保全していくというような環境に働き掛けていかないといけないというふうな意識で、住民と科学者の意識にかなり違いがあると思うのです。その辺、人の環境の意識を調査する上でどういうふうな目的を持っているのかというのをお聞きしたいです。

(岩花) これは僕自身も自然科学者、外国でやっている者としていつも考えています。自然科学者といっても、主に実学をやりたい人と真理の追究をやりたい人に、大きく分けられると思うのです。実学をやりたい人というのは、何か役に立つこと、直接人間に役に立つこと、例えば地球温暖化をストップさせるというグループ。それからただ何で温暖化する、何で永久凍土が溶けるのか、それが知りたい。何で霜柱が立つのかを知りたいというグループ。僕は後者の方です。だからといって社会的な責任から逃れられませんので、必ず私がやることは何に役に立つのかと考えます。まさに今のプロジェクトはそれを突きつけられているわけです。何もできないと言っている住人に、何かを諭して、車に乗らないようにするというわけではなくて、自分で考える力、自分で情報を何か処理したり取ってきたりする能力を持ってもらうというのが一番いいのではないかと思います。

そのためにはまず、自分たちが環境に対してどういう考えていて、世界の中ではどういう位置を占めているのかというのを考えてもらう。僕はいろいろな人に突撃インタビューをしています。最終的にそれを彼らに見せたい。見せてどうするこうするというのは考えていなくて、見せて考えてもらう。それで彼らが何か欲してきた場合は、何かこちらでソースを与える。

(宮本、GCOE) 先ほどから環境意識という言葉が出ていますが、温暖化についてどう思うかを問うときに、やはり相手がその用語にのっとって語るができるかというのは、そう語るための言葉を持つ機会が必要だと思うのですよね。そう考えると、私たちが地球温暖化を当たり前



語ることができるのは、学校教育が非常に大きいと思います。調査地での環境教育というものがどうなっているか、つまりそうしたグローバルな環境問題を語るための用語みたいなものを植え付けるような教育というものがされているのか、その環境教育というものがどうなっているかというのが1つ目の質問です。

それに関連して、先ほど森林がなくなったところでの永久凍土の変化が語られましたが、環境教育って、私たちが温暖化を止めるためにどうするべきかなんてことは、自分たちの頭で考えたわけではなく、CO₂云々を科学者から言われた中で、それにどうにかしようという形でいろいろな方策を出していったと思うのです。一般的には市民が環境保護と言うと、植林みたいなことを考えますけれども、そうした動きが、ロシアの文化の中にあるのかどうかを知りたいです。

(岩花) インタビューをして感じたことに、こちらがどういう聞き方をするのか、ヒントを与えるのか与えないのかで回答が変わってくる。それがどのように回答に影響してしまうのかに関してはまったく素人で知りません。自分は、もちろん何の情報も与えない、なるべく少ない情報で彼らが気候の変化を感じているのか否かというところからスタートしている。

それから環境教育ですが、行われていると言えれば行われています。NPOがたくさんあり、特にサマーキャンプという形で、親たちが子供をどこかへ送り込む。若い先生たちに環境教育というものもあります。そこには専門家が招かれて行ったり、という活動は、日本よりもやられています。植林もやっているところはやっています。商業的に伐採する際も、それが自然を守るような形でやるとか、植林をしたりとかということは、法律レベルで結構あります。ただ、法律はあるのですが、ちょっと裏では何でもありの国。全体としてどう機能しているかは分かりません。習慣としては、極一部に環境意識の強い市民がいる気はします。ほとんどのロシア人はゴミは捨て放題、木は切り放題、狩りはし放題。それでもなお余りある大自然が存在しているという感じです。

(山下) 簡単に補足をすると、環境と言ったときに我々はもう自動的に気候変動というのが刷り込まれています。僕らが実施した環境意識というのは、彼らが毎日の生活の中で感じている一番高いプライオリティーとして何を思うかというのをまず聞き出す。彼らの生活の中で思い出せる範囲の変化を聞く。少しずつマイクロからマクロにつなげていくということが非常に重要だと思っています。

もう1つは、適応なのか緩和なのかという議論で、実は両者は全然違う話で、環境に対して適応していくのか、環境に対して働き掛けるのかという整理というのは、我々だから簡単に話せる



ことであって、彼らの思う環境というのがどんな形をしているのか、そこから何が前進していくことができるのかなということから入ります。具体的かつ明日からできるものを探すということで、地球がどうなっていくかという深入りはしていません。

(宮本) 彼らにとっての環境がどうかというのを知るとするのは、すごく共鳴します。私もそういうスタンスでフィールドワークをしているところがありますので。ただ、それを聞くときの言葉というのはすごく難しいと思うのです。こっちが当然のように使っている言葉を相手に投げ掛けることで、本当にそれが得られるのかという問題があります。彼らの生活スタイルを隅々まで知った上だと、聞き方というのはまったく変わってくると思うんですよね。近くの木が減ったかとか、土の質がどうだとか。生活に密着した点でしか答えられないところを、ちょっと上の抽象的な概念で聞けば、まったく違う答えが返ってくるでしょう。私が言いたかったのは、地球環境問題を語れと言っているのではなく、その聞くときの用語というのがどういうものなのかなということなんです。

(岩花) まず第一問は「気候の変化を感じますか」、気候という言葉は子供でも非常にぱっと返ってきますね。彼らは彼らなりの時間尺度でぱっと答えるわけです。人によっては「今年は暑かった」「暑くなった」と言う人もいるし、10年ぐらいのスパンで答えてくる人もいます。それはどれでもいいと思うのです。次に、「ここは非常に寒いところだけでも、あなたにとってこの寒さというのは必要なものですか」と問う。寒さというものの重要性を僕は聞きたいと思って。彼らがそれをどう感じていて、それは失いたくないものなのか。地球温暖化するとそれはなくなるかもしれない。それは怖いものなのか、それとも必要なものなのか。そこにターゲットを絞って聞いています。

(司会) もう時間ですが、今の話を聞いていくと、調査官に文学者も入れた方がいいような気がしてきます。マロース(厳寒)は必要かと言ったら、ロシア人は絶対必要だと言うような気もします。スラブ研究センターもフィールドワークをやっていますが、岩花さんの調査に比べると大したことがないですね。凍土学教室か何かで1年間修行してもらってから、入ってきてもらったらいいかなと思いました。どうも今日はありがとうございました。



北海道大学グローバルCOEプログラム

📍 ライブ・イン・ボーダースタディーズ

アムール川とオホーツク海:陸海境界・国境を越えた環境システムの発見と保全

日時 2010年6月1日(火曜日) 17:00-18:30 スラブ研究センター4階大会議室

報告者 白岩孝行(北海道大学 低温科学研究所)



北海道大学グローバルCOEプログラム
境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界



スラブ研究センター

第7回 GCOE・SRC ボーダースタディーズ・セミナー

魚付林。岸辺の森から流れ出す栄養分が沿岸に藻場を作り魚を育むことを指す言葉です。近年、アムール川からもたらされる溶存鉄が、オホーツク海の生き物を育てている可能性が浮かび上がってきました。

日中露の国境を越え、また陸と海の境界を越え、この壮大な環境システムの保全についてどう取り組むべきか。

アムール川とオホーツク海

-陸海境界・国境を越えた環境システムの発見と保全-

白岩孝行(北海道大学 低温科学研究所)

参加自由

会期 | 2010年6月1日[火] 17時-18時半

会場 | 北海道大学スラブ研究センター4階大会議室
[札幌市北区北9条西7丁目]

お問い合わせ | Tel: 011-706-4809/3314 E-mail: fujimori@borderstudies.jp
URL: <http://borderstudies.jp/>





(司会) 今日のお話の舞台は、私個人としても非常に馴染みのある中国とロシアです。白岩さんが、北大低温科学研究所から総合地球環境学研究所(地球研)に移られたとき、文化系の私も参加しました。最初の段階で、「アムール川の調査をするのでどういうところか教えてくれ」と言われて1、2回か教え、終わるころになり、政策提言をしなきゃいけないか、ということでまた少しお付き合いしたことがあります。最近は文理共同のプレッシャーが強くて難しい。今日は、白岩さんが、総合地球環境学研究所の任期を無事に終えて札幌にお戻りになったので、勉強させていただこうと思いました。よろしくお願いします。

(白岩) 今日は、「アムール川とオホーツク海：陸海境界・国境を越えた環境システムの発見と保全」というタイトルでお話をさせていただきます。この仕事は、この5年間、北大低温研と総合地球環境学研究所が共同で進めてきたプロジェクトの成果です。アムール川とオホーツク海というのが今回の仕事のキーワードになるわけで、概要だけ紹介させていただきたいと思います。

アムール川流域というのは大陸の東端にある、面積にして205万km²の大きな流域です。アムール川というのは太平洋に注ぐ川としては一番長い川で、世界でも8、9番目に大きな流域面積を持つ川です。そのアムール川の流域と同じぐらいの185万km²という面積でオホーツク海という北海道の北に広がる海があります。そのさらに東側には太平洋が広がっていますが、特にこの北海道から三陸沖にかけてを、私たちは「親潮域」と呼んでいます。今日の話は、このアムール川流域とオホーツク海と親潮域が、何らかのメカニズムによってつながっているという話を中心に なります。

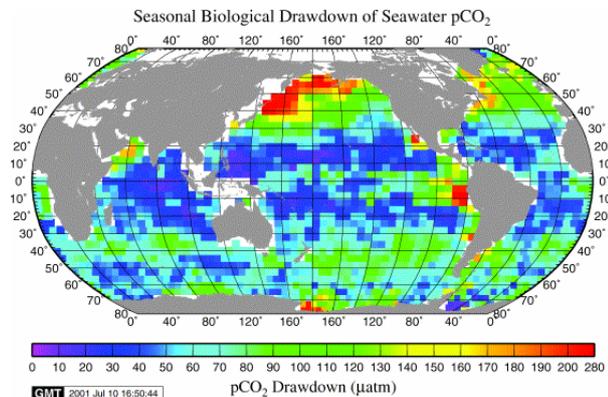
特にこのセミナーでは、国境、あるいは境界というキーワードとの関連が求められておりますが、この仕事をやっていく過程で、国境あるいはこういう海岸線との境界というのを非常に強く意識しました。

アムール川流域というのは、皆さんご承知のように3つの国からなっています。緑色の部分がロシア、紫色がモンゴル、黄色っぽい色のところが中国です。アムール川はモンゴルのウランバートルの東側、オノン川、ヘルレン川を源流域として、中国とロシアの国境を流れて、最後はロシア領内を流れて、サハリンの西側、間宮海峡でオホーツク海に注ぎます。アムール川の水は一部日本海に行くのですが、大部分はオホーツク海に流入しています。アムール川はその大部分を中国とロシアの国境を成している、そういう川です。日本とロシアと中国の3国が対象になります。

アムール川というのは私たちにとって非常に身近な川です。例えば2005年、アムール川の1



つの支流である松花江で中国の石油化学工場が爆発して、大量のベンゼンとニトロベンゼンという有害物質が川に流れ込みました。11月25日に起こった事故ですが、約1カ月かけてベンゼンは、ハバロフスクに流れ込みました。その後、アムール川全体が凍ってしまったのでこのベンゼンがどうなったかは分からなかったのですが、翌年氷が解けてから河口まで達して、オホーツク海に流れ込んだことは間違いありません。もし河口にニトロベンゼンが流れたとすると、その後、どういふうに日本にやってくるか、数値シミュレーションというモデルを使った計算があります。10月にはアムール川の河口からサハリンの東岸に沿って流れてきます。その2カ月後の冬になると北海道のオホーツク沿岸に達してしまうと、こういう関係にあります。



もう1つの私たちの興味の対象は親潮域とオホーツク海です。親潮域とオホーツク海は、非常に生産性の高い海です。魚が捕れるということは自然科学の分野では漁獲量のデータとしてしか得られません。これは魚が生息するもとなる植物プランクトン、陸上でいえば植物に相当します、海洋生態系の一番基礎を成している生物です。これは植物プランクトンがどのぐらいいるかを色で示した図です。実際にこれは植物プランクトンではなく、海洋の表面で二酸化炭素が1年間にどのぐらい出入りするかを色で表したものです。二酸化炭素というのは水温とプランクトンの発生量で決まっています。プランクトンは光合成をするときに二酸化炭素を吸収して育った後、分解していく過程で二酸化炭素を放出します。ですから、たくさんプランクトンができて分解する海域は二酸化炭素の交換が大きくなるということで、この赤いところになります。

こうして見ていきますと、オホーツク海とその東に広がる親潮域というのは、世界的に突出した生産性の非常に高い海だということが分かります。現在ではオホーツク海は日本の13%ぐらいの漁獲高を占めています。それから親潮域も非常に多くなってしまっていて、現在、親潮とオホーツク海を合わせると、日本の半分ぐらいの水産資源がこの水域から揚がっています。



また、ロシアは非常に広大な国であるにもかかわらず、オホーツク海に水産資源の半分を依存しています。ですから、日本以上にロシアにとって、オホーツク海というのは重要な海です。その他、中国、韓国も最近ではこの海域の水産資源を利用しているわけで、この海域は私たちにとって、死活的に重要な海であるということが分かります。

このような背景のもと、今日、私からお話ししたいのは4つの点です。まずオホーツク海と親潮域がどうして豊かであるのか。私たちはその原因が大陸から供給される鉄であると考えており、そのメカニズムについて紹介させていただきます。鉄はアムール川流域から出てくるということが分かっていたのですが、どうしてアムール川流域がそういう鉄を生み出せるのかを2番目にお話しします。

このアムール川からオホーツク海に至る大きな自然のメカニズムは私たちにとっては非常に驚きだったのですが、現在、さまざまな理由によって劣化しつつあります。地球温暖化、それからアムール川流域の土地利用変化によって劣化しつつある事例を第3に紹介していきたいと思えます。こういう問題が、今後、オホーツク海、親潮域の水産資源に対してさまざまな影響を与えていくとすると、私たちとしては何らかの方策で、現在の状態をそのまま持続させていきたい、という考えになります。

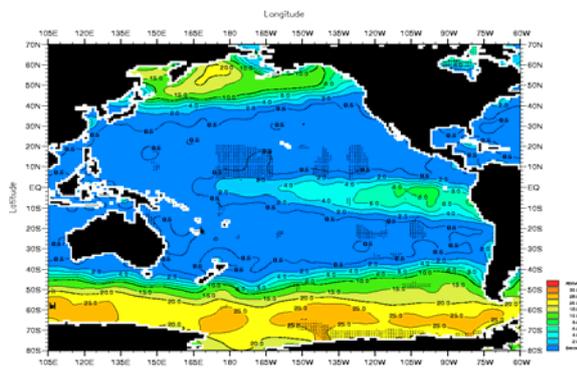
そのときに問題になるのが、アムール川、オホーツク海、親潮域という多国間の領域にまたがる「越境環境」です。広大な国、多国間を貫通する環境システムをどういう形で維持していくか、これは自然科学だけでは解決できない問題で、さまざまな他分野との共同が必要になってくるところで、私たちのプロジェクトではこの部分を検討しましたのでここで紹介して皆様のご意見をいただきたいと考えています。

最初にこのプロジェクトの基礎になる話を紹介させていただきます。海の世界連鎖の一番基礎にあるのは植物プランクトンです。植物プランクトンは海洋にはどこにでもあり、光合成によって、つまり光と水、二酸化炭素を使って炭水化物と酸素を作り出し、それによって生育しています。その植物プランクトンが動物プランクトンに食べられ、動物プランクトンが魚に食べられ、魚は大きな海獣に食べられるという繋がりがあります。

今日の話の中心は植物プランクトンです。プランクトンは光合成をするときに光と二酸化炭素を利用いたしますが、そのほかにもう1つ、栄養塩と呼ばれている塩が重要です。海洋中には窒素とリンとケイ素という形で存在していますが、これを利用して光合成をします。従来、栄養塩が豊富な海というのは豊かな海である、と考えられてきたのですが、10年ほど前からそれは違う



のではないかとこの考えが出てまいりました。この図は夏の太平洋と南極海の栄養塩の濃度、栄養塩の1つの硝酸塩(NO_3)の濃度です。



色が付いているところは濃度が高い場所ですから、従来の考え方ではこの地域ではプランクトンがたくさんできないといけないのですが、現実には夏になっても栄養塩が残ったまま、プランクトンの生育が止まってしまうという状態がこの海域で見られます。ですから、たくさん栄養があるにもかかわらずその栄養を使えるプランクトンが成長しない、そういう海域です。10年ほど前からその原因が鉄の存在であることが分かってきました。鉄というのは、我々にとって非常に身近な金属です。陸上にはふんだんにあります。一方、鉄には水に溶けにくいという性質があり、海洋の水の中の鉄の濃度は非常に微量です。そのために十数年前まではこの鉄の濃度を測定することができませんでした。しかし分析機器の発達によって現在、この鉄の濃度が測定されるようになって、鉄の存在が浮かび上がってきたわけです。

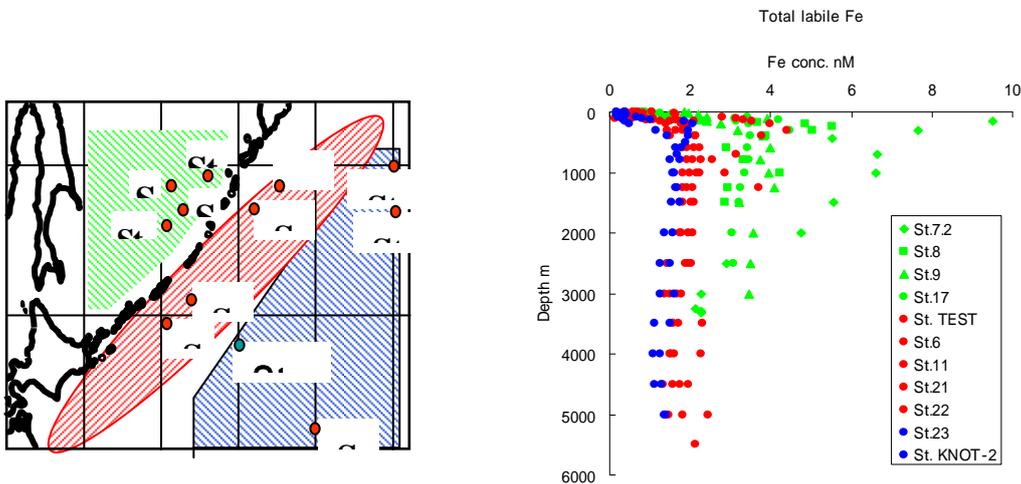
なぜ鉄がプランクトンにとって必要なのか。プランクトンというのは窒素、硝酸塩を栄養塩として利用するのですが、そのまま利用することはできません。この硝酸塩とか窒素を還元して、亜硝酸とかアンモニアに変えてはじめて利用することができる、そういう仕組みを持っています。このときに、硝酸を亜硝酸、アンモニアに還元するときに鉄を利用します。鉄は酸素と結びやすい性質を持っています。私たちは肺で呼吸をして、酸素を取り込んで血液の中にあるヘモグロビンという物質に酸素を結び付けて、血管を通して末梢神経まで運んでいます。末梢神経に行ったときにその鉄を放して、ヘモグロビンが心臓に戻って、また肺で酸素と結び付く。植物プランクトンも同じように鉄が酸素に結び付きやすい性質を利用して、これを自分に利用しやすい形にして取り込んでいるというわけで、鉄が必要になります。しかし、先ほど言いましたように、海の水は鉄を溶かさないので、海には鉄が非常に限られている。こういう海では栄養塩はあるのです



が、鉄がないために栄養塩が使えない。

親潮、オホーツク海は、非常にたくさんのプランクトンができます。親潮域と太平洋のほぼ真ん中付近、それとアラスカ沖を比較してみますと、親潮域というのは飛び抜けて植物プランクトンができる海域です。どうやら親潮にだけ鉄がたくさん供給されている、ということが今から6年ぐらい前にいわれてまいりました。

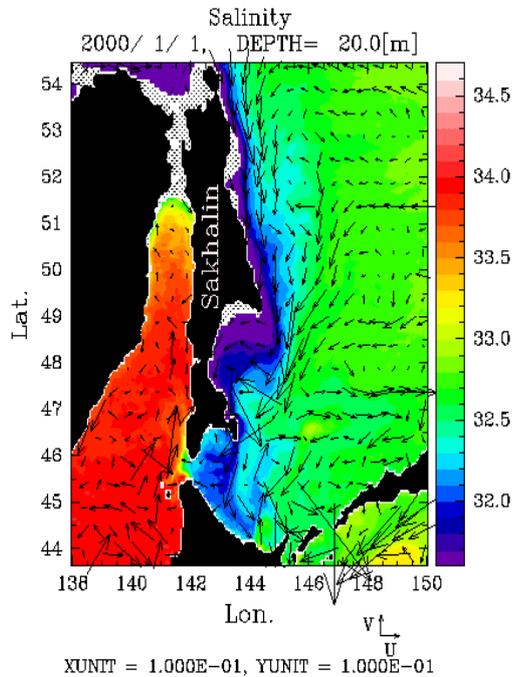
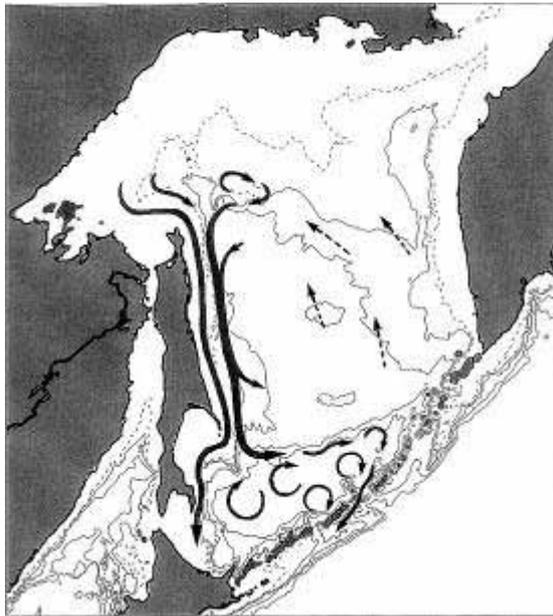
従来、鉄というのは、空から供給されるという一般的な常識がありました。例えば私たちが住んでいる日本では、大陸から鉄を含む黄砂が春になると飛んできます。親潮域で鉄が多いのはこの大陸から飛んでくる黄砂の影響であるといわれていました。



オホーツク海～親潮域～太平洋の海域において海の深さ方向に鉄の濃度を見てみるとオホーツク海に行くほど鉄が濃く、かつ鉄の量が多いのは表面ではなくて、5,000m から 500m 付近の層だということが分かってきました。もし、黄砂のように上から鉄が来るのであれば、表層で一番多くなるはずですが、そうでもないことがこのプロジェクトを始める前に分かってきました。

もう1つ重要な発見がありました。これは低温科学研究所の若土所長(当時)を中心とするプロジェクトが、オホーツク海には鉄を運ぶ特異なメカニズムがあるということを示したことです。オホーツク海は冬に凍る海です。北半球の中ではオホーツク海が一番南まで凍る。

11月にオホーツク海の氷はアムール川よりさらに大陸側の部分で作られます。それがアムール川の近くを通過して南へ風によって流されてくるわけです。2月になると、多い年だとオホーツク海全域が氷で埋まってしまう。3月に入り始めてだんだん氷がなくなって、北へどんどん後退してまいります。このように毎年、毎年オホーツク海では氷ができますが、この氷ができることによってオホーツク海には特異な海洋循環が起っています。

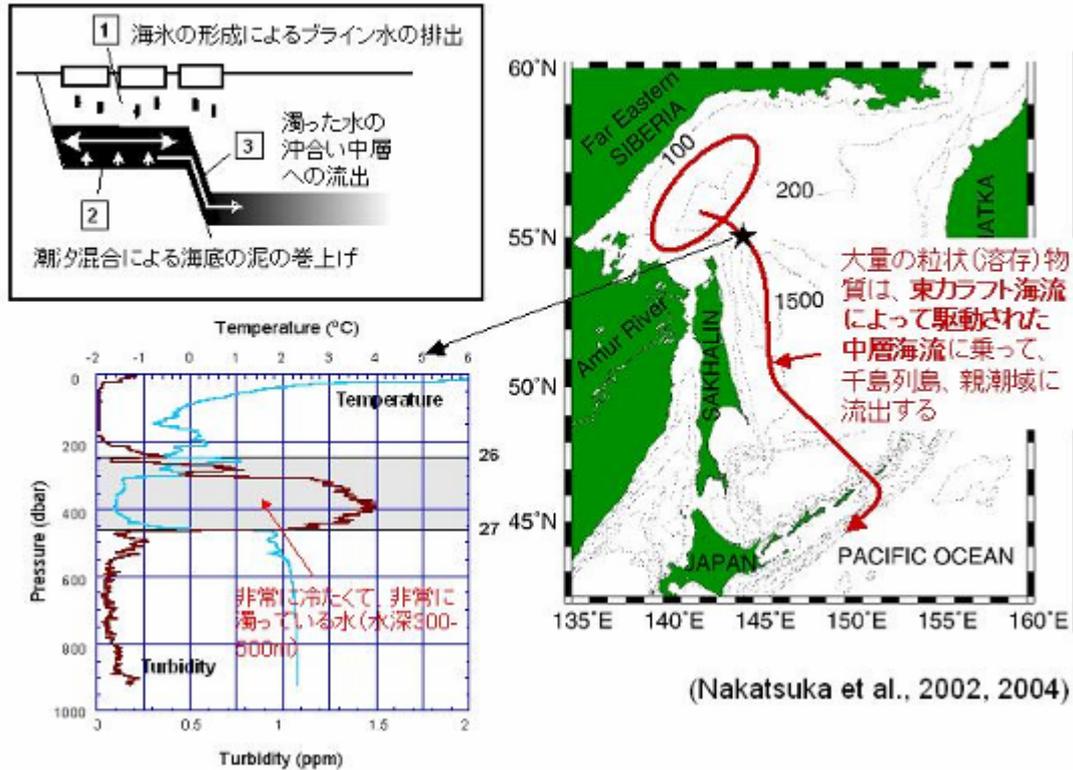


オホーツク海の海洋の流れを示した図ですけれども、10月に青い水が南へ流れてきます。これは冬の間、流れてくる東樺太海流という強い海流ですが、黒潮の半分ぐらいの強さを持つ流れです。夏になると止まってしまうと、対馬暖流がオホーツク海に入ってきますが、また冬になるとこれが流れてきます。このように海水ができるということと、強い海流が存在しているということがオホーツク海の特徴です。

平面的に描きますとこういう図になります。北海道とサハリンの東側を強い東樺太海流が南に流れていき、こういう状態になります。ここから先が低温科学研究所の非常にユニークな発見だったんですが、このオホーツク海において垂直方向に水を測ってやると、特異な水塊があることが分かりました。これは縦軸が表面から1,000mまでの深さ、横軸は水温と水の濁り具合を示しています。ちょうどこの250mから500mぐらいのサハリンのこの部分ですが、ここで見つかった水塊で、水温が低くてたくさん濁った物質を含んでいる、懸濁度が高い水塊が見つかりました。



海水によるオホーツク海の北西部大陸棚から外洋中層への物質輸送



オホーツク海で見つかったこの水塊がこれからの話のキーになります。これの形成メカニズムですが、塩水が凍るときに、氷というのは水の結晶ですから、なるべく不純物を吐き出して純粋な結晶を作ろうとします。その結果、氷ができることによって、その下には不純物が吐き出されて、この不純物を含んだ水、しかも凍って冷たい水は密度が大きくて沈み込みます。その重い水が沈み込み大陸棚に積もって、そこから外洋へ出ていきます。まさにこういうオホーツク海で氷ができるということによって、この冷たくて濁った水がこのオホーツク海の中層を流れている。オホーツク海を流れる非常に大量の懸濁物質に含まれる鉄が私たちはオホーツク海、あるいは親潮という非常に豊かな海を、支えているのではないかと、思っています。ここまで分かった段階で、このプロジェクトの立ち上げを行いました。

私の当初の立ち位置は、海洋においてどういうことが起こっているかを調べるということから始まったのですが、このアムール川流域と海洋の鉄のつながりを調べるのが最初の課題です。そのときに大事だったのは、アムール河口域ですね。ここでは真水が塩水に移り変わるわけですから、さまざまな研究が行われました、この河口域を大事に扱おうということで鉄の流れを調べました。

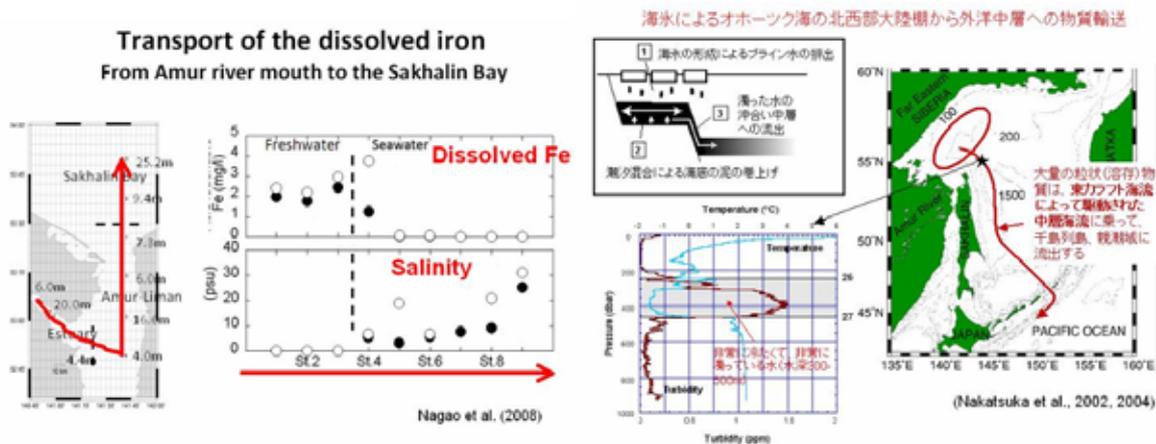


総合地球環境学研究所でやるということ、もしこの大きなシステムに劣化が起きているとすると、それは間違いなく鉄を供給する陸地の変化だろうということを想定しまして、土地利用変化を調べよう。その土地利用変化には経済、あるいは政治的、あるいは社会学的な変化がその背景にあるだろうと。そこまで調べることによって、このシステムに劣化が起きているとすると、解決に糸口が見いだせるのではないかという考え方でした。

もしそういう変化、あるいは将来にわたって持続可能性が問われるようなことが起きているのであれば、現在、手を打つための政策提言をしようということを最終的なゴールとして掲げておりました。

この最初の仮説をもう1回、繰り返させていただきますと、アムール川が鉄を運んで、河口域まで到達します。河口域において何が起きているか、あるいはどのように南に輸送されるか、千島列島を通過するときどのようなことが起こるか、そして親潮でどのように利用されているか、このようところが私たちの海での観測の中心になりました。

河口域で鉄はどうなっているのでしょうか。これはアムール川の河口域の図です。この赤線に沿って塩分濃度と鉄の濃度を測ったものがこれです。塩分濃度は当然、真水から塩水が入ってきますから、どんどん上がっていきます。それと同時に鉄は塩水が入った途端に、ほとんどなくなってしまいます。アムール川は確かに鉄を運んでいるのですが、海に入ったところで塩と鉄が反応して沈殿して、表面の水からはなくなってしまいます。



一方、オホーツク海の表層の水に鉄はほとんどないかという、そんなことはありません。塩分濃度は外洋に行くとどんどん高くなってまいります、鉄もかなりたくさん入っています。こ



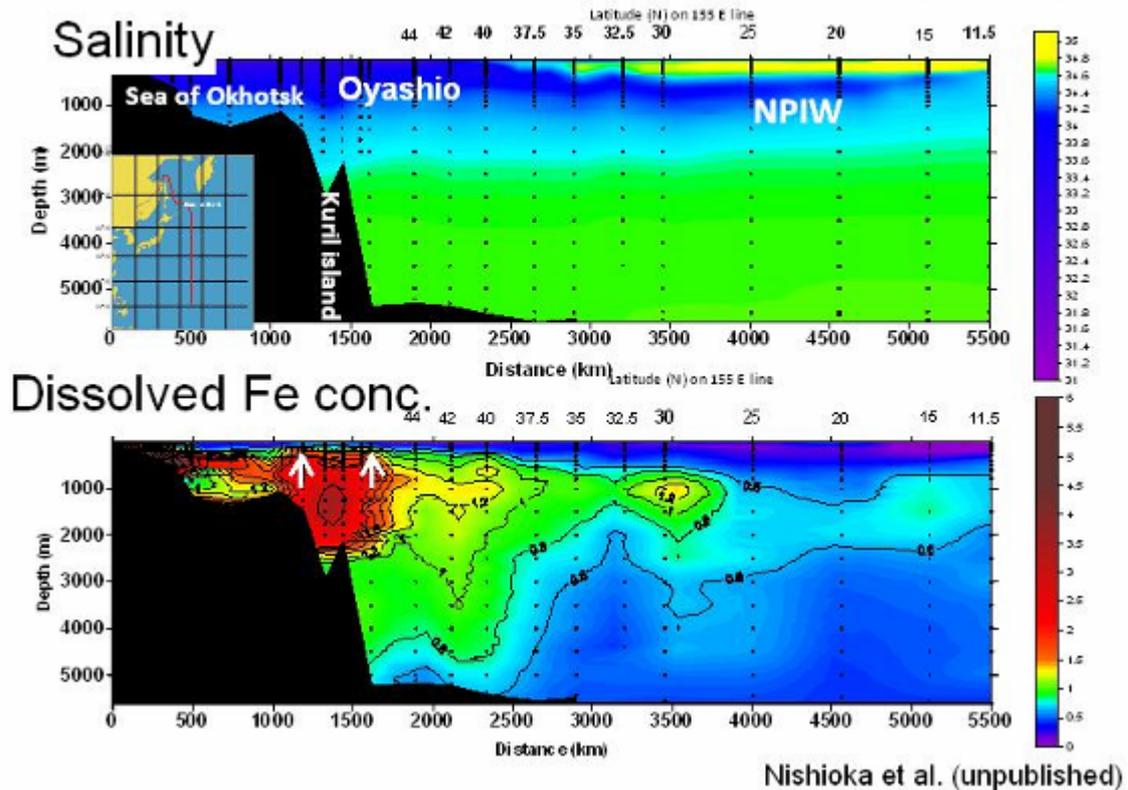
の単位は nmol(ナノモル)という 1 億分の 1 という微量な単位で、一般的な外洋の鉄の濃度は 0. 数 nmol という濃度ですが、オホーツク海で濃いところでは 50nmol、薄いところでも数 nmol という鉄の量があります。ですから、オホーツク海には鉄は十分あって、余っているという状況が分かってきました。

海の中を見てみましょう。この図はアムール川を出発点として、サハリンの東を通って、千島列島を通って太平洋の南、グアムの方まで取った断面図です。左がアムール川の方、右がグアムの方に行く断面図で、5,000km です。上が塩分濃度、下が鉄の濃度です。塩分濃度を見てやりますと、この真ん中にくさびのように入っている水があります。これが北太平洋中層水という、まさにオホーツク海で海氷ができることによって作られる、冷たくて重い水です。これが太平洋に沿ってくさびのように還流しているのです。私たちは「オホーツク海は太平洋のポンプ・心臓である」と言っていますが、オホーツク海で氷ができることによって、この冷たい水を毎年太平洋に送り込んでいる訳です。

鉄の濃度は、私たちの予想通り、アムール川からオホーツク海の中層 500m ぐらいを通って、太平洋に鉄が流出しているさまが見えてまいりました。太平洋の中を歩いていってしまうと表面にいる植物プランクトンは鉄を使うことができません。プランクトンは日光が必要ですから、深い海に鉄があるときにはプランクトンに役立つことはないんですけども、この千島列島で上向きの鉄の移動が起こっています。つまり、深いところから表面に鉄が流れ込んでいる、これがまさに鉄をこの海域にもたらして、プランクトンを増やして豊かな海にしている原因ですが、これは千島列島があることによって生じる渦の潮流と呼んでいますけれども、ここで海が上下にかくはんされることによって、深いところから上がってくる、そこでプランクトンが増えている、こういうメカニズムが見えてまいりました。



Transport of the dissolved iron 4. the Sea of Okhotsk - **Intermediate depth water**



次に、陸地へ話を進めます。アムール川が鉄を運んでいることはデータとして分かってきたのですが、なぜアムール川が鉄をたくさん運べるかを説明いたします。アムール川は非常に自然の豊かな流域です。アムール川流域にはたくさんの森林と湿原があります。これが鉄のできる場所です。アムール川の土地被覆状況ですが、ロシアの流域には森林、中国の流域は耕作地、モンゴルには草原がある。湿原はこのアムール川の中流域に広がっている、ハバロフスク近辺にも広大な湿原が広がっているという状況です。

鉄の濃度は私たちが測定しましたが、実はロシアも測っています。ロシアは第2次大戦以降、鉄のデータを連続して測っています。アムール川流域の鉄の濃度を見てやると、中流域で濃度は高く、1リットル当たり1.5ミリグラムぐらい。これはどのぐらいの量かということ、日本の川の濃度に比べ10倍から50倍ぐらい高い濃度です。

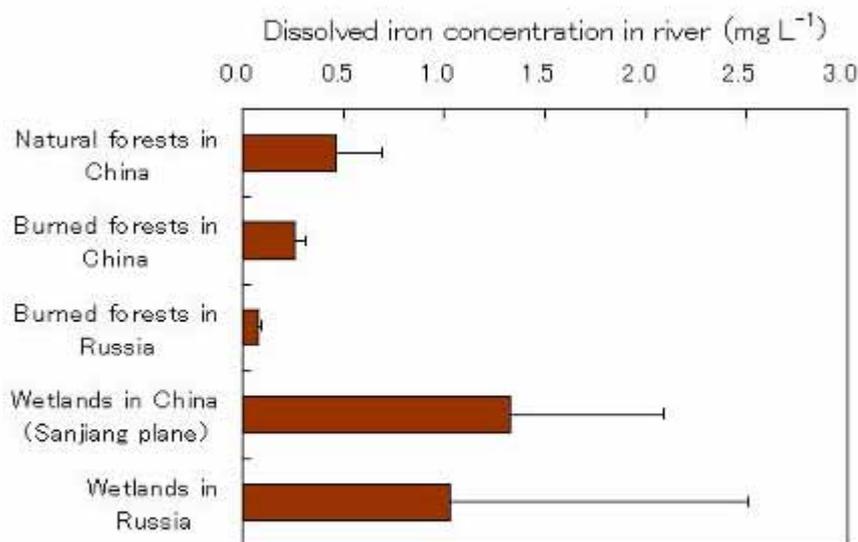
アムール川中流域で鉄の濃度が高い原因、これは中流域に湿原があるからです。湿原というのは常に水に浸っているところです。そのような状況になると水の中で植物が分解されて、分解するときに酸素を使いますから、湿原の中は酸素が少ない状況になります。そういうところで鉄は水に溶け出しています。酸素が多くなると鉄は酸素と結びついて沈殿してしまいます。鉄が水に溶け



るためには酸素がないことが条件になりますが、そういう条件は湿原が備えています。ただ、そういう湿原で鉄が溶けこんだ水も、川にはいると酸素と結び付いて沈殿してしまいます。そのときに重要なのが湿原の背後にある森林地帯です。森林地帯では腐食物質と呼ばれている有機物が形成されます。この有機物は鉄と結び付くことによって、鉄は溶けたまま水の中を流れることとなります。こういう物質を腐食物質錯体と呼んでいます。このようなわけで、湿原と森林が十分あるというアムール川の条件こそが、アムール川で鉄が多い理由になっています。

これは鉄の濃度をさまざまな地点で測ったデータですけれども、上の3つが森林地帯、下の2つが湿原で測った鉄の濃度を示しています。この図で分かっていますように湿原の濃度は森林に比べて圧倒的に高くなっています。ですから湿原が重要であることが分かってきたわけです。

Goal 1: Determination of concentration and flux of dissolved iron in terrestrial ecosystems with different land-cover in Amur river basin.



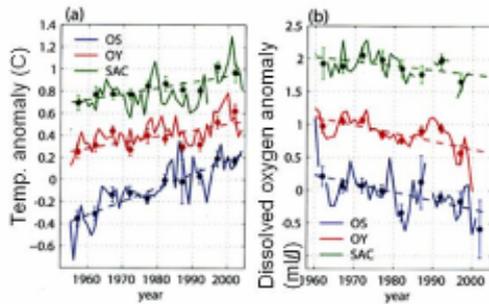
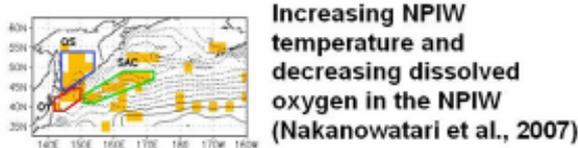
アムール川はどのぐらいの鉄を流すか。1960年から2000年までハバロフスクとブラゴヴェシチェンスクで観測したロシアのデータによれば、毎年10万tの鉄を流します。「10万tの鉄」は想像しづらいですが、現在、二酸化炭素を海に吸収させて温室効果ガスを減らして温暖化を防止しようというという工学的な方法を考案されている方がいますけれども、そのときに鉄1トン



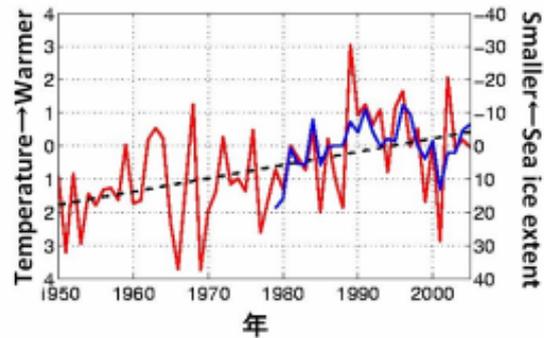
まくのに約1億円の経費が掛かります。ですから、10万tという量を自然がただで流してくれるのは、私たちにとっては経済学的にも十分維持していくメリットがあると考えています。以上、非常に雑駁ですが、アムール川流域・オホーツク海・親潮が鉄という物質でつながっているが故に、親潮とオホーツク海が非常に豊かであるということを説明させていただきました。

さて、このままこのシステムが健全であれば、私たちは将来にわたって親潮、オホーツク海の水産資源をそのまま維持していくことができるわけですが、実はこのシステムは現在劣化しつつあります。2つの問題があります。1つはいわゆる温暖化と呼ばれている現象です。観測事実から明らかですが最近の温暖化はオホーツク海の海水の生成を減らしています。海水が減るとオホーツク海で重い水ができなくなりますから、鉄を運ぶ輸送力が減ってしまいます。その結果、アムール川はどんどん鉄を運ぶのですが、オホーツク海の中で鉄が運ばれなくなってしまうということが現在起こりつつあります。もう1つは、アムール川流域の人間活動です。湿原は鉄をたくさん出しますが、その湿原が現在急速に減っています。あるいは鉄を酸化することから守っている森林が減っています。アムール川流域のダム建設も進んでいます。このような人為的な問題はすべて鉄の輸送量の減少につながっている。この2つが将来にわたって続くとするならば、鉄の減少をもたらして、やがては親潮域とオホーツク海の生物生産を減らすであろうことが既に現実に起こりつつあります。

少し証拠をお見せします。オホーツク海がどのくらい温まっているかを示したいと思います。この図は、これは北海道ですが、オホーツク海から太平洋にかけて中層の温度を示したものです。これは温度変化を示したものの、温度を示したもので、オホーツク海が太平洋のポンプだと言いましたけれども、冷たい水がオホーツク海にあって、それが太平洋に広がっている様子がよく見て取れると思います。この冷たい水は表面で作られますから、たくさんの酸素を含んでいます。オホーツク海で作られる冷たい水は、たくさんの酸素を含んでいて、それが太平洋に広がっている様子が見て取れると思います。そのようなわけで、オホーツク海は海洋に酸素を取り込む場所でもあります。



Decreasing trend of the sea ice extent in the Sea of Okhotsk (Nakanowatari et al., 2007)



現在、この状態がどうなっているかという図です。これはオホーツク海と親潮の水温と溶存酸素濃度、酸素の濃度が1960年から2000年にかけて、どういう傾向にあるかを観測から示したものです。一番上が太平洋のデータ、赤いのが親潮、青いのがオホーツク海のデータです。この40年間にわたって一貫して水温は上昇し、溶存酸素濃度は減少しつつあります。その原因は温暖化にあると考えています。

また、20世紀の後半50年間の冬(10月から3月)の温度が全地球上でどのように変化してきたかを見ると、最も温度が上がった地域がこのシベリアです。シベリアの寒気を原因としてオホーツク海が凍るわけですから、ここが温暖化するとどういうことが起こるか。この図は1950年から2000年にかけてのオホーツク海周辺の気温がどのように変化してきたかという図です。この赤い線から50年間かけて一貫して上昇していることが見て取れると思います。青い線はオホーツク海の海氷面積です。軸を逆にしていますから、上に行くほど海氷は減っているということになります。この温度上昇と海氷面積減少というのは非常によく一致しています。ですから、現在、気温が上がるとオホーツク海はどんどん減り、それが故にオホーツク海を起源として作られる冷たい水ができなくなって、太平洋の温度が上がり、酸素濃度も減っているという状況になります。それが鉄を輸送するメカニズムですから、データはないですが、おそらく鉄も減りつつあると考えています。

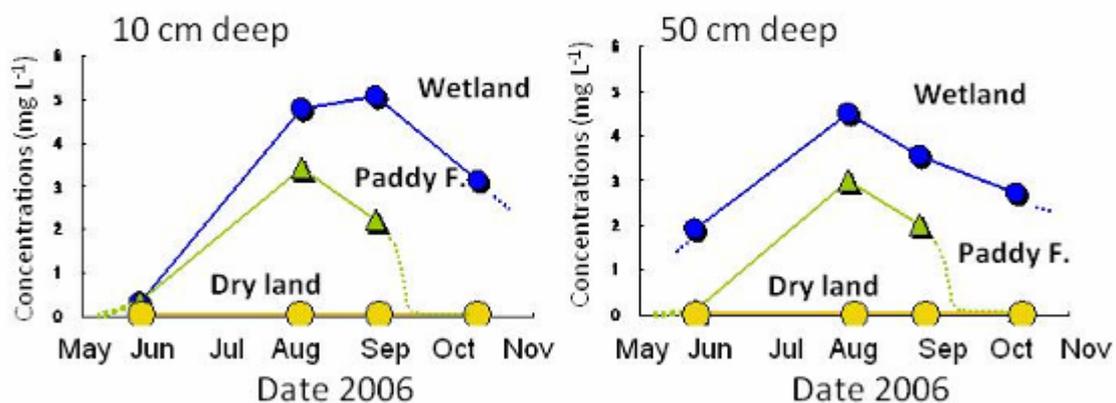
次にアムール川流域の土地利用変化について見てみます。流域の土地利用変化で大きいのは、農地化、森林伐採、森林火災。これらはすべて土地を酸化させ鉄を出にくくする。1930年と2000年の土地利用の状況を比較すると70年間の違いですが、耕作地が非常に増え湿原が極端に減っている、という大きな変化が見て取れます。



最も大きく変化したのは三江平原というアムール川、松花江、ウスリー川が合流する土地です。この土地の面積は 10 万 km²、日本の 3 分の 1 ぐらいの面積があり、かつて低湿地、湿原が広がっていました。しかし 1980 年以降、ここの湿原は急速に減っていき、この 20 年の間に 2 万 km² から 1 万 km² に減ってしまいました。1 万 km² というのは、北海道の面積の 7 分の 1 ぐらい、そういうスケールです。湿原が畑・水田になると、どういうことが起こるのか。これは 6 月から 11 月にかけて、土壌中の 10cm と 50cm 深さの土壌の中にある鉄の濃度を調べたものです。一番上が湿原、真ん中が水田、下が畑ですが、雪解けとともに湿原の鉄濃度は高くなり、逆に畑はまったく鉄が出てこなくなってしまう。水がない酸化的な環境になってしまいますから、鉄が出なくなります。

三江平原の湿地、水田、畑地における土壌溶液中の溶存鉄濃度変化 (2006年)

Seasonal changes in dissolved iron concentrations in the interstitial soil water at various land-cover in the Sanjiang Plain 2006



Yoh et al. (unpublished)

その結果、ウスリー川の支流である三江平原ナオリ川で中国の共同研究者が測った鉄の濃度のデータを見ると、一貫して減少傾向にあります。土地利用による明らかな鉄への影響だと考えています。

そうであるならば、20 世紀以降、アムール川流域では大きな土地利用変化が起こっているわけ



ですから、鉄は減っているのだろうと私たちは予想しました。実際、20世紀の前半から後半にかけては減りつつある傾向が見えたのですが、実は1996・97・98年に極めて大きな鉄の溶出が起こっていることが分かりました。これは予想外でしたが、その後、やはり人為的な影響があるということが分かってまいりました。ちなみにこの1996・97・98年という鉄のピークの年には、親潮域でも大きなプランクトンのピークが出ているということで、これはひょっとすると私たちの仮説を証明する直接的証拠になると考えてます。

なぜ1996年から1998年にかけて大きな鉄のピークが出てきたか。1990年の中ごろから黒竜江省の水田面積が増えて、それに応じて井戸がすごく増えています。三江平原はもともと湿原で、そこに耕作地を作るために暗渠排水を作って排水して、灌漑してしまったわけです。その結果、今度は水が不足して、地下水に頼るようになり、そのために井戸の数がどんどん増えている状況です。

1996～98年がどういう状況だったかというのと、この灌漑をどんどん始めて、井戸水をどんどんくみ上げていきました。井戸水というのは地下の酸素の少ないところの水ですから、鉄を大量に含んでいます。この水をくみ上げて、表面に持ち上げたときに、1998年に松花江の大洪水が起こった。これは歴史的にも非常に大きな洪水で、松花江の流域が冠水し、この冠水によって、表面にくみ上げられた地下水が大量に流れて、鉄のピークを作ったのであろうと私たちは考えています。

このようなわけで、人為的な影響によって鉄が大きく変わってきたということが分かってきたわけですが、一方、自然科学者は人為的と非常に簡単に言ってしまいますが、当然ながら、その三江平原で穀物を作るというのは中国の食糧戦略ですし、私たちはその一部を輸入して食べているわけですから、まったく非難されるものではありません。三江平原でそういう土地利用変化が起こってきたのは20世紀の中盤以降、特に日本のODAを通じて技術援助があっただけで、特に国営農場で水田が大きく広がってきました。これで下流に鉄を減らすという大きな影響がありつつ、この農業が今後も持続可能であれば、私たちとしてはそれを非難する筋合いはないのですが、この農業はなかなか難しい状況に来ている。この地域は地下水が現在どんどん低下していることが観測によって分かっています。従って、今後も地下水を使って維持するとなると、それはおそらく持続可能な農業とは言えないだろうということです。この地域の農業については、下流へのインパクトも考えつつ、それよりも何よりも、この農業の持続可能性という観点から、やり方を見直す必要があるのではないかと中国の研究者と今、議論しているところです。

以上、時間も迫ってまいりましたので、最後の部分に移りたいと思いますが、このプロジェク



トを5年間やってみて分かってきたことをまとめてみます。

- (1)北洋(特にオホーツク海～親潮域)の植物プランクトンの生産を支配している要因は、陸から供給される「鉄」である。
- (2)オホーツク海南部～親潮域へもたらされる鉄の主な供給源はアムール川。その主な輸送ルートは、オホーツク海の中層水(深さ～500m)。
- (3)オホーツク海南部～親潮域への鉄の輸送量は「地球温暖化」、「アムール流域の開発」によって、大きな影響を受ける。
- (4)巨大魚付林という考えによって、物質循環だけでなく、ヒト・モノ・情報の流れをシステムに組み込んで理解し、行動することが重要である。
- (5)問題の解決には日中露の連携が不可欠であり、当面は学術的な連携を密にして、問題意識の共有を目指したい。

私たちはこの大きな鉄を介したアムール川流域から親潮域に至る流れを「巨大魚付林」と呼んでいるわけです。「魚付林」というのは、日本固有の考え方で、江戸時代から、沿岸域の漁業生産を維持するためには、その沿岸に流れ込む川の流域の森林を守らないとだめである、そういうことが藩の政策として行われてきました。サケを重要視していた新潟付近、あるいはニシンに頼っていた北海道もそうですが、この魚付林というの、400年にわたって公式文書に出てきます。また最近では魚付保安林という林がありますけれども、それもその名残です。上流が下流の海洋の生態系を守っている、あるいは維持している源である、という考え方を魚付林と呼びますけれども、アムール川流域と親潮はそういう関係にあるだろうと考えています。

そこで起こっていることは、人間の活動が一方では大気汚染、水質汚染を起こして、2005年の松花江河口のベンゼン汚染がいい例ですが、アムール川を汚染し海洋汚染につながる可能性がある。一方では、土地利用の変化が湿原、森林を減らし、鉄を減らして、下流域の水産資源に影響を与える可能性がある。あるいはもっと大きなレベルでは、地球温暖化と言われている現象がオホーツク海の海氷を減らして、オホーツク海の循環を弱らせて、鉄を減らす可能性があるという仕組み。

ここで注意していただきたいのは、最初の問題は、いわゆる越境汚染と言われ、ライン川、ドナウ川で非常によく研究された事例ですが、2番目の鉄の問題はそもそも上流から下流に益をもたらしてくれるという、これは上流から来る汚染とはまったく逆の構図です。そのようなわけで、



巨大魚付林というのは、従来型の越境汚染とは少し異なった構造を持っている、正負両面を持っているというシステムです。

私たちは、この問題が将来どうなるのかをモデルによっても検討しています。まだ改良の余地がありますが、例えば将来、湿原をさらに半分にした場合、あるいは湿原を全部取り払ってしまった場合、あるいは森林を10%、30%減らした場合に、2000年に比べて鉄がどのくらい減るかを計算したりしています。もちろん計算ですから、どのくらい正しいかという問題はありますが、このようなデータを基にして、中国、ロシアといろいろな議論を始めたところです。

魚付林が今後、劣化しつつあるという前提で、どうやって解決していくかを少し検討させていただきたいと思います。魚付林は日本の考え方だと言いましたが、上流から来る栄養塩が下流を育んでいるという考えに基づいて、下流の利益を得ている漁師さん自身が上流に行って山に植林をする、そういう活動を促してきました。特に1970年代後半、200海里の問題が出てから、漁師さんが遠洋漁業から沿岸漁業に頼らざるを得なくなったときに非常に活発化した運動ですが、ある意味、1つの共同体の中の漁師さんが中心になって、上流、下流をよい循環にする、そういう仕組みで動いてきました。

同じような仕組みで巨大魚付林を考えた場合に、同じことができるのかどうか。この場合は沿岸ではなくて外洋域の生産性を上流から来る鉄が養っている。ここで登場するステークホルダーとしては、国としては下流の日本、ロシア、上流にいる中国、ロシア、モンゴルとなりますが、果たして日本人が上流に行って植林活動することができるのか、これはスケールのにもナンセンスです。ですから、これをどうやって解決に向かわせていくかという問題は、このプロジェクトの最後の課題として残ったわけです。

私たちはこの辺からだんだん苦しくなってきた、スラブ研究センターをはじめ、さまざまな関係機関にいろいろなエールを送っていただこうとアクションを起こしたわけです。その結果、次のような動きに結び付いていきました。

検討方法としては、1)国を超えて、あるいは海岸線を越えて、内陸と外洋をつなぐシステムをどうやって保全していくかをアカデミーの立場から分析するというアプローチ、2)現実にオホーツク海とアムール川という地域を限定して考えていくアプローチ、がありました。

最初の取り組みは、アカデミックなアプローチでしたが、これは総合地球環境科学研究所で「境界のジレンマ」というシンポジウムを開き、特に地球科学者が中心になって、水あるいは物質循環が国境、あるいは海と陸の境界を越えて起こっているときに、それをどうやって新しくとらえ直していくかを議論しました。私たちがやっている巨大魚付林というのは、ロシア、モンゴルか



ら親潮に至るような1万 km スケールで、深さ方向には1,000m ぐらいの深さを持ったこういうスケールを持っています。境界として考えられるのは、地域の境界、地方自治体の境界、国の境界、陸との海の境界、があります。我々のスケールはそれを完全に超えてしまったシステムです。

一方、もう1つの典型的な例としては、国境にまたがる地下の帯水層の問題で、最近、非常に大きな問題になっている環境問題があります。地下には地下水という重要な水資源があり、それは陸の国境とはまったく無関係に存在しています。これを現在、どのように保全・利用されていくか議論されています。幸いに、こちらの問題は国連でも取り上げられて、すでに取り組みが始まっています。

一方、こちらの陸と海の問題に関しては遅れていて、オホーツク海に関してはまったく取り組みは進んでないという状況です。地域から国レベル、あるいは大陸・空間スケールに対して、時間スケールということで、ここにかかわるステークホルダーというのは、地域の共同体からもう少し経済的な大きなつながりになります。最終的には認識共同体みたいなものにかかりますが、私たちのスケールというのは、大陸スケールで100年とかという時間スケールでアイデンティカルな問題の取り組みをしないといけない。

オホーツク海を取り巻くこの地域では、さまざまな法制度が、地域の環境保全について働いています。有名なところでは、ラムサール条約という湿原を守る条約があります。アムール川流域の湿原は実際に保全が進んでいるとは言えないものの、公式的には守られています。あるいは海洋資源、世界遺産等がよく知られた国際的な取り決めによって自然が守られている。

しかし、それぞれはそれぞれの目的を持って作られた仕組みですから、必ずしも鉄の流れを守るような仕組みにはなってない。私たちはそういう考えで、巨大魚付林をどうやって守っていくかを今、まとめているわけです。1つ明るいテーマとしては、日本とロシアの間で日露隣接地域生態系保全協力プログラムが昨年結ばれ、オホーツク海の生態系を中心にして、今後、一緒に保全していこうという動きが始まりました。

こういう状況ですから、私たちは具体的な政策提言をするということではできないわけで、今後プロジェクトが終わった後、継続して議論していく何らかの場が欲しいと考え、スラブ研究センター他のさまざまな機関に呼び掛けて、オホーツク海についての認識共同体を作る動きを始めました。それが「アムール・オホーツクコンソーシアム」と呼ぶ国際的な多国間の学術ネットワークで、科学を中心とした議論を行います。具体的には2年に1回会合を開催し、普段はネットを利用した情報交換などを進めて、このアムール・オホーツクプロジェクトの成果を今後発展させていくような場をつくったということです。私たちが目標とする既存の成功した仕組みと



しては、バルト海の富栄養化の問題を議論するための[ヘルシンキ委員会](#)があります。

まとめです。私たちは、5年間のプロジェクトを通じて、北洋の植物プランクトンを支配している要因が、陸から供給されている鉄であるということ突きとめました。そしてアムール川からオホーツク海、親潮域に至る鉄のルートを解明し、その仕組みが現在、地球温暖化とアムール川流域の開発によって大きな影響を受けていることをデータによって示しました。陸海境界、あるいは国境の境界を超越する巨大魚付林というシステムですが、特に強調したいのは、越境汚染と異なる、上流から下流へ益をもたらすシステムであるということです。これを今後も議論していくためにコンソーシアムを作ったので、ぜひこの場を使って今後もこの問題を検討していきたいと考えております。ありがとうございました。(拍手)

(司会) 1週間前に、[白岩さんを加えて、総合地球環境学研究所の方と、なぜかご指名で座談会をやらされ](#)、そのとき、このGCOEの博物館展示「海疆ユーラシア」という、海と陸をユーラシア大陸でつなぐというコンセプトは、このアムール・オホーツクプロジェクトの影響を受けて生まれたものだという事を再認識しました。

本日、3つの発見がありました。1つは総合地球環境学研究所の英名(Research Institute for Humanity and Nature)が、ヒューマニティーとネーチャーという全然違う組み合わせであること。人文自然研究所と訳せるから、文理融合なのだということが分かった。もう1つは、アムール川～オホーツク海でクリル(千島)が非常に役立っていると。中ロ国境と日ロ国境をどうつなげるかということをやっている人間からすると、アムールとクリルがつながるとするのは非常にうれしく思いました。三つ目は、1998年の洪水の話で、あのときはハルビンも大変だったですね。たぶんその後、川が干上がってしまい、今度は鉄が出た後に、何も出なくなったんだということが非常に分かりました。

それでは、いくつか質問なりコメントを出していただきたいと思います。

(質問) 鉄の濃度を測れるようになったという話で、またロシアは昔から測っていたということですが、どうしてあの辺の鉄を測っていたのか、それは何に使われていたのか。

(白岩) 鉄は、分析のコンポーネントとしては非常に基礎的なデータで、水質を測るときの1つの基本的なデータです。川の水の鉄の濃度というのは海の100万倍ぐらい濃いので、昔から簡単に測れるんです。そういう意味で、ロシアも特に目的はなく、基礎的なデータとして取ってい



たのだと思います。ただ、ハバロフスク地域で問題になるのは、川の水の鉄が濃過ぎて、鉄を取り除かないとうまく利用できない。配管のさびにつながるの鉄がむしろ厄介者だったんです。そういう意味では、鉄のデータというのは根本的な問題でもあったと思います。

(質問) 森林を植えるというのは、森林は腐食物質で鉄分を水に溶かさないでアンチポートするという役目をするわけですね。ですから酸欠するのは湿地でなきゃならないということで、山に森林を植えても、湿地とは関係ないと思うのですが。それから、2点目、海に鉄が入って、それを重水にして運ぶと、あるいは流氷と、それからもう1つは潮汐だご説明いただきましたけれども、流入が起きない海のところでは、どういうふうにしてその鉄分を溶かさないで運ぶのか。

(白岩) まず最初に、森林は、鉄が酸素と結びつく前に、結びつく相手の腐植物質を供給するという意味で、湿原がある場合に比べると、湿原が全くない場合はやはり出てきません。森林を流れている川の水を測ると、鉄の濃度は非常に薄い。ですから湿原というのは圧倒的に森林に対して鉄をたくさん出しているという働きがあります。

次に流氷がない海でどういうことが起こるかということ、淡水の中で運ばれてきた鉄は、塩水と接した途端に全部落ちてしまいます。流氷がないと、落ちたままで終わりです。ですから、世界の多くの川、アマゾンもそうですが、鉄をたくさん運びます。しかし、熱帯や中緯度の川は、それを遠くに運ぶメカニズムがない。ですから、川は沿岸にはもちろん影響がありますが、沖合に影響を及ぼすことはあまり考えられないと思います。だからアムール川というのは、非常に特殊な川で、おそらくこれが他に通用することはないと思います。

(質問) 鉄の輸送に負の影響を与える、冬期の温暖化とアムール流域の人間活動という話はどちらも相当大変な問題だと思うので、それを考えると、鉄を供給するようなシステムというのは考えられないのか。逆に、そういう人間活動を抑えるぐらいだったら、何か鉄を供給するシステムを考えた方がいいんじゃないかと思うのですが。

(白岩) 毎回この質問は受けます。特に今、産業界、日本の鉄鋼業界もそうですが、鉄を海にまいて、水産資源の問題ではなくて、二酸化炭素をいかに吸収させるために鉄をまいて、植物プランクトンを増やして、ジオエンジニアリングという考え方をやろうとしています。原理としてはできるはずですが、その量が問題です。アムール川が運ぶ鉄が10万トンと私は言いましたが、



薄く広く1トンをまくのに1億円掛かるので、10万トンの鉄を毎年毎年、あの広大な地域に人為的にまこうとした場合に、経済的に成り立つのか。ですから、人為的にこのシステムを代替するのはかなり難しい。

一方で、内陸の土地利用に対して、外国人である日本人がさまざまなことを言うのも確かに難しい。三江平原の水害の例でご紹介しましたように、彼ら自身が現在の方法で困っていることも確かです。地下水の減少が、水田耕作の持続可能性について、非常に疑問を投げ掛けていることは中国の方々も把握しております。ですから、下流へのインパクトが少なく、かつ彼らの食糧戦略に対して満足できるような方策、方法を考えていく余地はまだあるのではないかと考えており、むしろそのことに対して会場からもご意見をいただきたいと思います。

(質問) ロシア領側はかなり森林地帯が多くて山火事もかなりあるように思うんですけど、そういう影響はどのくらい出ているのでしょうか。

(白岩) 山火事の問題は本プロジェクトの中では、農学部の柿澤宏昭先生が担当され、ロシアの状況を調べてまいりました。ロシアの中でも、アムール川流域は山火事が一番頻発して、それもコントロールできない地域です。ですから、山火事というのは非常に深刻な問題です。しかし、山火事が鉄にももちろん影響はあるんですけども、全流域で見ただけの場合には、湿原に比べれば小さいという立場で私たちは考えています。しかし、山火事が深刻であるというのはまた別の問題で、それはアムール川流域では非常に大きな問題になっています。

(質問) 鉄の循環という観点から考えますと、何千年か何万年もたつて鉄が流れ出るわけですよね。湿地帯鉄というのは、長い時間の流れの中でも十分にあって、担保されているのか、それともやっぱり循環でいったん海に出たやつがまた戻ってくると考えるのか。

(白岩) 鉄は、億年単位であれば、山が隆起したり、と循環はありますが、少なくとも我々が考えている100年から数千年の単位では循環していません。陸に戻ってくる鉄の流れはないのです。陸地から海に流れる一方です。しかし鉄はなくなりません。鉄というのは大陸を構成する地殻の元素の中で4番目に多い元素で、腐るほどあります。ですから、流れていってもどんどん陸地が風化して鉄が出てきますので、枯渇はないと思います。

また、河口域にたまった鉄がじわじわ出ていけば、陸の影響は関係ないんじゃないかとよく言



われ、私たちも最初はそう考えていました。しかし、河口域でボーリングすると、ほとんどたまっていない。なぜかという、アムール川流域は潮汐が非常に激しいところで、河口にたまったものは全てあつという間に流されちゃうんです。それが証拠に、アムール川は大きい川でありながら、沖積平野がない。河口にはたまらないのです。普通、大河川の下流には平野があるのです。非常にユニークなことだと思います。

(質問) コンソーシアムにかかわっている、ロシア、中国、日本の3カ国間で何か温度差のようなものはありますか。

(白岩) 非常に強い温度差があります。少なくともロシアの方々とは、水産資源を共有しているということで、このシステムが重要であることにある程度、合意に至っています。やはり中国の方と議論すると、自分たちの陸地の食糧戦略を変えてまで、どうして国境を接していない海の水産資源を考えないといけないのか、法的にはまったく彼らにはその義務はありませんので、そういう反応は返ってきます。

そのために、私たちとしては、三江平原の水田耕作の問題点とか、その食糧は私たちも輸入して使っているとか、中国の方々もオホーツク海の水産資源を今、利用し始めているとか、さまざまなルートから、彼らもこの枠組みの1つであることを説明していますが、やはりそういう意味では、中国の方々と下流側との結び付きは非常に薄い。コンソーシアムの中のつながりは、中国が一番弱いと思います。ましてや一番上流にいるモンゴルに関しては、まだまだ難しいです。

(司会) 今の質問は非常に重要で、私も座談会で申し上げたのは「中国が協力するメリットは何もないのでは」ということです。だから、いかに中国にプレッシャーをかけてテーブルにってもらうか。だいたい中国はユーラシアの中心だとすると、中央アジアやロシアの上流になるわけです。中国は水をいっぱい取ると干上がって困るという話になってい、て中国がちゃんとやれば、ユーラシアはすごくよくなる。それは東南アジアでも似たようなことが言える。中国に、東から南から西から、北(ロシア)からきちっとやってくれとみんなで取り囲んで、一緒にやりましょうという、そういうのを作る最初のきっかけとして、この日中ロのコンソーシアムの意味があるのではないかということをお話しました。

ですから、これがうまくいくかどうかというのは、日本だけではなくて、中国の周りの諸国との環境問題において決定的に良いステップになるのではないかと。



具体的にもう少し今後の展望などをお聞かせいただけませんか。

(白岩) それが私たちへの核心のご質問なのです。最近、認識共同体という言葉を使い始めましたが、政治の分野では、かなり普通に使われている言葉だと思いますが、私たちはまだオホーツク海を真ん中に置いて環境を話し合ってきた歴史というのがほとんどない。

私も実はこのプロジェクトをやり始めて愕然としたのは、中国とロシアの間でアムール川の共同観測をしたことは2005年まで一切なかった。アムール川の真ん中に国境が通っていますから、ロシアは真ん中まで行って帰ってきて、中国も真ん中まで帰っていくということで、川の流量を測るためには全部、横断しないと測れないのですが、それさえ行われてなかった。まして外国人が行ったというのもおそらく、もちろん岩下先生のように国境調査で行かれた方はいるのですが、自然科学の観測を目的に行ったということはない。そういう意味では国境とか境界の高さを痛感しました。

オホーツク海も同じです。オホーツク海も、我々は観測していますが、日本の船では入れません。ロシアの船を使わないといけないということで、さまざまな制約があり、おそらく世界に残された大きな越境環境の中で一番国境のはっきりしたシステムではないかと。

ですから、まずその認識共同体という場を作って、そこに大きなつながりがあるということを延々と議論していくことが最初のステップとして重要なのではないかと。

(司会) 今、2005年まで共同観測をやってなかったというのは、2005年からはじめたということですね。2004年に国境問題が全部解決したから、と理解していいのでしょうか。

(白岩) 2つだと思います。国境問題が解決したことと、2005年にベンゼン汚染があって、それに国連が非常に注目したというのも大きいと思います。

(司会) そういう話を聞くと、オホーツクの調査をちゃんとするために、北方領土も早く解決した方がいいような気がします。

(質問) 先ほどアムール川流域がロシアの中では最も山火事が多い地域でしかもそれをコントロールするのは難しいということだったんですが、この山火事は、こういった原因で起こっているのでしょうか。この地域では不法な森林伐採をごまかすための放火と関連があるのかどうか。



(白岩) その原因も指摘されていますが、農学部の柿澤先生がまとめられた結果によると、70%は火の不始末だと。それは林業にかかわっている人もいますし、レクリエーションもあるし、さまざまな原因があると思うのですが、単なる人為的なミスであるという結果をまとめられていたと思います。もちろん乾燥した、例えば1998年というのは、松花江流域ではものすごく大洪水が起こったのですが、アムール川下流からサハリンにかけては非常に乾燥して、大火災が起こった年です。そういうときには自然発火もあると思いますが、70%は人為的な失火だと聞いています。

(司会) ありがとうございます。大変勉強になりました。ありがとうございます。

(白岩) 今後どうぞよろしく。どうもありがとうございました。



北海道大学グローバルCOEプログラム

ライブ・イン・ボーダースタディーズ

中口国境の現況について:木材貿易を中心に

日時 2010年4月22日(木) 17:00-18:30 北海道大学スラブ研究センター4階大会議室

報告者 永井リサ(大阪大学)

北海道大学グローバルCOEプログラム
境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界 + スラブ研究センター

特別セミナー

中口国境の現況について 木材貿易を中心に

報告者 **永井リサ**
【大阪大学経済学研究科特任研究員】

どうなる? 中国の木材ビジネス

天然林保護プログラム開始以降、中国の天然林が激減し枯死したため、中国はロシアから木材輸入しはじめた。しかしロシア政府は、輸出量を80%削減することを決定。その結果中国は輸入が困難に。ロシアの木材加工工場、日本への輸出ルートを探りながら中国は、現在大きな影響を受けている。

約20%削減し中国は木材需要と供給の間に、中口国境の積や滞留などのインフラ整備が緊急に迫っている。

※参加自由・事前申込不要
どなたでも参加できます。お気軽にお越しください。

会期 | 2010年4月22日(木) 17時-18時半

*セミナーに先立ち、16時半より、GCOEコンテンツをご紹介します
DVD上映会を行います。

会場 | 北海道大学スラブ研究センター4階大会議室
【札幌市中央区北9条西7丁目】

お問い合わせ | TEL: 011-706-4809/3314 E-mail: fujimori@borderstudies.jp
URL: <http://borderstudies.jp/>





(司会) 本日の講師をご紹介します。本日お話しいただく永井リサさんは、現在、中ロ木材貿易がご専門です。私は最近、中国とロシアの国境に行けない状況が続いているので、永井さんのご報告から中ロ国境の現状を勉強させていただこうと楽しみにしています。

(永井) ただいまご紹介にあずかりました、大阪大学で研究員をしております永井と申します。私は元来、木材貿易や関連経済の現状について研究していたわけではありません。当初の専門は中国東北の林業開発過程、いわゆる近現代林業史です。私は完全に人文系出身の人間で、文学部の東洋史で学びました。ただ、中国東北の林業開発を研究される先生が日本にあまりおられませんでした。そこで、吉林大学東北アジア研究所の衣保中先生のもとに、2004年から2005年のあいだ、2年ほど留学しました。中国東北の近現代農業史という先生のご専門が、私の研究に近かったためです。

留学当初は吉林省の档案馆などに通い資料を読んでいたのですが、せっかく東北にいるのだから、木材市場や伐採現場を見てみようと考えました。訪問を重ねるうちに、どこの市場もロシアの木材で埋まっていることに驚かされました。うわさには聞いていましたが。その驚きからロシア木材の現状の調査、追跡を始め、そうするうちに、瀋陽、長春、^{すいふんが}綏芬河とどんどん北上していき、ついにはシベリア鉄道、そしてバム鉄道の沿線まで辿りつきました。今では毎年ロシアか中国に入り、国境近辺の調査を繰り返しています。ですから、中ロ木材貿易という主題はもともと専門外なのですが、中国東北部の林業とも深く関連する話ですので、研究を進めています。

こちらは綏芬河とグロデコボの間を走る貨車です。アカマツを積んだ貨車が、1時間かかっても通過し切らないほど長く連なっています。



昔は日本の中古車を積んで走っていました。特に10年ほど前から、中国が多量のロシア木材を



買っています。なぜそうなったかという、1998年に中国政府による天然林保護プログラムが開始され、天然林や自然林の伐採を、一部の計画伐採を除き、原則として禁止する法律が施行されました。

この1998年には、長江や松花江の北側でも南側でも大規模な洪水となり、収束に半年近くかかるという出来事が起きました。この大洪水を受けて、水源地である上流地域の森林伐採がひどいためだという批判が巻き起こり、中国政府は即座に実効性のある政策を打ち出す必要に迫られました。そこで天然林保護プログラムが策定されまして、中国東北のほか、貴州や福建といった南の地域、あとはチベット国境地域の森林が伐採禁止になりました。

結果として、経済の発展する中国で、木材が非常に不足する状況になりました。そこで、カラマツやアカマツ等、中国東北の木材と樹種の近いロシア木材が、代替材として大量に中国に輸入されるようになりました。中ロ国境におけるロシア木材のビジネスは、近年、非常に活況を呈しています。

ただし、これに対し国際的に強い批判が起きました。中国の輸入量は数年で40倍に増えるほどの量で、日本の3倍以上の木材を買っています。密伐や乱伐の問題も発生しています。そこで、ロシア政府は2007年7月に、ロシア原木の丸太の大幅な一斉値上げを決定しました。値上げの方法は、ロシアの丸太に対し80%の輸出税を内税として課す、というものです。税が課された場合、実際には1万円の針葉樹の丸太が3万6000円ほどに値上がりします。

本来でしたら2008年1月1日より実施されるはずだったのですが、金融危機とぶつかり2009年に延期され、今度は2010年にずれました。延期が繰り返されていますが、これが導入されたら丸太の貿易が実質的にストップしてしまいます。そのため、中国だけでなく、フィンランドなどの北欧諸国、そして日本といったロシアの木材に頼る国々の間で恐慌状態となっています。一方、ロシアで製材すれば関税引き上げの対象になりません。丸太には80%、ある程度製材したものに対しては25%という税率です。それで現在、ロシア極東において製材工場建設のラッシュが起きています。

つまり現在、北東アジアの木材流通が根本から転換する状況にあるわけです。私は2005年ごろから毎年調査を続けていますが、今回は2008年秋の調査と、昨年10月の調査を中心に報告いたします。シベリアとバム鉄道沿線の企業が製材工場を必死に建設する様子を前半にお話しして、後半では中ロ国境の激しい変化についてお伝えしたいと思います。



調査地域



5

これは調査地域の地図です。2009年の調査では、新潟からハバロフスクに飛行機で入り、コムソモリスクに車で北上してワニノまで鉄道で行き、ワニノからティンダまでバム鉄道に乗り、ティンダからイギルマ、ウスチ・イリムスク、イルクーツク、チタと鉄道でぐるりと回り、次いでチタから満州里を経て綏芬河に戻り、東寧に南下して、最後に同江へと移動しました。中ロ国境を中心に回ったわけです。ざっと1万5000kmに及ぶ地域なので、報告の内容が概略的になってしまうかと思いますが、ご了承ください。

この調査の当初の目的は、黒竜江上を水送木材が流れる実態を確認することでした。全体のおよそ10分の1は水送だったのですが、残念ながら林業局が水送木材禁止令を出しており、あまり実態を把握できませんでした。

一方2008年の調査では、この各地域を代表する大企業を中心としたロシアの木材企業16社、具体的にはアルカーム、ワニノ大陸などの会社を訪問しました。また、イルクーツクのレスホーズ（森林管理局）やチタの木材取引所、中国側の企業4社も訪問しました。それぞれの場所で聞き取り調査を実施し、製材工場を視察しました。それにより、急激な状況の変化を確認できました。

さて、中国によるロシア木材輸入量の増加を確認しましょう。天然林保護プログラムが実施される以前の1997年には、輸入量は94万 m^3 ほどでしたが、2004年には1696万 m^3 となり、その後2007年には2900万 m^3 近くまで伸びます。輸入量激増の理由は、中国で代表的な木材生産地だった中国東北で伐採がほとんどできなくなり、その分を全部ロシア材で埋め合わせた点にあ



ります。そして、中国による輸入量の増加は、ロシア側の木材輸出の急増をもたらしました。中ロ国境地域の町はどこも木材バブルとなり、どこもかしこも木材で埋まる状況でした。

中国は天然林保護プログラムのもと、中国東北や西側の乾燥地をはじめ、全国で植林による緑化を進めましたが、その一方で、隣接するロシアや北朝鮮から相当量の木材を買ってきました。また、ミャンマーなどの東南アジア、ニュージーランド、北欧、アメリカ、カナダからも購入しています。要するに、中国で緑を育てるために、周辺諸国の緑を消尽する状況に陥っています。中国における植林はもちろん大事です。しかし、中国の大量輸入により周辺諸国の森林が急速に劣化しつつあるという問題も起きています。

いずれにせよ、中国にとって一番割安なのは、国境線を 4000km 共有するロシアからの木材輸入です。運搬手段も多いためロシア材に頼る率が高く、半分以上がロシア材によって賄われていました。ですから、ロシア木材の輸出税引き上げは、中国にとって非常に大きな問題なわけです。

次に、ロシア木材の輸出税がどのように引き上げられてきたかを確認しましょう。先ほども少し税率に触れましたが、従来は 6.5% だったのが 2007 年に 20% になり、2008 年からは 25% になりました。2009 年 1 月 1 日から 80% とされたのですが、現在はまだ、暫定的に引き上げ停止の状態です。なお、引き上げ停止の対象は針葉樹の丸太です。ちなみに、針葉樹の加工品になりますと、ほとんど無税の 0% という税率が適用されています。逆に、広葉樹の丸太の場合、今年から 80% の関税を掛けています。というのも、沿海州などの広葉樹は、高級家具の材料になるので換金性が高く、中国への密輸が絶えないのですね。夜中にトラックに満載して中国に輸送するという事例が数多く、これを取り締まる目的もあり、輸出も輸入も規制されました。

さて、ロシア木材の輸出税引き上げは、もちろん日本にとっても大きな問題です。日本の場合、およそ 30~40% をロシア木材に頼ってきました。しかし、ここ数年、安かったロシアのカラマツが日本の国産材より高くなる現象が起きてきました。それに税率引き上げの問題が加わり、国産材への切り替えに着手し、ちょうど成熟林になって切りごろのスギ林などの利用を試みています。ただし、ロシア材を代替できるほどの量は国内にないので、非常に不安定な供給状況です。いずれにせよ、日本ではロシア材の輸入量は減り続けています。

特に、ロシア木材の補強材を扱う富山の業者にとっては非常に大きな問題です。どう乗り越えるかというなかで、積極的にロシアに進出し製材工場を造る会社もあれば、閉めてしまう会社もでました。今では、6 割から 7 割が倒産なりたたむなりしてしまっていて、ロシア木材業者のうち、富山の業者は 3~4 割しか残っていません。残っているところは大手ですが、大手でも苦しく、全体として非常に厳しい状況です。



富山はもともとロシアの木材を輸入してきました。日本の中古車を極東に輸出する帰路に、返り荷として製材のコンテナや丸太を積んでいたのです。ところが、ご存じの方も多いと思いますが、中古車貿易に規制が掛かりました。それに加え、今度は木材貿易も厳しくなり、今、富山は非常に苦しい状況です。どちらの業者も大部分が倒産した印象です。

ロシア政府による木材輸出税引き上げに対する極東シベリア地域の反応を簡単に説明いたします。ロシアのうち特に極東シベリア地域では、人口も少なく加工業などの工業化が非常に遅れています。そこでは、これまで、ロシアの丸太を売る木材貿易会社が大きな力をもっていました。近年、これらの会社がこぞって製材工場を造り始めました。なお、現在、極東シベリア地域に最も多い樹種はアカマツで、計算上5割ほどを占めます。次にくるのはカラマツです。

ダリエクスポートレスグループ（極東木材貿易協会）の資料によると、一番シェアが大きい木材会社は2008年の時点でダリレスプロム・トレード。2番目がアルカйм、3番目がテルネイレ、4番目がスメナ・トレーディング、5位がフローラという順序です。こうした木材会社が、拠点とする都市などで、それぞれどういった対策をとっているかを続けてご説明します。

まず、オホーツク海に面した港湾都市のワニノから見ていきます。ここには、原木輸出量が極東で第2位のアルカйм社があります。人口2万人ほどの都市です。ワニノ港は丸太の輸出を主要産業にしていたのですが、輸出税の引き上げ問題が起きました。

ワニノ港湾の6割以上を管理する港湾管理会社のプロスモルポルト社に伺って話を聞いたところ、輸出税の引き上げ問題を受けて、早急に丸太から脱却する必要性を認識しており、石炭積み出しターミナルを相次いで造っています。丸太ではこの先やっていけず、天然ガスなどの資源は別のところがすでに握っています。そうしたなか、バム鉄道沿線の支線でいくつか大きい石炭の炭鉱が見つかりました。それにあわせ、石炭輸送の方向に、港湾の役割を急速に変えようとしています。韓国企業が相当に投資していて、ヒュンダイなどの企業が目に付きました。



ワニノ

- 原木輸出量、極東第2位のアルカйм社がある。
- ワニノ港は原木輸出を主要産業としていたが、木材輸出税引き上げを受け、石炭ターミナルへの移行を目指している。



13

これはアルカйм社の木材積み場、丸太を積む場所の写真です。一見、多量に見えるのですが、木材輸出税問題の影響を大きく受けて、前年と比して半分ほどに減っています。2007年に関税が少し上がり、20%になったことも影響しています。

このアルカймは、木材輸出税引き上げに伴い、慌てて大きい製材工場を造り始めました。場所は、ワニノを見下ろす丘の上です。ただし、税引き上げが実際には延期されたことを受け、アルカймは現在、非常に厳しい状況に陥っています。多額の借金により大きな工場を2つ無理に建設したにもかかわらず、丸太がそのまま売れる状況となり、逆に製材が売れず、負債を返せないのです。特に日本などでは製材に非常に高い質が求められるため、開業したての製材工場の製品はなかなか売れません。そうした事情から、アルカймは現在、非常に苦闘していて、もつかもたないかというところまできているようです。投資が遅かった会社の方が、かえって今は楽という状況です。

次に、ワニノより少し南にあるソビエツカヤ・ガワニに移ります。ここには良港がありまして、製材した木材のコンテナ輸出が中心です。丸太はあまり出していません。ここでは日本の大陸貿易という会社がワニノ大陸という木材会社を経営しています。ワニノ大陸は当初は合弁でしたが、日本側が全部の資本を取りました。カラマツの丸太の製材が中心で、1カ月の生産量が5400立方メートルほどです。非常に高い質で有名です。



ソビエツカヤ・ガワニ(ワニノ大陸)



- ・2009.12.31政府決議により、港湾型特別経済区の承認が決定。
- ・2025年までに、ワニノ港と合わせて、合計貨物取扱量を8000万トンまで増やすことが可能。
- ・このため、連邦予算から最大3億5000万ルーブル拠出される予定。(ダーリニ・ポストーク通信、10.01.18)

16

ソビエツカヤ・ガワニの新しい動きといえば、ごく最近に港湾特別経済区に指定されました。2025年までにワニノ港と合わせて工業貨物量を8000トンまで増やすことが可能です。現在、連邦予算から最大3億5000万ルーブルの拠出がある予定で、経済特区のような位置づけです。どれほどのお金が出されるかは分かりませんが、これから変化が起こればと思われま

す。次は、ハバロフスクを北上した位置にあるコムソモリスク・ナ・アムーレというアムール川沿いの町です。原木輸出量が極東で第5位のフローラや、7位、8位に名前があったリンブナン・ヒジャウという会社の本社が集まっています。

コムソモリスク・ナ・アムーレ



- ・極東でも最も大きな木材企業であるフローラやリンブナン・ヒジャウ等の本社がある。
- ・天然ガスパイプライン主要通過地点。パイプラインは中国東北地域にも供給される予定。
- ・上記会社以外にも周辺に多くの林業会社が存在する。

17

ここは天然ガスパイプラインの主要通過地点の1つで、数年後にそのパイプラインを中国東北、大連まで伸ばす計画があります。ですからその話が順調にいくと、これから非常に発展していく場所だと思います。



コムソモリスクから 20~30km 行った場所にあるハルピチャン村では、村まで鉄道が開通している関係があって、たくさんの林業会社が伐採工場や製材工場を造っています。訪問した日にちょうど、フローラ社の第 2 工場の落成式が行われていました。リンブナン・ヒジャウの工場もあります。この会社は実は、インドネシアの華僑資本の会社です。1980 年代に熱帯雨林の伐採で国際的に厳しく批判された経緯があり、その後インドネシアでの伐採を縮小しました。しかし、実はロシアのタイガで伐採権を取得し、木を切って輸出しています。これ以外にも、様々な国の資本がロシアのタイガに入り、伐採を行う事例を確認できます。

続いてティンダです。コムソモリスクからさらに西側に位置する、バム鉄道沿線でも内陸の都市です。そこで一番大きい会社がティンダレスという会社です。古くて伝統のある大会社ですが、2008 年に訪問した時点では、製材工場の誘致に決定的な遅れをとっていました。お会いした社長から、木材や丸太を売ることができないし、製材もできない状況に直面し、本当にどうしたらいいでしょうといった内容の相談を受けました。ただ、銀行から無駄な借入れをしなかったため、現在は状況が好転しています。

ティンダ(ティンダレス社)



- ティンダ最大の林業会社。
- しかし製材工場建設誘致が遅れた為、輸出税引き上げ後の動向が心配されている。
- 数多くの北朝鮮労働者を雇用している(後述)。¹⁹

ティンダ第 2 の企業としてトゥランレスがあります。ティンダレス社の社長だった人物が新しく創建した新興企業です。ここはいち早く製材工場を建設したので、2008 年に訪問した当時は経営も順調で、元の社長なのでティンダレスを心配している様子でした。

ちなみに、ティンダという都市では、もともと北朝鮮の労働者が数千人働いていました。ティンダレス社もトゥランレス社もその数は多く、ティンダレス社の場合、1000 人ほどが働いていた時期もあるといわれています。

タイガ奥地での伐採は非常に過酷なので、昔から中国人労働者や北朝鮮労働者が担ってきたと



いううわさを、私は聞いてきました。しかし、あくまで耳にする話にすぎませんでした。ところが、2008年の調査では、時折ハングル文字の看板を発見し、また、トゥランレス社で北朝鮮労働者が数多く働いているのを目にしました。皆さんかなり以前から働いている熟練労働者で、写真に写っているのは、木材を大きさにより仕分ける作業を数十人でするところです。



ロシアと北朝鮮は労働力に関して早くから協定を結んでいます。1960年代にはこの地域で多くの朝鮮人労働者が働いており、1970年代、80年代には7000人以上の労働者がいたといわれています。一方、ティンダという町の人口は2万人弱です。北朝鮮労働者の数は、現在1200~1300人程度に減ったとはいえ、その割合がかなり高い町といえると思います。

ちなみに、2009年12月の共同通信の記事によると、同年9月に、ティンダレス社で働いていた北朝鮮の労働者がロシアに集団亡命したそうです。また、2010年1月18日付のダーリニ・ポストーク通信の記事によると、ロシアでメドベージェフ大統領になったあと、ロシアと北朝鮮は2009年2月に労働者受け入れに関する新たな協定を批准し、それを受けて沿海地方における北朝鮮労働者が増加傾向にあるそうです。シベリアや内陸地域で減少傾向にあるのと対照的です。

極東やシベリアの労働者事情を考えたときに、そこには中国人労働者の数が多いです。それに対して賛否両論があります。経営者は、中国人は時間も気にせず安い給料でよく働く、もっと雇用したいと考えます。一方、現地の人たちは中国人労働者が多くなることに対して複雑な感情を抱いています。北朝鮮労働者が政府の承認の下にある程度入ってくるのは、中国人だけが入らないようにとか、何らかの政策的思惑があるかもしれません。

北朝鮮労働者に関して、トライレスの社長が興味深い話を聞かせてくれました。北朝鮮労働者はお給料が安く、具体的には1万ルーブルほどですが、彼らはその半分以上を絶対に本国に送らないといけなのですね。この送金は強制で、残り半分で生活します。また、働いた代わりにお金ではなく、木材の現物を本国に送る場合もあるようです。



次はさらに内陸に入って、バイカル湖の西北にあるイギルマです。ここは極東ではなくシベリア地域です。イギルマからウチタイリムスクの辺りは、ロシアで最も良質の木材が採れるといわれている地域です。

イギルマ(イギルマ大陸)



- 1960年に創立された初めての日ソ合同林業会社、西シベリア地域では最も古く、この地域を代表する製材会社。業界では「イギルマ材」と呼ばれている。



23

ここにはイギルマ大陸という、西シベリア地域で最も古く、この地域を代表する製材会社があります。この会社は、初めての日ソ合同の林業会社として 1960 年に創立されました。先ほど紹介しましたワニノ大陸と同じ大陸貿易という日本の会社が投資して始めた会社ですけど、こちらの場合ワニノ大陸とは逆に、ロシア側が全資本を取得し、今ではロシア資本で経営されています。この会社の木材は、業界でイギルマ材といわれて非常に高い評価を得ています。

イギルマには、セルという会社もあります。当初イギルマと一緒にして、現在はナンバー2の会社です。さらに、ウチタイリムスクにはカタ社があります。カタ社に関して特徴的なのは、アメリカの資本で共同経営する予定の点でして、新しい工場も建設中です。

さて、今度は南下しまして、シベリアの中心であるイルクーツクです。ここでは、森林管理局に訪問しましたが、局改組の直後でして、詳しいお話を伺うことはできませんでした。



イルクーツク

- 右上図はイルクーツクのレスホーズ(森林管理局)
- 下は国内向け住宅販売会社。



26

イルクーツクで最も大きい木材会社の1つに、NLOという会社があります。シベリア地域は元来、豊富な水力と電力を生かし、極東に比して工業化が進んでいますが、NLOは特に工業化を推進している印象です。イルクーツクには、日本留学経験のある社長が経営するロイヤルウッドという会社もあります。この会社は、100%日本向け製材を作っており、丸太は取り扱っていません。そのため、関税引き上げには「大賛成」との意見でした。

次は中国に近づいて、チタに移ります。ここには、チタ州の木材取引所があります。

チタ(木材取引所)



- 2008年5月設立
- この取引所は、満洲里の連発会社と協力して、中ロ国境のハラノで大規模な製材加工地区を計画中。
- この木材取引所を通して売買される木材は10-20%程度。

29

この取引所は、違法伐や密伐、密輸の問題を受けて、公正な取引を目指して2008年5月に設立されました。ただし、ここを介した売買は、未だ10%、20%程度です。現在、中国と共同して、国境地域のハラノで大規模な製材加工地区を計画中です。

チタ州で最も大きい木材会社は、ザバイカリスク林業会社です。ここでは中国人労働者をたくさん使っています。昔はロシアの伐採会社は皆伐ではなくて選伐をしていましたが、それでは採



算が取れなくなりました。この会社では現在、すべて皆伐です。さらに、昔は長期間放置して森林を再生させていましたが、ここではマツ類を植林しているということです。

関連して、森林の現状を見ていきましょう。



まず左は、ハバロフスクからコムソモリスクに北上していく様子です。写真のように、細いカラマツ林が多いです。一方、内陸に入ってシベリア西部のイギルマ、イルクーツクの周辺になると少し森林らしさを増します。バム鉄道沿線まで入った感想としては、いわゆるタイガ、昔いわれた樹海のような森林は、沿線ではほとんど見るできないということです。

ここで、これまでの話を一旦まとめたいと思います。まず、ロシア木材企業に関しては淘汰が進んでおり、中小企業が倒産し、大企業だけが生き残りつつあります。製材工場を造る力があるかどうかは1つの分かれ目です。ちなみに、モスクワ資本による木材会社の買収も進んでいます。

次に、タイガに関しては、皆伐の一般化を受け、鉄道沿線地域の森林の伐採が激しい現状にあります。イルクーツクの場合ですと、伐採地は200kmほど離れた場所になります。必ずしもロシア全体で森林破壊が進行しているわけではありませんが、極東地域においては、選伐から育てた成熟林はここ10年で最も減少しています。

以上がロシア側のお話ですが、今度は中国側についてお話します。先ほど紹介した事実をあらためて確認しますと、中国国内における原生林の伐採禁止を受けて、ロシアからの木材輸入量が急激に増えました。2006年には2200万 m^3 ですが、参考までに同年の日本の輸入量は600万立方メートル、韓国は150万 m^3 です。かつてロシアの木材は日本が価格を決めていましたが、2000年あたりを境目に中国に輸入量を抜かれました。2008年は中国が金融危機以前に買い付けたこともあって2956万 m^3 、日本は一挙に減り180万 m^3 の木材輸入量でした。

さて、中ロ貿易の最大の通関地である満州里から見ていきましょう。2008年の満州里からの木材輸入量は、722万 m^3 ほどでした。なお、木材輸入に関しては綏芬河が最大です。ただし、製材

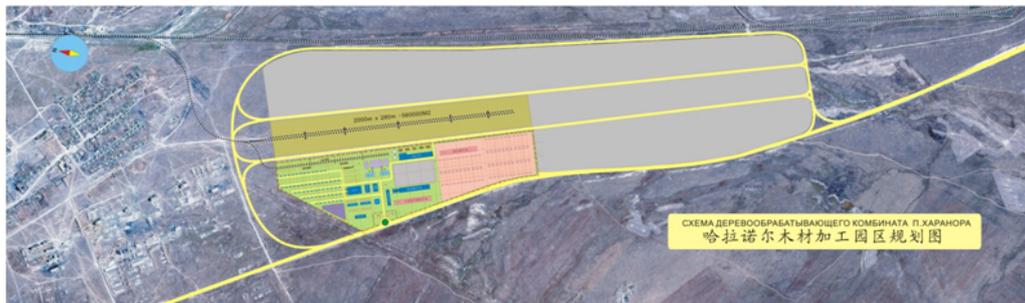


の8割は満州里経由で輸入されます。満州里では木材輸入、加工業が一時に比べて縮小傾向にあります。2008年に清水建設、双日、そして順興通商という福建系の林業会社が共同で、満州里三発木業有限公司という会社を創設しました。

次に、満州里で第2位の木材会社の連発公司です。この会社は中国系です。ここは、ロシアの原木輸出税引き上げに対応するため、チタの木材取引所と共同し、中ロ国境の一带で製材加工業地区の設立を目指しています。この試みは、ダウリアプロジェクトと呼ばれるものの一環です。ダウリアプロジェクトでは、ロシア側国境のハラノに大製材工場を造り、それを中国に運ぶ計画です。

ダウリアプロジェクト

GPS図、ロシア側で製材した場合輸出税が0になるためロシア側国境のハラノにインフラ整備を行い、中国企業や外国企業の誘致を行っている。



ハラノでは、電気、鉄道などのインフラ整備を行って、まず連発公司が進出しました。黄色の線のなかで左下の色のついた部分が連発公司の進出区域です。残りの灰色の区画に日本やその他の国々の企業を呼び込み、一大製材地にしようと計画しているわけですが、輸出税引き上げ延期のあおりを受けて、微妙な現状と思われます。正直なところ、連発公司がもつかどうかも厳しく、今後について予断を許さない状況です。

次が綏芬河です。綏芬河は中国で最大の木材都市です。左下は綏芬河の駅裏の写真ですが、このように2006年の時点で、毎日ロシアの木材を積んだ500台以上の貨車が極東寄りに到着していました。ひたすら来るという感じですね。ただし、2006年以降、木材、特に丸太の輸入量がやや減少しています。右下は、木材集積場の写真です。一日中クレーンで木材を下ろしています。かなり大きな丸太も依然として大量に輸入していました。



綏芬河

駅には毎日ロシア材を積んだ500台以上の貨車が極東より到着する(2006年3月)



綏芬河木材集積所



綏芬河の木材通過量は、およそ 600 万から 700 万立方メートルです。綏芬河市におけるロシア材貿易、加工業は 158 社とされていますが、中小も入れると 500 社ほどあるといわれています。ただし、輸出税引き上げの問題を受け中小企業はおよそ 9 割が倒産したと指摘されるほど、急激に工場が減っています。

2005 年 5 月ころをピークに原木の輸入量は減少傾向にあります。ロシア政府が丸太に税金を掛けるらしいというわさが広まり、少しずつ製材の方向にシフトし始めました。もともと綏芬河は人口が非常に少なかったのですが、現在は 20~30 万人ほどの人が働いています。その多くは、黒竜江省の他の地域の出身者です。どういうことかと申しますと、天然林保護プログラムで林業局の人が丸ごと失業しました。そういう人たちが綏芬河に来て木材関連産業に従事しています。

綏芬河、黒竜江で最大の木材貿易会社は、龍江商連進出口集団有限公司です。ここは、中国木材協会の理事を務めるなど、中国でも有数の木材会社ですが、創立は 1998 年で歴史は浅いのですね。元来、中ロ貿易で靴などの雑貨類を扱っていた人たちが、貯めたお金を元手に木材会社を造ったそうです。それがちょうど、天然林保護プログラムが出された時期に重なり、すごく大きく当たったということです。主要な貿易相手は、ヨーロッパ、特にイタリアでしたが、現在は金融危機の影響もあり、国内向け販売に切り替えています。

龍江集団の木材置き場を見てください。左下の 2006 年の写真は、会社の前にある木材置き場を、綏芬河の高台から見下ろして撮影したものです。会社の前だけでなく、町自体が木材で埋まっています。会社の周りの小さい建物も全部、中小企業の小さい製材工場にして、その数は数百に及びます。全体として、町ぐるみの木材バブルの様相です。ところが、金融危機を経て輸出税問題が起きた後の 2008 年 11 月になりますと、木材が相当減りました。

この会社は特に、広葉樹を購入しフローリングを作っていました。輸出税問題を受け広葉樹が入らなくなりました。かなり大きな広葉樹を買ってきた経緯があり、ロシアの NPO などから



厳しい批判を受けています。

いずれにせよ、龍江集団は現在、非常に厳しい状況下にあります。ロシア内で製材工場を造ったり、松花江や黒竜江省の木材を集めるために同江に埠頭を建設して水送木材を集めたり、あとは吉林省や黒竜江省の他の地域に製材工場を造ったり、という動きをしています。

さて、綏芬河の国境ゲートです。左上が新しい中ロ国境ゲートで、右上が古い国境ゲートです。かつてはさびれた雰囲気醸し出していたのですが、現在はライトアップが施され、あまり情緒のない場所になっています。

変貌著しい綏芬河：綏芬河国境ゲート



・2010年より、綏芬河は中国東北地域で大連につき二番目となる保税地区に指定された(2009年4月承認)
・鉄道もグロデコボから直接綏芬河に乗り入れるようになり、従来の駅舎の隣に国際旅客ターミナルが完成している。
・また綏芬河-東寧間の高速道路も建設中であり、国境地域のインフラ整備も活発に進められている。



49

新旧のゲートはお互いに近い場所にあります。両ゲートのそばに 2008 年くらいに完成したホリデイ・インは、両者を眺望できる場所として、現在、ちょっとした観光地です。ちなみに、ホリデイ・インの前には高級車が並んでおり、さらに町中でリムジンを度々見かけます。町全体がバブルです。

右下は綏芬河を遠くから撮った夜景で、ネオンで光り輝いています。これからお話しする東寧や同江といった町も、成功するとこういう情景になります。ですので、こうした夜の景色は、北の方における達成のイメージの表現だと思います。

綏芬河はその成功から、北方の深圳とも称されます。去年 4 月には、中国東北地域で 2 番目の保税地区に指定されました。ロシアから運んだ貨物を綏芬河の判断でしばらく置いておくといった、貿易上有利な権限を発揮できます。

昔はロシア人は、鉄道でグロデコボから綏芬河に入ることができませんでした。いったんグロデコボで列車を降りてバスで綏芬河に入る必要がありました。一昨年あたりから、鉄道での直接



乗り入れが可能になりまして、従来の駅舎の隣に非常にきれいな国際旅客ターミナルも建設されました。ですから、綏芬河を訪れるロシア人の数が増加しました。また、綏芬河と東寧の間に優れた道路がすでにありますが、加えて高架の高速道路を建設中です。国境地域の道路整備や鉄道整備の熱が非常に高まっています。

次に紹介するのは、東寧ポルタフカ互市貿易区です。綏芬河から数十 km 南に東寧という町がありまして、ここもかなり中ロ貿易が盛んです。その東寧の町外れとお隣のポルタフカのあいだに、2005 年 10 月に互市貿易区が開業しました。ただ、残念なことにいつ訪れてもロシア人を見かけません。

東寧ポルタフカ互市貿易区



- 2005年10月18日開業。東寧とロシア側のポルタフカの国境地域に建設される。
- 東寧口岸の隣にあるが、ロシア人は通過するのみであり、ゴースタウン状態である。

きれいに整備されていますが、綏芬河と比し、貿易区としてまったく機能していません。ロシア人はここをバスで通過し、買い物をしに綏芬河に向かいます。帰路にお手洗いに寄る人がいる程度です。5 月とかに数百人がまとまって買い物に来るときもあるそうなのですが、基本的にはまったく人が来ません。そのため、中国人相手のお土産屋が 2 軒ほど開いている程度の場所です。

この東寧には、綏芬河ほどではありませんが、大きな木材企業が多く存在します。町の中心近くには東寧木材加工特区があります。これは 2003 年に黒竜江省の指導により開設されました。様々な優遇措置が用意されており、現在はおおよそ 53 企業が参加しており、最も有名なのは吉信という会社です。

吉信集団は、先ほど紹介しました龍江集団と並ぶほど大きい会社です。こちらも 1998 年に、中ロ貿易で稼いだ資本を元手に設立されました。もともと中国とロシアの運送業などやっており、運送業や旅行業などの 11 の会社を従えた大きい会社です。輸出入の総額は 7000 万ドルを超え、政治的にウスリースク政府と良好な関係を築いています。東寧でも政治的な力が非常に強く、総



経理は中国の全人代代表になった経験があります。この人の一存で、黒竜江ではどこも取っていなかった JAS を取得し日本への輸出も手掛けています。

ウスリースク政府と非常に親しい関係から、ロシア内に林場を数多くもってしまして、全部で 6 以上です。また、ロシア内に製材工場も所有しています。さらに工場を 2 つ新設中です。加えて、ほかに 6 箇所でも工場建設の計画があります。ロシアで 1 次加工を行い、東寧に輸入する方式を取っているのですが、これは吉信方式と呼ばれています。現在、その方式を推し進めることで、輸出税問題への対処を目指しています。製材を鉄道でワニノに運び、タンカーで日本に輸出する計画も考えているようです。

一昨年に訪問したときには、FSC や COC の森林認証をすでに取得しており、さらに競争力を高めようとしていました。どこの中国企業に目指す将来像を伺っても、IKEA のようになりたいという答えが返ってきます。要するにブランドを立ち上げたいわけですが、去年行ったときは、吉信は苦境に陥っていました。倒産しそうなほどです。日本向けの製品を中心に作っていたため、日本がデフレとなり受注が止まったそうです。

一方、現在非常に景気のいい会社として、富鵬木業があります。2007 年の設立でして、総経理は福建系の方です。ここは日本にはあまり輸出しておらず、欧米向け中心です。ここの強みは、FSC などの森林認証をすべて取得し、欧米の高い基準をクリアできることです。話を伺うと、うちはわりと業績がいいという答えでした。

次に黒竜江省の同江です。黒竜江、アムール川がくねっと曲がったところに位置し、木材の水送で重要な地点です。松花江と黒竜江がぶつかる地点に埠頭があります。

2008年11月同江埠頭



同江は元来、非常に小さな田舎町でした。しかし現在は、綏芬河並みに急激に発展しています。



綏芬河の龍江集団が同江に投資して造らせた大きい埠頭は、すでに完成して起動しています。ちなみに、同江周辺には伊春木材加工区があります。天然林伐採ができなくなったあと、伊春の林業局で失業者の問題が起きました。その人びとが加工区に移り住み、水送で引き上げられた木材を使って製材しています。冬場に訪れると閉まっていたましたが、別の時期に訪問すると昼夜問わず稼働していました。水送木材は、輸送費は安いのですが傷んでいる場合が多いため、国内向けが多いです。同江での製材は輸出用ではなく国内向けが中心です。

さて、同江の木材利用は年間 40 万 m³ で、それほど多くありません。ただし、1 社の抱える量としては十分です。川の凍る時期が長いので、夏だけ水送で集めます。11 月には水送の最後の木材で埠頭が埋まっていた。輸出税適用以前に買ってしまおうという狙いもあったと思います。

数年前までの最盛期には、黒竜江の川の水が見えないくらい、全部真っ黒に埋まるほど木材を運んでいました。前から木材を船で曳いたり、島状に木材を組んで後ろから押ししたりしたようです。木材が多い場合には組んで押した方が安定するそうです。ただし、そうした大量輸送の景色は現在、あまり見られなくなりました。

次にお見せするのは、2007 年くらいに造られた同江の口岸、つまり出入国ゲートの写真です。ロシアからバスで数百人が出入りしています。

同江口岸



続いて浮き橋の写真です。同江とロシアのニジネレンスコエをつないでいます。以前、共同通信配信の記事でいかだ橋ができたとの記事を読み、すぐに見学に行ったのですが、実際には未完成でした。ただ、建設途中だったため、中に入れてもらえ写真を撮ることができました。



東輝浮橋(同江—ニジネレンスコエ)

同江市とニジネレンスコエを結ぶ浮き橋。「東輝貿易公司」によって計画・建設されており、長さ約800mの大半が架橋され、2009年2月に開通した。



東輝浮橋



これは、浮船を横にして上に鉄板を掛けるという工法で、別の場所でも採用されています。造った人は政府でなく民間の方で、河南省の商人です。東輝貿易公司という輸送業の会社を営んでいた人が、何十年も前からここに橋を架けて手数料ビジネスや運送業をしたいと考えて橋の建設を申請したそうです。長い時間の後にやっと着工にこぎつけましたが、政治的な問題も多く、残り 20~30m を残した状態でしばらく放置され、ようやく 2009 年 2 月に開通しました。ちなみに、完成の後に訪問すると、まったく入れてもらえませんでした。中国とロシアしか行けない国境のため、日本人は入れないのです。橋のそばには東輝貿易公司の建物があり、建物周辺にはこの会社の思い描くビジョンや計画を表した看板が数多く設置されています。「同江から世界に発信」といった内容が書かれた看板、ロシア各地の木材の伐採量や貯木量が書かれた看板、中国とロシアを通る鉄道用の橋の建設予定図などがありました。

同江の町の外れには中ロ互市貿易区がありまして、下の写真はその様子です。ここ 1~2 年、500 人ほどが毎日来るとの話ですが、以前はそうでもなかったようです。

同江・中ロ貿易区





最後に、中ロ国境周辺のその他の町をいくつか見ていきましょう。まず、小さい町ですが、名山からです。

その他の中ロ国境: 名山



- ・ 羅北口岸は通常1日30-500人のロシア人
- ・ 10月のこの時点では1日十数名程度。(実際2009.10.15入国したのは数名)
- ・ ここから入るロシア人は 羅北や鶴崗、もしくはジャムスやハルビンに行く。
- ・ 09,08年と木材は輸入せず。07年にはやや多かった(ジャムス港務局名山港長談)
- 名山ロシア木材輸入量:
2007年13万立方メートル
2008年冬季1.8万、夏季1.7万立方メートル
- ・ 冬季水上をバスやトラックで運ぶ。
- ・ 現地の人々のロシア人への印象はあまり良くない



右上の写真が港湾です。右下は繁華街に当たる場所ですが、非常に閑散としていました。私が入国の現場を見たときには、入国者は5~6名程度でした。左上は同江からバスで名山に向かった際に、バスごと船に乗って運ばれた場面です。この辺りは橋が少ないので、おそらくこうした運搬が、普通なのだと思います。

この町もやはり金融危機の影響を受けました。ここには元来、水送で木材がそれなりに入っていましたが、現在はほとんどありません。冬場にトラックで積み運びするだけという話でした。水送木材に関しては同江がすべて集めてしまい、他の地域には行かなくなったようです。

次に撫遠を紹介します。右上の写真が国境ゲートで、右下はロシア人の多い街中の貿易区のような場所です。左下は、最近できたばかりの国境です。

撫遠

- ・ 下左図: 烏蘇鎮から船でウスリー江の船場からヘイシャーズ島を見る。
- ・ 2008年4月、ヘイシャーズ島335平方キロの内、175平方キロを中国はロシアから割譲された。
- ・ 下右図は、できあがったばかりの国境線。右のロシア教会と左の中国側建物の真ん中に国境を示す標識がある。





撫遠から少し離れた場所にウスリー江の烏蘇鎮^{うすちん}があります。そこから船に乗りヘイシャーズ島を見てきました。ここは長らく、中口間で国境線が画定しなかった場所ですが、2008年4月に335 km²のうち175km²がロシアから中国に割譲されました。残念ながら写っていませんが、写真の真中辺りに、新しくできた国境を示す小さいくいが立っています。くいの右側、つまり写真の右端にある建物はロシアの教会でして、反対側の左端に写っているのは中国の歩哨のような見張り台です。

見張り台のさらに左側では、中国が軍の宿舍や施設の建設を進めています。中国人に話を聞くと、最近是中国とロシアの関係は非常にいい、観光業も栄えている、という声が返ってきます。中国人のあいだでダマンスキー島クルーズといった観光が非常に盛んで、撫遠や、後で紹介しませぬ虎林、虎頭から、夏季に船がでています。

次が老虎といいますが、饒河と呼ばれる町です。左上の写真が国境ゲートで、左下は昔からの碼頭^{まとう}というか、古い港湾です。右下はロシア人のたむろする夜の情景です。老虎はロシア人が少なく、特にお金を持ったロシア人はあまり訪れなくなっています。一方で、売春などが多いこともあり、島の人びとはロシア人に対して批判的でした。

饒河



老虎ももともとは木材がたくさん来て加工業が盛んでした。しかし、水送木材がなくなったせいで大きい企業がすべて倒産しました。訪問した小さな木材会社で話を伺うと、爪楊枝やマドラー、アイスキャンディーの棒を作っていました。実は、この老虎から虎頭、虎林にかけて、現在、国境沿いの大きな道路を建設中として、その関係でシラカバが切り倒されています。そのシラカバを原材料に製品を生産し、それをアフリカや途上国に輸出しているとの話でした。途上国は品質に甘いため、それなりに商売になるといっていました。

今度は虎林、虎頭です。ここは、木材を扱う量は小さいのですが、広葉樹中心のため少量でも値段的に成り立っています。冬に川が凍ったときにトラックなどで広葉樹を持ってきやすい地域



であるという、地理的要因も大きいです。

虎林・虎頭



鶴西地級市虎林市国境港

- ・中口間で最初の国境橋
- ・通過量、1日400-700車両
- ・1993年開通
- ・ロシア側はマルコヴァ



最後に黒河です。左上の写真は国境ゲートです。右上は中国とロシアの軍人が笑顔で交流している図です。黒竜江の川沿いにいたときに、両国の軍人が何かを船で交換し合う場面に遭遇しました。それについて質問したところ、最近中国とロシアの関係が非常に良好で、軍人同士の小規模な交流が見られる、一緒に遊んでいるよと答えが返ってきました。残念ながら、どういう部隊かは聞けなかったです。

黒河



黒河とロシア側の関係は非常にいいようです。見てきた様々な町の中でも、人の出入りが最も多い印象でした。ロシア側にアムール州があるためだと思いますが、身なりの整ったロシア人が多かったです。町の人間の実感としても、ロシア人のおかげで豊かになったと感じているようでした。

ちなみに、水送木材がなくなった影響は黒河でも大きく、大きい企業の倒産が相次ぎました。残った中級の会社で話を伺ったところ、3年前ぐらいの最後の水送木材を見せてくれました。それが2008年の調査の最後でした。



中国側の各都市のご紹介が駆け足になりましたが、以上で報告を終えたいと思います。

(司会) ありがとうございました。私も今日のような報告をすることがありますが、いつも時間が足りなくなります。ご報告では1万5000kmもの地域を対象にされたわけですが、終わりの方まで情報が満載で、興味深くお話を伺うことができました。あまり時間がないので、質問をまずいくつかまとめて受けます。どうぞどなたからでも。

(質問) 興味深い講義をありがとうございました。お尋ねしたいのは、丸太輸出税の引き上げアナウンス後にロシア側に非常に多くの製材工場が建設されたというお話でしたが、これは丸太の流通を代替する意図の製材工場なのか、それとも中国側で求める最終製品に近いものまで作る工場なのか、どちらかということです。

(永井) 現状では1次加工です。1次加工かせいぜい2次加工で、中国に運びさらに加工します。ただし、加工の度合いによって関税の掛け方が違ってきます。現在は1次加工も認められています。将来は完全な製品に近いものでない限り関税を高く掛ける予定のようです。

(質問) 小さな確認ですが、80%の関税は現在、再延期され、実施されていないのですか。

(永井) 今は実施されてなくて、2011年の1月1日からという話に一応なっています。ただ、また延期されるのか今度は実施されるのか分からないというのが実情で、業者にとっては非常に落ち着かない状況です。

(質問) ロシア側に造られた製材工場の資本はどこからでしょうか。私たちも中国を調査していますが、中国の企業がかなりロシアに進出しているという話を聞きます。ご報告のなかに、モスクワ資本による木材企業買収という話もありました。資本はどこからきているのか、どうふうに増設しているのかを教えてください。

(永井) 確かに中国が外資としては最も進出している印象です。それまでシベリアやイルクーツクあたりではスイスやアメリカの企業が投資しているのを確認しました。日本も出していますが、外資として最も割合の高いのはやはり中国です。あとは普通に銀行から借り入れたりして、



非常に苦しい状況に陥っているようです。

モスクワ資本に関しては、ここ数年で極東やシベリア、特に極東地域の会社で、今までは現地出身の社長だったのが、モスクワ出身の社長に代わってきています。つまり、モスクワ資本の進出が急速に進んでいます。林業に投資するうまみがどこにあるのかというと、木を切ってしまった後に石炭や天然ガスの開発ができるのですね。そのため、輸出税の引き上げは、実はモスクワ資本、特にモスクワ新興財閥がそうした林業後の利権を狙って構想したのではないかというのが業界の人たちの見方です。それで、プーチンとかと関係をもつ新興財閥が、プーチンと一緒に働き掛け、こういうかたちになったのではないかとわれています。

(質問) そうしますと、税の適用はこのところ延期が続いているわけですがけれども、延期を支持する勢力というのはどういう人たちでしょうか。

(永井) 延期が繰り返されるほど、税の適用時期がはっきりしなければしないほど苦しい状況に置かれるのは、極東の会社です。ですので、わざと延期にして企業の淘汰をはかっており、大企業だけが残る方向に政策的に誘導しているといわれます。大企業だけ残った方が政府もコントロールが利きやすいわけです。中国も似た状況があります。ロシアでも少し前に、金融危機で苦しくなったときに、大企業だけを対象に救済政策を実施する、しないという話がありました。それと同様に、政府の意向に沿う数社だけを選別する方向に、おそらく向かっているといわれています。

(質問) 調査の方法について質問ですが、どういう形で、何かグループで行かれているのでしょうか。

(永井) そうですね、基本的にはある若い女性と2人組で調査しており、ロシアでは通訳に同行してもらいます。中国では通訳なしで調査します。ロシア語もできたらどんなにいいかとも思っています。

(司会) 写真を撮るのは大丈夫ですか。ロシア側では大変だと思いますが。

(永井) そうですね。怒られたことが何回かあります。幸いに写真を取りあげられた経験はな



いのですが、そうならないよう注意してくれという話は事前に受けました。ただ、調査地域が中国側もロシア側も国境地域ですし、いつ取りあげられてもおかしくないと思います。ちなみに、最初に入った地域では、スパイか何かと疑われる場合が多くて、確認の問い合わせが何度も来しました。

(司会) ロシア側に関しては、ここ最近、国境地域に入るのが厳しくなっている印象があります。この何年か継続して行かれていて、その辺の変化を感じますか。

(永井) 中国で一時期、北朝鮮問題もあって、北朝鮮近辺への日本人の訪問が非常に厳しかったときがあります。ただロシアとの国境地域に関しては、中国では自由に動き回っています。一方ロシアでは、必ず旅行社を通しており、良くも悪くも旅行社が派遣した通訳も付けているので、それほどトラブルにはなっていません。ただ、ワニノなどの港湾は原則撮影禁止です。港湾に入るには観光ビザではだめで、業務ビザが必要です。そのため、基本的には企業関係者しか入れないのですが、私がお会いしたプロスモルポルト社の社長がいい方で、ずっと一緒に回ってくれました。それで、何のおとがめもなく写真を撮影できました。ただ、NGOやNPOが不正木材輸出禁止と主張して乱入したりするので、非常に警備は厳しかったです。

(司会) 私も同様の方法を使いましたが、ロシアの旅行社を通した方が絶対に安全と感じます。ただ、国境の島の数を数えに行くとか本音はいえないので、地域経済の環境を見るといった名目になります。その場合、一番大きい工場に連れていかれるのですが、だいたいアムール川沿いにあります。私が工場の写真を撮らずに、反対側の国境の写真ばかり撮影したところ、お前は自然に興味があるのかと嫌みをいわれました。どうぞまだ時間はあります。他に質問はございませんか。

(質問) ロシアに関するご報告の最後の辺りでおっしゃっていた、かつての選伐が皆伐になり、さらに植林する企業も出てきているという話についてご質問です。植林というのは何を植えているのか、植林をする理由は何か、教えていただけますか。

(永井) 報告では、植林を行う企業として、ザバイカリスク林業会社をご紹介しました。ここは昔は、ごく普通に選伐していましたが、選伐ではコストが見合わない状況になり、林業局と話



し合って皆伐する代わりにマツの幼樹を植える方法に切り替えました。数十年放置する方法だけでは森林が回復しないのが現状です。

ちなみに、この辺りの地域は、中国とロシアの国境に近いこともあって盗伐や乱伐が非常に多いのです。夜間に密輸業者が伐採した後はひどい状況になります。というのも、木をきちんと切らずに途中から切るためです。しかもお金になる分だけ切って残りは全部捨てていくので、悪い病気も流行し、森林中の荒廃が進みます。森林の荒廃の度合いは、よそと違うと思います。そうした事情もあって、皆伐、植林による森林管理という方法を採用したようです。

(質問) 植林は増えそうでしょうか。

(永井) 難しい問題です。植林しないと伐採権を与えない方針になっていますけど、実行して森林管理できる企業という、大企業に限られてしまいます。ただ傾向としては間違っていないといえますか、いいと思いますが。

(質問) 樺太を研究する者ですが、樺太でもやはり同じように盗伐が非常に多いという話を聞きます。盗伐者が証拠隠滅のために火をつける話もよく聞くのですが、そういう話はあるのでしょうか。

(永井) はい、あります。非常に一般的です。盗伐を分からないように燃やしてしまう事例はとて多いです。そうした森林火災の跡地も見てきました。ハバロフスク周辺とかにもかなりひどい場所があります。

森林局の関係者が、ロシアになってから林業関係の予算を削られて非常に貧しくなり、それで盗伐して跡地を隠すために火をつけるという例も多いと聞きます。

(質問) 非常に簡単な質問があります。写真では大量の木材が写っていましたが、これの通関手続きは簡素化されているのでしょうか。

(永井) 満州里では、通関手続きは比較的難しくない、簡素化されていると聞きました。その手続きについて話を聞いた際には、中国側で特に木材を必要としているので、中国側はあらゆる優遇をして、できるだけ簡略化しているとの答えでした。



(質問) 初歩的な質問ですが、ご報告のなかに、線路の途中から見た森の写真がありました。あれは、拓伐した後に残ったものなのか、それとも、切った後に自然に生えたものなのか、あるいは、植林した跡なのでしょうか。

(永井) これらは全部、すべて伐採して回復途中の状態です。特にハバロフスク近辺ですと、切って数年の森林が広がります。奥地の森は比較的回復していますが、それもすべて何回も人が入り伐採し、回復途中にあるものです。一方、シベリアですと森林の回復も遅く、現在のサイクルを続けると、森林資源の劣化速度はやはり早くなってしまうと思います。

私は樹海のような森林を見たいと思ってバム鉄道沿線に入ったのですが、残念ながらまったく見られませんでした。昔のロシア文学に表現されるような見渡す限りの樹海の情景は、相当の奥地まで行かないと見られないそうです。

(司会) アムール川の中国側の交易点というか、国境に私はすべて訪れた経験があります。今、昔の各都市の姿を思い出していたのですが、満州里、黒河、綏芬河はすでに重要地点でした。報告をお聞きして、これらの都市は順調に発展を続けている印象を受けました。それ以外の都市については、栄枯盛衰と申しますか、発展に差が生じたように見受けられました。饒河はもともと田舎町でしたがその後もそれほど発展せず、虎頭、虎林も事情は同じであまり変わっていないと感じました。

撫遠については、私が訪問したときにすでに、ハバロフスクから船で大勢の人が来ていたので、おしゃれで開放的なイメージがありました。その撫遠に関して質問があります。黒竜江省の方では、国境線が引かれたことを受けて国境地域の共同開発の話もでているようなのですが、そういう話の現実性について、どう考えられるでしょうか。これが質問の1つです。

他の場所に関して感想をいいますと、アムール川沿いの名山の変化に驚かされました。私が行ったころの名山は栄えていたのですが、それが現在は没落しているわけですね。また、逆の変化ですが、同江の変わり様にも驚かされました。おそらく、ご報告にあったように同江が発展するとは、誰も予想できなかったと思います。

同江に関して、国家主導では橋が建設されないので、民間で浮橋をつなげたとの話をされました。しかし、同江の位置するアムール川の地点は、松花江と合流するため川幅が広く、従って同江からニジネレンスコエまでの距離はそれなりにあります。同江が発展した理由として綏芬河



の支援があるという話は、私もハルビンでかなり前に聞いたことがあります。一方で、ニジネレニンスコエの方では、ユダヤ資本が入っているのが大きいという話を耳にしました。いずれにせよ、何で同江が発展したのかというのは非常に分かりにくく感じられます。そして同江の発展と並行して、近隣の名山が落ち込んだわけですが、名山の方が発展する可能性もあったと思います。名山ですと対岸の町までの距離も短く、浮橋でつなぐのであればこちらの方が容易だったのではないのでしょうか。ですので、同江が発展した事情について、ご意見をお伺いしたく思います。これが第2の質問です。

(永井) 私も同江が急激に発展する前に1度訪れたことがあります。そのときには驚くほどの田舎町でして、外国人なんかは誰一人いないような場所でした。バスターミナルもぼろぼろでしたが、今では綏芬河のバスターミナルにも劣らない、広くてきれいなものに代わっています。町中も古い建物はすべて解体してしまい、現在新しく建て直しているところです。

私は前後の事情を詳しく知らないのですが、どうして同江だけこうなったか申し上げづらいのですが、木材貿易の関係で1ついえることがあります。同江はアムール川と松花江がぶつかる場所に位置します。そのため同江は、松花江から内陸の方向へ、木材の国内ルートを持っています。

(司会) しかし、松花江は少し入ると水量がかなり減ってしまい、ハルビンまではほとんど船で行けない状況ではないのでしょうか。

(永井) 松花江自体は補助的にしか利用できないにせよ、多少使えると思います。また、木材の加工工場が同江から内陸に向かってずっと点々と続いています。同江の場合も、また撫遠の場合も、背後にそうした工場が存在します。それらは全部、外国向けではなく国内向けで、質は良くありません。そして、大量に一度に運ぶというよりは、資本の低い中小企業が、水送やトラックで少量ずつ運搬しています。

金融危機以降も中国国内の需給は非常に強いので、その関係もあり、私が調査している期間、同江は発展を維持している印象です。ただし、それは木材貿易に限った話です。他の面でどうなのかというのは私も分かりません。いずれにせよ、現在、綏芬河に追いつくほどの勢いで発展しているのは確かです。

(司会) 松花江の出口の辺りは広いですが、現在でもはしけで渡っているのでしょうか。



(永井) そうです、渡っています。さきほどの写真です。

(司会) そうですね。それでは、その辺りを含めた同江一帯が発展していると考えていいでしょうか。

(永井) はい、そうです。

(司会) ご指摘はおそらく正しいと思います。対照的な事例として興味深いのは、東寧です。私が東寧に行ったときには、第2の綏芬河を目指すと氣勢をあげ、非常に元気がよかったです。結局だめになりました。地理的な近さもあり、全部綏芬河に吸収されるに違いないと予想したのですが、その通りになったと思います。おそらく同江の一人勝ちというのは、同江だけではなくてその周辺地域が全部固まりになってのものです。それで名山も東寧のように、落ち込んだのではないのでしょうか。

(永井) そうです。松花江に関していいますと、水運が少なくとも人びとの足にはなっているのです。家畜や野菜といったちょっとしたものが、安価な運賃で運ばれています。また、黒竜江の水運に関しても、今一手に引き受けているのは同江というのが私の印象です。他の場所では水送木材をほとんど見る事ができない、あれほど木材が積まれているのは同江だけです。今後3年間ほどは水送木材の輸入はないというほどの量です。

(司会) そうすると、国境地域で中心となる場所がはっきりしつつあり、黒河、同江、綏芬河がそうやってきたわけですね。撫遠についてはどうでしょうか。可能性はありますか。

(永井) 撫遠は、非常にあか抜けていて、それなりに人も多く明るい場所、という印象です。この印象は他の場所の印象と違ってしまっていて、同江の勢いと異なる活気を撫遠では感じました。あと、国境の画定を受けて、観光業が今非常に盛り上がっています。クルージングは200元ほどします。現地の人がすると値段が高いですが、中国国内だけでなく台湾や様々な場所から観光客が集まっています。また、そうした観光資源を生かそうとする試みを、いくつか計画中和聞きます。



ハバロフスクからも人が来ています。撫遠にとっては、ハバロフスクが背後にある影響は大きいと思います。国境沿いの中国の町では、どこからロシア人が来るかにより、町の雰囲気が変わる傾向が強いです。それなりにお金を持ったロシア人が来る場所であれば、町が潤い中国人もロシア人との交流を推進します。一方、それほどお金のない田舎のロシア人が、買い物やよからぬ目的でくる場所の場合、現地の人たちの感情は複雑で、お金を落とす面もあるが歓迎はできない、と感じています。

(司会) ロシア人を対象にした観光開発という話にもなってきますね。そうすると、ロシア人が来たいと思うかというマインドの問題が重要です。ダマンスキー島、つまり珍宝島のクルーズにしても、ロシア人が参加したいと思うかどうか。あるいは、ヘイシャーズ島で共同公園か何かができたとしても、ロシア人が来るとは限りません。彼らにしてみると、自分たちの土地を取られたという感覚があるかもしれません。

(永井) 中国側の感覚についていいますと、係争の歴史には頓着がない様子です。私の訪問時も、夏はクルージングをやっているよ、すごく大きいきれいな帆船で、値段はするけど日本人なら高くないでしょうとあって、気軽にチラシを配られました。なかには宿泊込みのプランもありました。すでに実施されているわけですが、ロシア人がどう受け止めるかは難しい問題です。ただ、若い世代とか、そうしたことを気にしないで国際国流しようという人たちも、それなりにいるのではないかとはいえます。

(司会) ハバロフスクやビキンの人など、あの地域のカウンターパートのロシア人に考えを聞きたいですね。誰かと組んで、ロシア側の調査もすると面白そうです。

(永井) そうですね。あとロシア側から来る人に関して気づくのは、金融危機で非常に貧しくなったことで、中国への買い物が増えている側面です。ロシアでは買い物が困難ですが、中国では必要な服や雑貨を買ってそれなりのぜいたくができます。そうした側面もあり、綏芬河では金融危機以降にロシア人が多くなり、むしろ活気が出ました。そのため、中ロ国境地域では、金融危機を受けても人手が減っていないという逆転現象が起こっています。

(質問) 金融危機になりロシア人の訪問者が増えたというお話をお聞きして、思ったことがあ



ります。ロシアでは、現地の人にとりガソリン代が相当高いのですね。国際価格だとは思いますが。そうすると、例えばウラジオストクの新聞などで、モスクワへ行く航空券代が高騰し普通の人では払えない、私たちには人権がないという記事が掲載されたりします。燃料費の高さゆえに、飛行機や、あるいは自動車の移動が制限されるなか、近場の中国側に行くという面があるのかどうか、お聞きします。

(永井) ロシアの方々は、大型バスなどを利用し安い運賃で、比較的近い中国の町に行き、ひたすら買い物をしています。相当量の買い物ですので、おそらく転売する人が多いと思います。年配の女性が多く、特に子供服や子供用人形を買っています。確かに、ガソリンの値段は高いですし、ロシア内の苦しさがそういう行為を促す面があると思います。

(司会) 時間になりました。本日のお話を聞いて、何か自分の出発点、原点に戻ったような気がして非常に刺激的でした。やはり中口関係はこうやって現場から見なければならぬと感じました。いずれ1度、中国の旅その後というのを実現したいと思います。

それから今日は、我々が今まであまり開拓していなかったクライアントの方々、林業関係者がこんなに来てくれるとは思っていませんでした。ご参加に感謝いたします。最後に、報告者の永井さんにどうぞ拍手を。本日はありがとうございました。



北海道大学グローバルCOEプログラム

ライブ・イン・ボーダースタディーズ

文学と国境:菊田一夫「君の名は」における北海道と沖縄

日時 2010年6月23日(水)17:00-18:30 北海道大学スラブ研究センター四階大会議室

報告者 横濱雄二(北海道大学大学院文学研究科 映像表現文化論講座)



講演者
横濱雄二
●北海道大学大学院文学研究科
映像表現文化論講座

参加自由・
事前申込不要

北海道大学
スラブ研究センター
4階大会議室
〔札幌市北区北9条西7丁目〕

2010年
6/23水
start
17:00
▼
18:30

「君の名は」は出版された後、昭和27年から29年にかけて、一次ブームとなつた菊田一夫原作のラジオドラマ『君の名は』は、映画三部作が連続して7人の命を絶たれ、大地上に上ることで、戦後最大のメロドラマと目されることとなつた。本セミナーではこの物語の複数の媒体(ラジオドラマ・小説・映画)における内容の差異と回復を、沖縄の歴史、北海道のアイヌの表象を中心に検討する。戦後日本が何を「故郷」しようとし、何を忘れ得なかつたのか、文藝的に浮かび上がるその傾向を指摘したい。

お問い合わせ
Tel: 011-206-4809/3314
E-mail: info@borderstudies.jp
http://borderstudies.jp/ *ウェブサイトに最新のお知らせ

主催
●北海道大学グローバルCOEプログラム
「境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界」
●北海道大学スラブ研究センター



(司会) 横濱先生は北大の文学部をご卒業され、修士、博士と、ずっと北大で研究をされてきています。これまでの業績を拝見しますと、例えば『新世紀エヴァンゲリオン』や『五分後の世界』、『真珠夫人における女主人公』、『もののけ姫における主題の変容』など、戦後の日本文学やアニメーションの分野から日本の在り方というものを検討されているように思われます。

それからもう1つの特色は、おそらくメディアミックスということだと思います。例えば『君の名は』ですと、何もドラマだけではなくて小説から、それから映画といったものを全部含めて、それぞれの微妙な違いというものも考察に入れながら論じられるのが、ご研究の特色であると思われまます。では、横濱先生、よろしく願いいたします。

【「君の名は」と北海道】

(横濱) 私はアニメーション、それから実写映画も多少扱っておりますが、関心としましてはメディアミックス、つまり、文学や映画といった特定の表象のあり方ではなく、いくつかの表象を横に横断して表れるような構造に興味を持って研究を進めてまいりました。したがって、それぞれのストーリーの比較をしながら、それと同時に、その構造を探っていくという、いわばメタ物語論みたいなことをやっております。

さて今回のテーマですが、『君の名は』という菊田一夫原作のラジオドラマを取り上げてみたいと思います。この作品には実は沖縄が出てくるのですが、今の私たちにとっては意外に思われるかもしれません。

北海道の方は覚えていらっしゃる方が多いかと思うんですが、映画だと「アイヌの娘」が非常に印象的です。北原美枝さん(石原裕次郎の奥さん)ですね。映画では美幌駅とその前の真知子松が出てきますが、実際には美幌駅ではなく、南屈斜路駅だったか、どこか別のところで撮影されました。なぜかという、当時の美幌駅は線が4つある大きい駅で、連結所があるんです。そうすると、ちょっと北海道の風情が出ないということで、ロケーションを変更したんです。つまり、大きな駅だと北海道的なエキゾチシズムが出ないという話なんですね。

本題に戻りますが、『君の名は』と題するラジオドラマは、昭和27年から29年にかけて全98回、放送されました。NHKラジオ新聞という新聞がございまして、ラジオの編成表が載っているものなんですが、そちらでも全99話で連載されています。ラジオドラマの冒頭では、最初に「あれから7年」という言い方がされていますが、実際に放送が行われた昭和27年から見て7年前ということなんです。物語は、昭和20年11月24日、真知子が東京から引き離され、叔父に連れら



れて佐渡に船で渡っていくという場面からスタートします。

映画の方は松竹大船の大庭秀雄が監督をして、大船調メロドラマで大当たりしました。ラジオと小説の方は全4部の構成ですが、映画の第1部というのはラジオでいう第1、第2部を合わせたものという形で、第3部が映画の第2部。映画の第3部はラジオの第4部という形で、ちょっとずれています。最終的には総集編が2回作られて、2回目の総集編が昭和37年5月です。

現在VHSで総集編が出ていますが、平成3年の連続テレビ小説のときにリリースされたものがあるんです。これは昭和37年度版に基づいています。あと復刻のDVDが出ていますが、そこらは第1部、第2部、第3部のみで、総集編は収められておりません。

【菊田一夫の意図と「君の名は」のあらすじ】

さて次に、ラジオドラマ製作者の意図なのですが、『放送文化』というNHKの月刊誌を見ると、菊田の構想が説明されています。「東京、佐渡、志摩で、お互いに縁のないグループを交錯させることで、三つ編みの縄のようなストーリーを展開させていきたい」と。しかし結果としては、連続放送劇では春樹と真知子のストーリーが中心となります。ここに、元陸軍少将の加瀬田修造と売春婦の梢という娘の交流、それから春樹の実の姉である戦争未亡人の後宮悠起枝と水沢謙吾の交流という筋が絡みます。

さて、こうやって最初は3本の筋を作ったわけですが、菊田は放送終了後に、こういうふうに述懐してしまっていて、書こうとしたものは庶民の群像だったけれども、春樹と真知子に人気が集まってしまって、作品が初期の目的とまったく別の形になってしまった。つまりメロドラマとして作るつもりはなかったんだけど、メロドラマになってしまったということを言っています。

大まかなあらすじですが、第1部は基本的に真知子と春樹の物語ですね。真知子が春樹を捜し歩くというのが第1部の中心です。舞台は佐渡から東京へ、東京から志摩に移っていきます。真知子が志摩に行ったときには、春樹は既に東京に就職で戻ってしまっていて入れ違いになりました。真知子はそこで一度は諦め、浜口勝則という見合い相手との結婚を決意するという展開になります。

一方で梢はいわゆる売春婦、つまり数寄屋橋でお客さんをつかまえるという、そういう職業だったわけですが、米兵との子供を出産してお金が必要だということで、加瀬田修造が仕方なく密貿易に従事をする形で沖縄に行くという話になります。

後宮悠起枝は伊勢志摩の和具というところに住んでいるのですが、そこで水沢謙吾、戸村奈美



と三角関係になっていきます。真知子は春樹の姉、つまり後宮悠起枝を訪ねて志摩に行きますが、そこで見合い相手の浜口勝則との結婚を決意します。また、加瀬田修造が密貿易のときに、なぜかこの伊勢志摩から渡っていくんです。そういう意味でも、志摩はストーリーの展開上、重要な結節点となります。

第2部は、だいたい東京を中心に展開するようになります。真知子は、夫の勝則と姑の徳枝から後宮春樹と通じているのではないかという疑いを再三掛けられて、そのたびに釈明をするのですが、とうとう耐えきれなくなって佐渡の実家に帰ってしまいます。その話を聞いた春樹は、佐渡に向かって真知子と再会をするのですが、これが映画の最後の山場ということになりますけれども、そこで真知子が勝則の子を妊娠しているということが分かって、泣きながら2人は別れるというのがストーリーラインの中心を占めます。

他の2つの筋ですが、修造は密貿易から足を洗って、梢と果物屋を営むということになります。志摩では水沢謙吾と奈美が結婚をするという形で三角関係は終わるのですが、これは真知子・春樹の筋と相似形をなしていて、奈美は悠起枝と謙吾が通じているのではないかと再三にわたって疑った揚句、ほとんど発狂に近い形で水沢謙吾を傷つけ、自分も死んでしまう。こういうストーリーになります。

一方で悠起枝は東京に出ていくわけですが、ここでだまされる形で夜の女に身を落とします。結局のところは、修造が店を出したときに、その店の手伝いとして安定した生活を送ることになります。

第3部ですが、今回はここまで扱って、第4部は時間の都合で省略したいと思います。第3部では美幌が登場します。春樹は傷心で、佐渡から美幌に渡っていく。アイヌの少女ユミから求愛されるわけですがけれども、結局のところ真知子が追いかけていくので、ユミの恋は実らず。小説では事故か自殺か、ちょっと判然としない形です。映画では摩周湖に身を投げるとい形になっています。

次に悠起枝ですが、彼女は仁科という男性と縁談が進む。しかし、悠起枝の過去を知る男から、売春のことをばらすぞという脅迫を受けるんです。修造がそれを何とかしようとして、脅迫相手にけがを負わせてしまって収監され、それで密貿易の過去が暴かれるという形になります。この一件が報道されることで家族が修造の消息を知り、それで留置場で再会することになります。

【メロドラマ：二項対立の世界】

さて、メロドラマとずっと言っていたんですが、じゃあ、メロドラマって何だということを確認



認しておきたいと思います。ピーター・ブルックスという人の『メロドラマ的想像力』という本が1970年代に出されまして、これ以降メロドラマというものに対して注目が集まるようになりました。

彼によると、メロドラマというのは善悪二元論の世界でありまして、登場人物も全部、善か悪か振り分けられます。善悪の中身について検討されたり、その背景にある社会状況について考察を深めるということではなく、人物が単純な善悪の世界に登場して、それが対立関係になったり、さまざまな葛藤を演じる。最終的にどちらか、つまり勝利するか解放するか。どちらでもいいんですが、聴衆の共感を得やすい形、つまり我々が持っている道徳や価値観に呼応する形でストーリーが展開します。したがって演出においては、構図が単純化されますし、舞台装置もそういう善悪二元論を強調するような組み合わせが選ばれるということになります。

ちなみにピーター・ブルックスは、文学や戯曲をメインに研究した人で、映画を扱ったわけではありませんが、映画学者の加藤幹郎はこのブルックスも踏まえつつ、『愛と偶然の修辞学』の本の中でメロドラマに関して幾つかの論点を提出しています。

加藤幹郎は、過去を回想するのがメロドラマの1つのパターンであるとしています。つまり、自分の人生を、ある固定された価値観に沿って回想し、それで今後の自分の方針を軌道修正するのが基本パターンとなります。この価値観というのは、言うまでもなく、その時々で支配的な道徳、つまりは支配的なイデオロギーのラインに沿った価値観ということになります。メロドラマ的な物語はそうすると、ある市民、ある個人、ある主体というものを視聴者に提供したり、それを創り出したりするということになります。例えば古代の悲劇では英雄的な人物、神話では神が主人公となり、我々とは縁遠い存在です。彼らは私たちが真似をしたくてもできない人たちなんですが、メロドラマの主人公は私たちと同じです。つまり、真似ができる。入れ替えが可能だということです。

『君の名は』では、真知子がとことん虐げられ、最後の最後に春樹と一緒にするというので、彼女は強い方ではなく弱い方に属します。抑圧者・非抑圧者という二項対立は必ずしも明確ではありませんが、いずれにせよ、彼女は理不尽な外圧に翻弄され続けます。ここで重要なのは、理不尽な外圧が所与のものとして描かれており、それ自体に疑問を提示するわけではない、という点です。外圧について内面的な考察を深めたり、社会状況がどうであるかということを考えてしまうと、メロドラマではなくて社会小説あるいは心理小説になってしまいます。

トマス・エルセサーについても言及しておきましょう。ブルックスとエルセサーは、お互いに干渉しないというか、同じ時期にブルックスが文学、エルセサーが映画でメロドラマについての



研究をしていました。エルセサーは「最良のメロドラマにおいては舞台装置、色彩、身振り、フレームの構図が完璧に主題化されている」と述べています。つまりそういった要素全てが、二項対立のメロドラマを構築するものと機能するわけです。

【『君の名は』の3つの空間】

ここまで来てようやく報告のテーマに到達するわけですが、『君の名は』の空間的な編成を把握する、というのが本日の目的です。『君の名は』は菊田が言うように元々は群像劇なんです。でも結果として『君の名は』はメロドラマという二項対立の世界になってしまう。『君の名は』で最初に設定された多様な空間が、どのようにしてメロドラマ的な二項対立の編成に入れ代わっていくのか。その点を追ってみたいと思います。

もう1つはメディアミックスということなんですが、最近の傾向としては、企画の時点で漫画とかアニメとか、ラジオドラマのようなものを同時に進行させる。しかし『君の名は』はそうではありません。最初は菊田一夫がラジオドラマと小説の連載をほぼ同時に行っていますが、映画は事後的に作られています。当たってから松竹が買い付けたんですね。つまり、映画制作のレベルで過去、つまり作品を回想し直して作り直す、メロドラマ的に過去を再編成するというのが、メディアミックスの中で行われているわけです。ですから、ラジオ・小説・映画という流れの中で話が繰り返されるたびに、メロドラマ性が強まっているということになる。その辺も考慮する必要がありますでしょう。

具体的には、途中から消されていってしまう沖縄、北海道のアイヌ、戸村奈美という海女が出てくる志摩。この3つの空間を比較していくことになります。

まず沖縄。昭和21年に修造が密貿易団に加わって沖縄に行き、そのまま数年間、沖縄に滞在します。昭和24年の大晦日に彼は志摩に戻ってきて、東北で修造を密貿易に誘った人物、長島という男と絶縁して東京に戻ります。その後、先ほど言った後宮悠起枝と仁科という男の再婚を後押ししつつ、果物屋を営むということになるんですけども、それで暴力事件を起こし逮捕されて、その後すぐ釈放されて、結婚式の媒酌人を務めるんですが、結婚式の当日に刑事が現れて逮捕されるという形になります。これはラジオと小説のストーリーです。沖縄の場面はラジオでは4つ。小説では4つではなく、2つにまとめられています。映画ではそういう場面は一切省かれていて、修造の逮捕によって彼の密貿易が暗示されます。

3つの場面を取り上げておきたいと思います。まず、ラジオドラマで修造が沖縄で出港する仲間を見送るシーン。見送ったところで地元の少女がそこにいて、その少女と修造が会話をすると



いう筋立てになっています。このとき、修造は帰りたいと言って泣き出します。少女に何をしているのかと聞かれた修造は、砂糖の密貿易をしていると告白します。そこから少女も過酷な戦争体験について語りはじめるわけですが、その結果、2人が感情を共有し、抱き合っ泣く。こういう展開になっています。

小説でこの部分に該当する場面は、梢から手紙で置き換えられています。密貿易団の人が律儀に手紙を渡してくれるわけです。手紙の文章は、加瀬田のおじさんという呼び掛けで始まり「でもね、それは悪いことをして集めたお金でしょう。梢はそれが悲しい」と続きます。修造はその手紙を読みながら泣くのですが、そうすると、泣いている理由がラジオと小説で変わってしまう。ここが問題なんじゃないかなと思います。

ラジオでは修造の寂寥感が、沖縄で現地の少女と交流することで、逆に強められるという形になっています。ところが小説では、梢からの手紙を見て泣くということですから、どこにいてもいいのです。梢と結び付くので、これは東京と結び付いているということになります。映画では、この場面はありません。沖縄は、ラジオ→小説→映画へのサイクルの中で消えてしまうのです。これが第1の隠蔽です。

【沖縄における密貿易】

2つ目の場面を取り上げてみましょう。これはラジオですが、修造が春樹に語りかけるシーンの途中で、モーター船が走る音、弾丸の飛来する音が徐々に入ってきます。その後、修造のナレーションが被り、「密貿易船と取り締まり船による？」銃撃戦の場面が入ります。修造は戦闘の指揮を執って、敵の射手を打てと命令しています。一方、小説ではこういう生々しい戦争のシーンはなく、修造の語りという形でまとめられています。修造は戦闘に対する不安を語ると同時に、スリルにあふれた戦場への郷愁も表現されています。

ここでいう郷愁というのは、2通りに使われています。まず1つは、日本へ郷愁を抱いて泣くということ。ここで琉球の花が出てきましたが、それを使ったり、花を真冬に摘んでくるというようなところで異境性が強調されています。もう1つは戦争への郷愁で、戦場としての密貿易の現場に戻りたい、という感覚が出てきます。小説では、密貿易に妙に誘惑を感じるのも、もう一度沖縄に戻るとい展開になるのですが、その際、お金のためだけに沖縄に行くのではない、という描かれ方をしています。

ここで、当時の密貿易がどういうものだったのか、という点を簡単に見ておきたいと思います。私はこの点に関して専門ではないので、幾つかの本を手掛かりにまとめてみました。まず石原さ



んという方の『空白の沖縄社会史』という密貿易に関する書物があるんですが、それを見ると昭和 21 年ごろに、宮古島から和歌山に渡った例が見られます。

同じ昭和 21 年 11 月の始めには那覇港で砂糖の取引が行われましたが、これが那覇における最初の砂糖のボーダー取引だったと言われています。実際に密貿易に従事していた大浦太郎という人が自伝のようなものを出していますが、彼は、元々陸軍の総長でして、各地を転戦して沖縄で終戦を迎えます。与那国に渡って大阪や台湾と密貿易をするようになったという話です。復員軍人が密貿易をするという点で、大浦太郎と修造の経歴に多少の類似点があるわけです。ただ、東京からわざわざ沖縄に行くというのと、沖縄に引き揚げてきた人という意味で、多少の差があるかと思いますが。

では、ラジオで出てくるような密貿易船と取り締まり船の銃撃戦が実際にあったのかという点ですが、参照した資料では、激しい交戦があったという記述は見当たりませんでした。ただし、少なくとも「本土」近海ではあったようです。昭和 24 年 9 月 9 日付の読売新聞では「海の狼日本沿岸に跳梁」という記事があって、監視船に発見された密貿易船が機関銃やピストルを乱射して映画のような戦闘シーンが展開されたようです。また、朝日新聞にも武装した密貿易船の記事が出ています。とすると、密貿易の武装集団が存在したというのは事実であり、「本土」近海から沖縄まで武装集団が跋扈しているというイメージが当時の社会にはあったのかもしれない。

【修造の逮捕と沖縄の隠蔽】

さて、では 3 つ目の点として修造の逮捕のところに移りたいと思うんですが。これは小説とラジオでほとんど筋の違いはありませんので、小説の方を紹介します。修造は「まず彼自身のこれまでの生活を暴露する」とありますが、これは、悠起枝の過去の影をできるだけ刺激の強くない方法で、仁科に語ってやると。つまりそれとなく教えておいて、事情を含んだ上で結婚をしてくれと言うつもりだったが、話しているうちに、それさえも悠起枝の身にとっては残酷なことであるような気がして、結局言わないで、でも詮索はしないでね、いろいろあなたもあるでしょうという形で説得をする。

これは潮来の場面ですね。潮来の遊覧船の上で、十二橋巡りをやります。こういうシリアスな話をしていて、その夜、宿に泊まると脅迫者から悠起枝が呼び出される。悠起枝さん、あなたは行かなくていい、わしが行くと言って行って、けんかをして、そのまま警察にというストーリーです。その後、先ほどの確認になりますが、修造が出所してきて、悠起枝の結婚式で密貿易という最終的な過去が明らかになって、逮捕されてしまうということになっています。そうすると、



ここでこれはメロドラマ的に隠そうとしているのは過去ですね。密貿易とか売春という過去を隠すことで、現在の幸福を手に入れようという、これはよくあるメロドラマ的な話です。従って物語の展開は、ここでは隠蔽する力と、それを暴く力の二項対立という形で展開されています。

映画の方だとどうなっているのかということですが、結婚式では何もなく、新聞報道でみんな事情を知ることになって、密貿易に加わっていたことも、梢たちは知らなかったという形にストーリーは変わってしまいます。

ちなみに加瀬田修造は、映画では笠智衆がやっています。ラジオの方は、古川緑波がやりました。結構豪華キャストですね。ストーリーの前後も逆になっています。先に密貿易で逮捕されて出所する。そのときに仁科と出会っているという形になりますね。だから仁科は修造が密貿易で収監されている間に、すでにそのことを知っているということがあって、よかったですねというところに、その仁科がいるんですね。いっぱい差し入れをしたかいがありましたみたいな話をしているのです。

そうすると、隠す意味がなくなってしまうという意味で、先ほど出た2つ目の隠蔽という皮肉な形で暴露されているがために、その後問題じゃなくなってしまうということになるんです。しかしながら仁科を詮索しないように説得をする場面は、先ほどとほぼ同じ形になるんですね。

今、見ていただいたように、あからさまじゃない形ですけども、明らかに密貿易のことはお互いに知っているよという、共通理解で話が進んでいるわけですね。そうすると、ちょっとストーリーの改変が行われていて、それはどういう意味なのかということではなくて、むしろ言いたいのは、ストーリーは改変されているけれども、メロドラマ的には結果は変わらないわけです。修造はそれなりに幸福な生活を営むようになっていきますし、悠起枝も再婚が成功することなんです。だからここでは、過去が問題にならないということになります。

さて、この後なんですけれど、映画の第3部の方では、じゃあ、修造はどうなのかというと、梢の息子が交通事故にあって、後でちょろっと出てくるだけなんです。この後は修造そのものが、だんだん出てこなくなってしまう。これは3つ目の隠蔽。登場人物もいなくなっていく。沖縄がいなくなり、過去を隠そうと必死になっていて、その必死になった方の人物も、いつの間にかストーリーから消えていく。

ラジオの最終回では、真知子のもとに関係者が全員集合をする。真知子はほとんど死にかけているわけですけど、そこに春樹が来て持ち直すというのが最終回の筋です。このときに修造は献血をして、真知子に輸血をするわけです。それで何とか持ち直す。後宮春樹とも、君たち2人は一緒にやりたまえみたいなことを言って励ますというシーンです。



ところが小説では、いるのかいないのか書かれないのですね。映画では笠智衆の顔が、この病室のシーンでは出てきません。いるのかもしれないのですけれども、出てこないから分からない。おそらくいないということだと思います。

【笠智衆の忘却とメロドラマ的解決】

『君の名は』と昭和 20 年代』というムックの本では、笠智衆へのインタビューが掲載されているんですが、皮肉なことに、彼は『君の名は』に出ていたこと自体、忘れていてですね。

そうすると、これは第 3 の隠蔽と言っても差し支えないのではないかと思います。そうすると、3 重に隠蔽が行われているわけですね。場所、過去、物語。ここでもう 1 つ考えておかないといけないのは、沖縄だけじゃないですね、場所というのは。伊勢志摩、これは沖縄への窓口だったり、悠起枝のストーリーラインが発展する場所だったのですが、悠起枝が上京していってしまうと、ストーリーラインが東京に移って、悠起枝の問題も三角関係から売春、それから再婚という形でどんどん移ってしまうので、志摩の場面がどんどん減る。そして志摩の場面も最後はなくなっていったって、水沢謙吾はこの後どうなっているのか、分からないんですね。おそらくけがが治って、何回か上京して連絡を取るというシーンはあるんですが、再婚をしたものか、しないものかというのは、そういうのは分からなくなっています。そういう意味で、これは 3 重の隠蔽と言ってもいいかもしれません。

いずれにしても、ここでメロドラマ的な戦略としては、春樹と真知子の愛と障害というストーリーラインで集中をしていくために、ほかの要素を切り捨てているということになるわけです。ここが問題なんですね。一度取り上げてから切り捨てる。つまり、隠蔽するためには、まずそこにあると言わないといけないわけです。あると言ってから隠すということが問題なわけです。

そうすると、これがアナロジー。寓意として、どういう意味を持つのか。現実の空間と対応させたときに、どうなるのかというものも問題になるかと思います。『君の名は』という物語の空間的形成に、この問題は対応しているというふうに、もちろん言えるわけです。『君の名は』における沖縄表象の背後が、メロドラマ的な二元論がこうやって見えるわけですね。1 つは密貿易を悪、それから修造や悠起枝は、本来自分は正義だという意味での悪と正義。そのときに修造が煩悶をする、葛藤する、悪いことをしていると思うということは、悪と正義の対立。だから沖縄は、悪と正義の対立する場所なんですね。

もう 1 つは沖縄が異境で、稍たちのいる東京が故郷だ。異境と故郷という対立関係があります。どっちにしても、これは沖縄の実態とは、ほとんど何の関係もないんです。関係がないけれども、



修造の煩悶や葛藤を描くには好都合なんですね。つまりメロドラマ的に構築されています。

これがあって、初めて修造というのが郷愁があるという、特に私たちが、ああ、なるほどねと納得をする。メロドラマ的に納得をするということになります。従って、密貿易やそういった帰りたい、つらい、遠い、あるいは戦後に戦争未亡人が悲惨な境遇に陥るということは、無根拠ではないと思いますが、しかしながら密貿易を悪だと。自分は正義だと。沖縄は異境でなくて、東京とは違うんだというふうに、ためらいなくイコールで結んでいくというメロドラマ的な編成かなということになります。

もう1つここでちょっと気になるのが、屋嘉比収さんという方が『国境』の顕現—沖縄与那国の密貿易の終息』『現代思想』2003年9月、青土社、186～201頁、という論文を書かれています。この論文では密貿易の取り締まりの強化そのものが、与那国と台湾の間に国境性のものを顕現させたとありますが、この沖縄で修造が出会った名前を持たない少女が、どんどん消されていってしまうような場所が隠蔽されていく、離れていくという問題。

その間、実際の政治空間で国境が現れて、この場合の国境は沖縄と日本の中で引かれるわけですね。統治権外に置いてしまうわけですから、沖縄は米軍統治下にとどまるということになりますから、その間に国境が顕現、現実の政治空間に顕現しておくのと同様に、修造にとっての沖縄も国境の外、つまり『君の名は』は日本全国を巡る話ですから、日本全国外に出て消えてしまうという形で、消されていってしまうことになると考えてもいいのではないのでしょうか。

【エキゾチシズムとオリエンタリズム】

まず沖縄に関してはこのように消されていく、隠されていくという問題があったと考えることができるでしょう。では、今度は北海道の方なんですが、別に北海道は消されていませんので、ちょっとここで別の補助線を引いていきたいと思います。まずエキゾチシズムということについて、松村友視という国文学者の方が議論をしています。作家の村松友視とは別の方です。

国境というものとはちょっと違うんですが、エキゾチシズムというのは何かというと、境界とサイトをどんどん作り続けて、自分は境界のこっち側にいるんだと。相手は境界の向こう側にいるんだと。その向こう側には詩、ポエジーがあるんだという対照をなすんですね。簡単に言うと、私たちは文明人で理性的だけれども、野生の美しさが向こう側にあると言っているわけです。

そういうオリエンタリズムというふうに、私たちは別の言い方で言うのかもしれませんが、そのことを説明しているわけです。だから超えられない境界があるということを前提にして、その境界の向こう側に他者というものをつくります。作り出しておきながら、自分でその他者を見



るときに、それは野生の美だとか、詩があるという形で、他人を所有することになる、視線でからめとる、そうやって言葉で、詩だとか、美しいと名付ける。端的に言えば権力的な視線であるということになります。

門間貴志という映画学者が、日本映画でそういうことを具体的にいくつか指摘しています。戦前の日本人が抱いていた支配者と非支配者という二項対立、あるいはその感覚が今でも継続しているというのですね。チュプ・チセ・コルという、アイヌ文化を深く考えられた方がいらっしゃるわけですが、この方があるセミナーの中で、アイヌを描いた日本映画について詳しく検討しています。その中で『君の名は』も取り上げられていて、かなり強く批判されています。

具体的には3つの批判があって、簡単にまとめておきますと、アイヌのユミが呼び捨てにされているという呼び方の問題、アイヌ女性が性的に奔放と描かれるという表象の問題、アイヌ文化やアイヌ風俗の描き方そのものに問題がある、という3つの問題です。

【『モスラ』と『イヨマンテの夜』】

チュプ・チセ・コルは、その中で興味深い指摘をしていて、ザ・ピーナッツの『モスラ』の音楽、映画の第2部の主題歌で織井茂子が歌う『黒百合の歌』、伊藤久男の『イヨマンテの夜』という3つの音楽がお互いに似ている、と言っています。3つとも古関裕而の作曲なので似ているのは当然なのかもしれませんが、問題はそういうことではなくて、南洋的なものとアイヌの文化を一緒くたにしてしまう感覚が批判されているのですね。

実際、この3つの曲を聴いてみるとリズムがよく似ています。さすがに並べて聴くと違いは分かりますけれども、並べなければ違いは分からないでしょう。いずれせよ、強いパーカッション、太鼓の音がどンドン鳴ることが、イメージとしてあるわけです。

ところで『君の名は』の映画では、『君いとしき人よ』も主題歌の一つとして使われています。『イヨマンテの夜』と同じく伊藤久男の歌です。リズムは基本的に同じですが、打楽器が多用される『イヨマンテの夜』とは異なり、『君いとしき人よ』ではコントラバスでリズムが形成されています。曲の印象がずいぶん違うのですが、打楽器と弦楽器の違いというのは、古関裕而にとっておそらく、古関裕而の曲を受け入れた菊田や松竹、あるいは視聴者である私たちも含めて、これが「異境」と東京のイメージの差ということになるわけです。

では、今度は『君の名は』におけるイヨマンテ（アイヌの祭礼・熊祭り）の描かれ方を考えてみましょう。ラジオの中から順繰りにざっと見ておきますと、やっぱりタムタムが使われるわけです。脚本でも、タムタムを効果音で使えとか、『イヨマンテの夜』を流せという、指示があった



りします。

映画の第2部では、夜に郊外でかがり火を囲んで、タムタムのリズムのもとに踊るというシーンがあります。しかし、タムタムは元々アフリカの楽器なので、イヨマンテでタムタムを使うというのは変です。ところが小説の第4話では、イヨマンテに備えてタムタムを練習する音が聞こえるという場面が描かれています。当時そういう状況があったのかもしれませんが、いずれにしてもこれは、実際の熊祭りとは大きく懸け離れていたのではないかと思います。

読売新聞の昭和28年11月22日付夕刊に北海道からの投書が掲載されていて、元来神聖なイヨマンテでレコードをかけてキャーキャー騒ぐのはおかしいという趣旨の批判がなされています。菊田はこの投書を受けて謝罪したのですが、ラジオなので大目に見てくださいという言い方もしています。とすると、彼は実際のところは反省しておらず、こういうイメージのアイヌ像を創り出したいという発想自体は変わっていない、ということになります。

【記号としてのアイヌ】

先ほど言及した門間という映画学者ですが、彼は、記号としてのアイヌ人という言い方をしています。戦後映画におけるアイヌ像は戦前のイメージを引きずっていて、実態とは異なる古典的な偏見に支配されている記号的な存在だと言っています。『君の名は』に登場するアイヌ人も、『イヨマンテの夜』で描かれているような記号的アイヌ人です。アイヌ娘のユミに注目してみましょう。

彼女の造形ですが、小説ではスペインの野生の娘のジプシーと書かれています。北海道のカルメンという表現もされています。端的に言えば、真知子と違う、つまり、あっちが野生でこっちはそうじゃないという至極単純な図式でユミというキャラクターが設定されています。

春樹とユミの関係についてチェックをしておくと、春樹がユミの求愛を断らないのですね。なぜかという、春樹は簡単に言うと真知子に袖にされて北海道に都落ちをして、さあ、どうしようかという状態でユミに求愛をされているわけですから、別に新しい方に生きてもいいかなというところがあるわけです。春樹は手紙の中で、野生の子であるユミを磨き上げる、という書き方をしています。春樹は文明の側にいてユミは未開の側にいる、あるいは先ほどの門間の言い方だと、支配者と非支配者に分かれてしまっている。いずれにしても植民地主義的な上下の構造というのが、ここにはっきりと書き込まれていると言えます。また春樹は、ユミと真知子の人物像を比較して、前者を「野生美を持ったきつい女・奔放な女」、後者を「屈従性のある女・貞淑な女」としています。こうした野生と文明の対比が、実際のアイヌとは関わりなく行われています。先



ほどの沖縄と同じ構図です。

【映画における「野生」の美】

さて、ユミは雌ヒョウというふうに形容されたりするのですけれども、もう1人雌ヒョウと描かれている人間がいて、これが先ほど後宮悠起枝と三角関係になる、戸村奈美なんですね。

こっちの方が時間的には先になるわけですが、水沢謙吾を積極的に誘惑し、そういう事実をもとにして悠起枝と対決をする。だから悠起枝は、そういう事実があるならばと身を引くので、謙吾と結婚ができたということになるわけです。

でもそこに、悠起枝と謙吾の間の愛情が続いているんじゃないかという嫉妬があるから、やっぱり傷つけるということになります。それで結構けんかは続くというのは、小説では何回か描かれていて、その奈美を野獣だというふうに批判するんですね、謙吾が。そうすると、悠起枝が諭すんです。ここを見てください。「もっと大人になってきた、あなただってその美しさを認めるようにおなりよ」。ここでも大人と子供の比喩が使われているわけです。

そうすると奔放さと貞淑さ、大人と子供、あるいは野生と文明というものは、必ずこの作品の中では二項対立で、しかも空間の中に入れ込まれる。彼女は海女だということが言われて、だから気性が粗いんだという説明もされます。

映画の第1部で奈美が謙吾を誘惑するシーンを取り上げてみましょう。奈美に扮しているのは淡路恵子です。ここではアップが1カットもありません。唯一のアップは、謙吾の肩越しに目しか見えないというところです。映画の基本的な考え方では、アップというのは、その人物に対する感情移入を促す効果があるといわれています。ここでは水平の構図で、ロングとまではいきませんが、ミドルロングというところだと思います。つまりバストショットまででしたね。これでは感情移入できません。淡路恵子に感情移入をするのは難しい。むしろバストショットが出てきたのは、謙吾の方が先なんです。

そうすると、奈美ではなくて、私たちは謙吾の立場からこのショットを見ることになるということになるわけです。他者です。まずここを確認をしたいところでもあります。あともう1つは頭の位置なんですけど、どちらの頭が高かったかという問題なんですけれども、最終的には謙吾の方が見下ろす形になる。押し倒すというか突き飛ばしてしまいますから、そういう形になるんですが、それまでは基本的に水平的で男女関係で男の方が上に立つということはないわけですね。

でも、最後に押し倒す方は奈美の方なんですね。そういう頭の上下関係の問題が構図としてあります。あともう1つ特徴的なのは、このシーンの異常性が際立つのは、何で手前に植物なんで



すかね。つまり私たちは映画のスクリーンの内側に植物の輪に額縁をはめ込んで、その中で見ている。だから感情移入ができないわけですね。

普通だったらあのまま 2 人の人物が演技するのであれば、その人物を前に持ってくればいいわけです。何で手前に余計な物を上下左右、全部取り囲むように置くのか。感情移入できない装置をわざと用意しているということになるんだろうと思います。

したがってここでは二項対立は、ちょっと不安定であるということが、私たちに印象付けられるのと、先ほど言ったように、奈美にはちょっと感情移入しづらい部分があります。

次に映画の第 2 部、奈美と謙吾、悠起枝が出てくるシーンを考えてみましょう。ここで注目したいのは悠起枝の方です。何であれ、ベッドの柵越しに撮らないといけないですかね。つまりあの柵は意味がある。どういう意味かということ、植物の柵に対して人工物の柵。文明と未開というのがまず見て取れると思うんですが、もう 1 つ強烈な柵組みがはめられていて、しかも 2 人の間に縦の柵が入っていますよね。彼らを結び付けられないということが、映画的に明らかに言っているわけです。それが 1 つ。

もう 1 つは、柵が狭いという点です。強い抑圧がかかっているということも暗示されています。そして、悠起枝が途中で 1 回立ち上がりました。月丘夢路です。立ち上がるんですけども、立ち上がったらちょうど首のところに柵がある、構図的に首を切られてしまうんです。悠起枝の不幸を暗示しているわけです。もう明らかにメロドラマ的な構図というのが、これでもかと言うばかりに絢爛に使われているというふうに見ると思うんですけども。

立ち上がるのは、もう許されないのかというようにです。そして彼女はそのまま腰掛けるんですけど、腰掛けたら頭が謙吾より下になるんです。つまり、男性上位という関係で、安定したんです。だからその後、カメラは寄ります。寄ると男女の間にあった柵は左側に退いて、男女が同じフレームに入って安定します。でもその瞬間に、アップのカットでもう会いませんとなり、悲恋は終わってしまう。こういうシーンでも、ここでは二項対立というものが、あからさまに使われている。男女の間、それから女性 2 人の間でもあるということになるわけです。

さて、これとして奈美のシーンでは、カットによってアップが多少出てくるわけですけども、ズームというのがないんですね。徐々に寄っていくということがない。それから植物の柵が取れない。そうすると、やっぱり感情移入をしがたいということになるわけです。

悠起枝には私たち感情移入をしやすいと思うんです。でも奈美にはちょっとしにくい。なぜか。アップのシーンで、彼女はセリフを言わないからです。ものも言わずにナイフを握って切りつける、という不穏な奈美の動きを強調するという意味でも、奈美と悠起枝というのが、違う場所に



位置付けられているんだということが明らかに分かる 2 つの連続、シーケンスということになります。

【抑圧の装置としてのメロドラマ】

今度はユミと春樹の会話を考えてみましょう。このシーンなんですけれども、春樹の表情がちょっとおかしい。何であんなにおびえた顔をしないといけないのか。それから何で押し倒されて立ち上がったときに、まるで顔を殴られたみたいにゆがんでいるのか。これはおそらく、ユミが春樹を押し倒したということに起因しているわけです。

つまり、男女関係で最初のシーンでは、春樹よりもユミの方が下にいて、見上げる形で関与していました。その後、春樹が含み笑いをしながら、応対をするというシーンが続くわけですね。でも後宮春樹って誠実な人物ということで、一応ずっと通ってきたはずなのに、あの応対の仕方は、ちょっとやっぱり大人と子供のように透けて見えるんです。

寝転がってユミが見下ろす、そして押し倒す。立ち上がったら、顔がゆがんでいる。つまり二項対立、男女が上位に置かれているはずが、心配されると、こういうゆがんだ表情を取ってしまうということが言えるわけです。ここではあまりデータのものは、これ以上追求しませんが、そうすると先ほど言った二項対立の上下関係というものが、やっぱりここでも強く打ち出されているということが言えるのではないのでしょうか。

では、最後にユミと真知子と春樹が対決をするみたいなシーンを見ましょう。ユミのアップがあってユミの感情にも私たちは移入できるんですけれども、ここで注目したいのは、後ろからユミをとらえるシーンです。小さな額縁の中に 2 人が仲良く寄り添っているんですが、ユミは木の後ろに隠されるような位置に置かれている。この木がなければ北原美枝の後ろ頭が映るはずなんです。でも映していない、隠されてしまうということなんではないでしょうか。

次にユミの飛び込むシーン。普通、演技空間は真ん中です。映像では、近景・中景・遠景という分け方がなされ、遠景は背景、中景は普通の演技の場所、近景は演技も行われるけども背景の一部を構成する、という形になります。ところがこの近景をまったく開けておいて、遠景に近いところで演技をする。ちょっと面影っぽいところで演技をするんです。つまり、ユミは抑圧される側に置かれ、日の当たるところにはいられない、ということが示されます。

『君の名は』の二項対立の図式をまとめておくと、悠起枝と真知子の場合、貞淑・従順が基準となり、メロドラマ的な抑圧になる。悠起枝は悠起枝なりに、真知子は真知子なりに貞淑であろうとして苦しむことになります。一方、ユミと奈美は、メロドラマ的な抑圧を真知子や悠起枝に



与えるための装置になっている。加藤幹郎の言い方を借りれば、抑圧がずっと存在するんだけど、最後に主人公が行動し、つまりユミや奈美と対決することによって権利を回復するというのが、メロドラマの物語ジャンルとしての構造だということになります。具体的には、悠起枝は奈美について語ることで謙吾と別れる決意を固める。あるいは真知子はユミと対決することで権利を回復する。「お前だって他所の嫁さんじゃないか」と言われた真知子が「殺されても叱られても私は後宮さんを愛しています」と言ってしまうわけです。本人に言えばいいのに。

なぜユミに直接言うのかというと、これが二項対立上の対決であり、言葉を発して抑圧をはねのけるためです。ここで初めて愛の勝利がメロドラマ的に実現するということになります。そうすると、エキゾチシズムというのは、結局のところ実際にその土地の人がどうかということではなくて、異境、故郷の間に国境を設定する国社会をつくり出す装置であって、それはメロドラマにほかならないということになるのではないのでしょうか。ここでは東京が上位で北海道や志摩の女性は下位に置かれるわけです。だから悠起枝は東京に行かないといけないわけです。上位に行くために、ということになるでしょう。

【メロドラマにおける隠蔽の力学】

最後に、メロドラマをまとめておきたいと思うんですが。ラジオドラマ第75回に、ちょっと興味深いシーンがあります。これはラジオだけのシーンなんですけれども。春樹が、僕はシベリアは知らないけども、戦時中に雑誌社の仕事で満州へ行ったことがあると述べます。つまり、満州の話がちょっとだけ出てきます。

このエピソードはラジオだけで、小説や映画では描かれないんですね。だから研究者によっては、春樹の戦時中の経歴がよく分からないと言っている方もいらっしゃいます。もう1つ、石川綾の方は小説では、シンガポールから引き揚げて車夫をしていたとはっきり書いてありますし、ラジオでもそうです。でも映画では、女学校で同級だった石川綾が出て、覚えていないかというふうに言うんですね。経歴が変更されてしまうわけです。これは戦争の引揚げであったり、戦争中の従軍記者という経歴を隠蔽するということも、あったかもしれない。

そうすると、戦後日本の新しい生活が、戦争体験を隠蔽するかたちで成立するということになります。もちろん、植地的なエキゾチシズムがあり、所々で垣間見えたりするんだけど、結局のところ、それはないことになってしまう。『君の名は』の空間的構成としては、沖縄で3つの隠蔽があり、あるいは北海道や志摩ではエキゾチシズムがあるんだけど、それはあんまりはっきりとは打ち出されない。言葉でははっきり打ち出さないで、メロドラマの筋の中で、いつ



の間にかユミが死んでしまったり、奈美が死んでしまったりという形で消されていってしまう、隠蔽されていってしまう。

『君の名は』の空間的な構成というのは、東京と地方の間に差異を持ち込むんですけれども、その差異がないかのように振る舞って、初めて成立するということになります。春樹や真知子は結構簡単に車で移動するんですね。でも奈美やユミは移動しない。そういったことは、つまり今言ったようなことが、メロドラマ的に後から見返してみても初めて、ああ、なるほど、全国を駆け巡る物語なんだと納得できるのであって、最初からそうなっている作りではなかったはずなんです。

『忘却とは忘れ去ることなり』というところなんですけれども、ここで注目したいのが、昭和37年の映画の総集編の第2回の最後です。ここで昭和29年の数寄屋橋と、それが取り壊された後の（正確には昭和37年の）数寄屋橋公園が登場します。つまり、昭和37年のリバイバル当時に、新しい映像が挿入されているわけです。最後のシーンに「数寄屋橋此処にありき」という菊田一夫の碑文が映し出されています。この碑は『君の名は』が当たってから作られたものです。

これが何を意味するかというと、つまり昭和37年の視点から私たちは『君の名は』を振り返っているのだということになるわけです。この1カットによって、昭和37年から昭和27年までを振り返るといって、事後的な視点から見直すんだということ、もう一度メロドラマを作り替える、上塗りすることになるわけですね。

こういうふうに『君の名は』は、実は回を重ねるごとに、どんどん上塗りを進めていく。しかもそれは植民地帝国の領域を最初に想定しつつも、途中からは「本土」の領域に縮小してしまう。つまり、帝国と「全国」が同時に出てくるんだけど、私たちは「全国」しか受け取らない。でも中身は帝国になっていて二重像になっている。また、メロドラマというのは二分法的な性格を持ち、オリエンタリズム、エキゾチシズムといった文明＝野生の図式を持ち込むわけで、その意味でメロドラマは、帝國的であるということになるのかもしれない。

そうすると、私が特に考えないといけないと思うのは、『君の名は』の愛を受け入れて感動すると同時に、こういう表象のシステムを全部一緒くたにして承認してしまっているんじゃないかという点です。表象文化の中にも、こういう国境線、特に心の中の国境線というのを、私たちは見ているはずなのに、忘れてしまっているような気がするんですね。ひょっとすると、その意味で『君の名は』はそれを明らかにしてくれるテキストとして受け止めてもいいかもしれません。

ちなみに今回の発表ではNHK岡山放送局の吉岡アナウンサー、それからNHK放送博物館の皆さん。放送番組センター放送ライブラリーの皆さん。それから財団法人松竹大谷図書館の皆さん。



ん。早稲田大学坪内博士記念の演劇博物館の皆さんにご協力をいただいて資料を収集しました。ご協力に感謝したいと思います。

【質疑応答】

(司会) ありがとうございます。司会者の特権で、何点か私から質問したいと思います。その後、会場の方からの質問、あるいはコメントを受けたいと思います。

今日のご報告では最後に触れられた通り、メロドラマにかなり強烈な価値観とか帝國的な空間が入っているということだったと思うんですが、後の時代から見れば、そのアクチュアリティが失われて、場合によってはパロディーになってしまうと思うんですね。1991年に『君の名は』のリバイバルがありました。ほとんどパロディーにしか見えず、春樹役の倉田てつをの演技が陳腐にしか見えなかったという印象があります。

例えば今のメロドラマでいうと、たぶん新海誠ぐらいが限界で、大映ドラマは確実に我々にとってはパロディーになるわけですね。そうすると、この『君の名は』もおそらく今、我々が見ると全編パロディー以外何者でもないの、やっぱり時代がずれると、だんだんさすがにごまかしきれないものが出てくるんじゃないかという気がしました。

それから2つ目の質問は、メディアミックスでのストーリーの組み方が、今と昔ではどうなのか。つまり『ツインピークス』とかもそうなんですけど、結論を作らないで視聴率とか反応を見ながら複線を付けたり作ったりして、要するに作っている本人がどこに行くか分からないというようなやり方をやるわけですね。

戦前の話ですと、おそらく宮本武蔵の組み方がたぶんそうだと思うので、最後はいろいろな複線を強引にまとめ込んで、落ちるか落ちじゃないのか分からない落とし方をしています。その点では、メディアミックスでのストーリーの組み方は、今も昔も変わらないような気がするのですが如何でしょうか。

(横濱) 最初のご質問に関して興味深いのは、大島渚が大庭秀雄監督の助監督を務めていたという点があります。松竹ニューベルヴァークは、大船撮影所の助監督たちがつくって、その後飛び出ていくわけですね。昭和37年のリバイバルのときは、大島といった若い人たちは既にリアリズムなのに、それでもメロドラマを撮ったわけです。この点は当時の新聞でも議論された論点ですが、結局松竹は、メロドラマは当たるという理由でリバイバルを押し通しました。

したがって、仰るように、今から見ると大映ドラマも違和感がありますし、『君の名は』も相当



なものということにはなると思うんですが、そのメロドラマとしての構築というのは、ある種、求められて作ったということと、1 つは意図として追いかけていたという両面があると思うんですね。

2 つめのご質問とも関連する点ですが、メディアミックスの中では、異なる制作者が介在する以上、ストーリーが違うのは不思議なことではないし、結局は、色々なことを考えながら落としどころを探っていくことになると思うんですね。ラジオドラマが終わった後で菊田がエッセーで書いたことけれども、春樹と真知子以外の筋をラジオでやると、投書が来る。春樹と真知子はどうなったんですか、続きが気になると盛んに言われてしまうのですね。ラジオ新聞でも、最後の方になると読者欄が設けられるようになって、視聴者からの投稿が相当来ていたようです。

おそらくは、メロドラマがそうやって求められてきたものでもあるだろうと思うんです。当然、松竹はそういうことを踏まえた上でメロドラマを作っているわけですから、そういう意味では、作者がどうであったかということと同時に、受け手である当時の人々が、何をここから受け取りたかったかという問題でもあります。その意味では、問題はメロドラマそのものではなく、その背後にあるごちゃごちゃしたところをどう扱っていくのかという点にあるのだと思います。

(質問) スラブ研究センターの望月と申します。大変面白いお話をありがとうございます。いろいろ勉強をさせていただいて、質問もいっぱいあるんですが、2 つに限定します。1 つは今のお話と直に関係するんですが、メロドラマというのは、おそらく作る人が作るだけではなくて、作られてくるものだと思います。戦後の状況ということも 1 つの大きな要因だったと思うんですが、他にも、大衆文化として要求されるものや、ジャンルの伝統というか、時代劇にせよ歌舞伎にせよ、何か日本的なメロドラマの必要要件みたいなものがあるのではないかと思います。例えば、今作られている連続テレビドラマみたいなものが、必然的に持ってしまうような要素ですね。作品の在り方を規定する何か構造的なものがあると思うのですが、それについては如何でしょうか。

もう 1 つはちょっと違う話なんですが、この直後の 1951 年に黒澤の『白痴』が作られ、エキゾチシズムとは違う北海道の表象手法が登場してきます。その他にも色々なバリエーションが出てくるような気がするのですが、北海道表象史として見た場合、『君の名は』はどう位置づけられるでしょうか。

(横濱) まず最初のご質問ですけれども、例えば、ライアンという研究者が物語構造の分析を行っていて、ジャンルというのはジャンル・ランドスケープ、つまりジャンル風景というのがあっ



て、つまり背景で描かれる風物が、ある一定のジャンルを構成する、その組み合わせが問題ではないか、と言っているわけですね。

また、別の研究者は、ジャンルはどう成立するのかというときに、サイクルからジャンルに移行すると言っています。つまり、ある作品が、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』であれば、そのパート 2、パート 3 と作っていくうちに『バック・トゥ・ザ・フューチャー』的なジャンルというものも生まれていく。それは特定の会社を作っているうちはサイクルで、ほかの会社が模倣して映画界全体に広まるとジャンルというような形で発展していくわけです。

これら 2 つの説を考えると、北海道映画としてのジャンルが動的に存在するという事は、まず理論的には言えると思うんですね。例えば松竹大船調というジャンルがあります。メロドラマの典型で『愛染かつら』というのが戦前の大当たりで、これも大船なんです。そうすると、そこから来る松竹現代劇の伝統というような、従来から行われている映画史の議論を参照しつつ、さらに表象のレベルで各作品を分析して行って、ジャンルが持つ共通性を見出す。そのことで伝統が捉え直されるのではないかと思います、そういった作業を行っているわけではないので、これ以上はちょっと申し上げられません。

もう 1 つの『白痴』の問いなんですが、北海道映画というジャンルがあると言ってもいいと思うんですね。私自身は、北海道に関わる映画を総合的に比較分析しているわけではないのですが、実際にやってみる意義はあると思います。

1 つだけ言うと『君の名は』でロケが当たったということで、北海道がロケ地として非常に注目されて、シベリアに行けないので代わりに北海道で撮ることが流行ります。『北海の虎』とかですね、そういったものがいっぱい撮られるようになりますから、その意味で『君の名は』は北海道の宣伝になったと言えるでしょう。

(司会) ありがとうございます。ちょうど時間も押しておりますので、今日のセミナーはこれで終了したいと思います。横濱先生、どうもありがとうございました。(拍手)



北海道大学グローバルCOEプログラム

📍 ライブ・イン・ボーダースタディーズ

内なるボーダーと外なるボーダー:なぜインドからカーストがなくなるのか

日時 2010年2月12日(金) 17:00-18:30 スラブ研究センター4階大会議室

報告者 鈴木隆泰(山口県立大)

GCOE・SRC
特別セミナー

内なるボーダーと外なるボーダー なぜ**インド**から**カースト**が なくなるのか?

参加自由

事前申込
不要

報告者 ● **鈴木 隆泰** (山口県立大学 国際文化学部 教授)

日時 ● 2010年2月12日(金) / 17:00-18:30

場所 ● **スラブ研究センター 4階 大会議室**

報告者 経歴

● 専門 ● サンスクリット文献のみならず、チベット訳・漢訳文献を用いての
《異訳対照研究》により、インドにおける大乘仏教経典の成立史・思想史の解明

- 1992年 東京大学 文学部 印度哲学専修課程 卒業
- 1996年 東京大学院 人文社会系研究科 アジア文化研究専攻
(インド文学・インド哲学・仏教学) 博士課程 退学
- 1996年 東京大学 東洋文化研究所 助手
- 2001年 博士号取得
- 2001年 山口県立大学 国際文化学部 助教授
- 2006年 同 教授 (現在に至る)



主催 ● 北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界」

お問い合わせ ● tel 011-706-3307 ● fax 011-706-4952 ● E-mail : info@borderstudies.jp ● url : http://borderstudies.jp/



(司会) 今日の講師は山口県立大学の鈴木隆泰さんです。サンスクリット文献家であり、新進気鋭の研究をされています。私が 2001 年まで教えていた山口県立大学で最後の 1 年間をご一緒させていただきまして、その際になんと面白い人だろうと思っておりました。東京大学で持つのも重い大博士論文を書かれたそうです。もともと東洋文化研究所の助手をされており、猪口孝先生や田中明彦先生ともよく廊下ですれ違っていたとのお話を聞いておりました。

ここはスラブ・ユーラシアの研究所ですから、なかなかインドを専門にする研究者の方を呼べる機会はありませんでした。しかし、幸いにも今行っているボーダースタディーズというのは地域に関わらず対象を広げることができますので、今回、鈴木さんをお呼びすることができて非常にうれしく思います。実は私も、お話を聞くのは今日が初めてです。いろいろな研究をされていると思いますが、今日は我々が境界研究では一番興味があるインドのカーストの話を、宗教や哲学の方面から教えていただきたいと思います。

実はこのセッションの直前に、今 SRC に来ているインド人の研究者と英語でカーストをめぐる活発な議論をしたばかりで、鈴木さんには連続となってしまうのですが、ちょうどいい興奮状態にあるのではないかとも思い、ご発表に期待しております。講義も非常にうまい方で、彼自身のホームページもすごく充実しています。彼自身が実は住職さんであり、説教には慣れているということですが、今日はあまりお説教くさくならない程度にアカデミックに、かつ分かりやすいお話をお願いしたいと思います。では鈴木さん、よろしくお願ひします。

(鈴木) 岩下先生ありがとうございます。ご紹介にあずかりました鈴木と申します。どうぞよろしくお願ひします。ボーダーについてのセミナーということでしたので、「内なるボーダーと外なるボーダー：なぜインドからカーストがなくなるのか」というタイトルを付けました。ここまで言い切っているのかわかりませんが、皆さんタイトルにつられていらしていただいたので正解だったのではないかとお願ひしております。

(鈴木) (地図を示して) インドはこの辺りに位置します。人口は 2007 年の時点で 11 億人といわれ、現在第一位は中国に譲っていますが、2030 年代には世界第一位になる可能性もあるといわれています。世界最大のデモクラシー大国であると本人たちは自負しています。近未来は経済大国になることは間違いありません。また文化大国でもあります。



【インドと東アジアを結ぶ絹の道】

中国は東アジア文化圏に多大な影響力を持った漢字文化圏をつくってきましたが、インドは南アジアや東南アジア文化圏に大きな影響力を持ったヒンドゥー文化圏をつくってきました。カンボジアのアンコールワットやボロブドゥールはヒンドゥー文化の影響を受けて作られたものです。のみならず、インドは中国を初めとする東アジア文化圏にも大きな影響力を持ち、日本にも影響を与えてきたのです。日本とインドの間には、多くのボーダーがありますが、地理的にはシルクロードでつながっています。『大唐西域記』でも7世紀に唐の僧侶である玄奘三蔵が天竺にお経を取りに行き、それをもとに16世紀に明の呉承恩が『西遊記』という物語を作ったわけですね。

【カースト】

ここからカーストについてお話ししていきます。実はカーストという概念ができたのは近代です。「カースト」は元来ヨーロッパの言葉、ポルトガル語からきており、インドの在来の言葉ではありませんでした。したがって、カーストが何を指すのかは研究者によって、あるいはインド人内部でも異なっており、そこでうまく話がかみ合わないことがよくあります。それを踏まえたいので、一応、今回はカーストを、「生来のきれい（浄）、汚い（不浄）」という観念に基づく上下（縦）関係があり、そのなかで経済的な相互扶助や相互依存関係によって横のつながりを形成する、縦と横に有機的に結合した排他的な社会集団」と定義したいと思います。結婚や食事や職業などに関する非常に厳格な規制があり、近代化とともに解体の方向に向かっている一面があるものの、依然として大きな影響力を持っています。

【カーストの源流】

カーストが出来上がった過程については、研究者によって諸説あります。私はあくまでインド哲学、宗教学の立場から申し上げており、それでカーストのすべてが説明できるわけではありませんが、そのうちの最も有力なものの一つが、相互に排他的ではなくお互いに補い合って、全体としてカーストというものをつくっていったという説です。

現在のカーストは諸要素の複雑な結合によって成立していますが、そのさまざまな要因を統合して一つの制度へと導いた最たるものは、ヴァルナという制度でした。ではヴァルナとは何でしょうか。

【ヴァルナ (Varuna) とは？】



紀元前の 1500 年ごろ、アーリア人たちがインドに入ってきたといわれています。もともとカスピ海沿岸に住んでいたアーリア人は、一部は西に動いてヨーロッパ人の祖先になり、一部はイランに入ってしばらく留まった後、インドに下りてきました。彼らの移動の背景には土地の砂漠化、乾燥化があり、寒冷化したために南に下っていったといわれています。インド・ヨーロッパ語族という言い方がありますように、例えばサンスクリット語やヒンディー語のようなインドの言葉とヨーロッパ語は、ルーツは同じであるわけです。このアーリア人がインドにもたらした宗教聖典を『ヴェーダ』といいます。

ヴェーダとは「知識」、特に宗教的な知識のことをいいます。リグヴェーダ、サーマヴェーダ、ヤジュルヴェーダ、アタルヴァヴェーダと 4 つのヴェーダがあります。最近良く知られていますアーユルヴェーダはアーユル（寿命）、つまり健康に関する知識という意味であり、いわゆる『ヴェーダ聖典』には入っていません。

このヴェーダ聖典のうち最も重要なものは最初のリグヴェーダです。その中に『プルシャ賛歌』（プルシャスークタ）という神話があります。これは世界の成り立ちを謳ったものです。どんな民族、文化も世界の創造神話を持っていますが、プルシャ賛歌は巨人解体による世界創造説話です。千の頭、千の目、千の足を持つ巨人プルシャの身体の各部位から、月や太陽、神々、天地、方位、動物や人類、そして四つの種姓（ヴァルナ）が生じたといわれています。ヴァルナというのはつまり四つの家柄です。

【四つの種姓（ヴァルナ）】

プルシャスークタによると、プルシャの口からバラモン（祭官）が出てきたと伝えています。そしてプルシャの腕からクシャトリヤ（王族とか戦士）の階級・家柄が生まれ、プルシャの腿からヴァイシャ（庶民）が生まれ、足からシュードラ（奴隷）が生まれたといわれています。このプルシャスークタは、それぞれの家柄の上下関係と社会の役割分担とを表現しています。

上位三つのヴァルナと最下位ヴァルナのシュードラはいろいろな意味で異なっており、様々な差別を受けました。ヴァルナ（家柄、種姓）の原意は「肌の色」です。なぜでしょうか。アーリア人はもともとコーカソイド（白色人種）ですので、インド侵入当時の肌の色（白色）がそのまま支配階級を示し、被支配階級との区別を意味していたからです。しかし、次第に混血が進むなかで、ヴァルナは本来の語義が薄れ、種姓、身分、階級を指す呼び名となったわけです。

四姓の一番下のシュードラのさらに下に「ヴァルナを持たぬ者たち」、あるいは「五番目の人々」といわれる「不可触民」、「アンタッチャブル（Untouchable）」がいます。このアンタッチャブル



は触ると穢れるから触ってはいけないという意味であり、他から差別をされる人々です。現在では「指定カースト (Scheduled caste)」と呼ばれています。時代が下るとともに、ヴァイシャはそもそも庶民だったのが商人へと上昇し、シュードラも隷民から生産に携わる人々へと上昇したため、シュードラへの差別は緩和されていきますが、かえって不可触民への差別は強まってきました。

【ジャーティ (「生まれ」「出自」)】

しかし、「ヴァルナ」というのはカーストではなく、社会の大枠を示したものです。インド亜大陸の地域社会において実際のカースト制度の基礎となる共同単位のことを「ジャーティ」と申します。ジャーティは「生まれ」、「出自」のことをいいます。このジャーティというのは地域社会の日常生活において、独自の機能を果たしている職能集団です。例えば壺作りのジャーティや洗濯屋のジャーティ、床屋のジャーティなどがあります。研究者によってはジャーティの下にサブ・ジャーティを作って分類する方もいますので数え方は多様なのですが、一番有力な説によれば、インド全体で見て 2,000 から 3,000 のジャーティがあるだろうということです。

先ほど申し上げたヴァルナとこのジャーティの間には、共通の性格があります。内婚（その間同士で結婚し、他のヴァルナやジャーティと結婚しない）や、職業と結び付いている点、浄・不浄の観念に基づいて上下の区別があるということが共通しています。ヴァルナもジャーティもどちらも最上位の者をバラモンと呼びます。不可触民のジャーティを除いて、すべてのジャーティが四ヴァルナのいずれかに所属しているとされます。

・ジャーティ内部の構造

〈結婚〉今度はジャーティの内部の構造を見ていきたいと思います。もちろん規制はジャーティごとに違いますし、地域や時代によっても異なります。これはあくまで一般的に言えば、という話になってしまいます。そこがこのインド研究やカースト研究の難しいところです。誰もなかなか広いインドの全てを見ることはできませんので、一般論か、あるいは個別のケーススタディに終始してしまうところが隔靴搔痒の感じがいたします。

ともあれ、ジャーティというのは外婚集団を内包する内婚集団です。内婚というのは同族結婚です。ジャーティの成員は、自分と同じジャーティに属する者と結婚しなくてはなりません。ほかのジャーティの人と結婚しないことを「義務」として課しています。義務のことを「ダルマ」といいます。ただ、あまり血が近い場合は認められません。ですから同じジャーティの中でもこの家柄とは結婚できないという場合があります。それが外婚という意味です。外婚集団を内側に



困んだ内婚集団というわけです。ただし、例外はありまして、上位ジャーティの男性と下位ジャーティの女性との結婚は許容されます。しかし逆は認められません。子供をしかるべき家柄の異性と結婚させることは、親の義務（ダルマ）となっています。

この内婚制は都市を中心に解体しつつあります。しかし、それでもやはりランクの隔たったジャーティ間の婚姻成立は、今なお非常に少ないです。もちろんその背景には単にジャーティが違うというだけではなく、経済的状况や教育が違うという理由もあると思います。ジャーティの違いに基づいて経済力や教育が異なるため、結局結婚に至らないという場合はあると思います。

〈食事〉次に食事についてお話します。食事は一種の儀礼であり、不浄（穢れ）から食事を守るために細心の注意が必要です。不浄なものに触れれば自分も不浄となり、自らのカーストのランクが相対的に下がってしまう。場合によっては所属カーストから追い出されてしまうかもしれない。これも、規制はジャーティごと、地域ごとに多様です。ただ、原則的な禁止事項というのがあります。それは他のジャーティと一緒に食事をしてはいけない、そして下のジャーティから飲食物を受け取ってはいけないというものです。

上位のジャーティほどタブー（禁忌）が多く、上位になればなるほど菜食です。一番上のジャーティは完全菜食です。そして少し下がってくると、今度はウシの乳とヤギの乳、乳製品は取るようになります。そのあとは四つ足以外や魚を取るようになります、さらに下になるとウシやブタを取るようになります。だんだん何でも食べるようになります。食べ物によってこのランクが分かれています。近年はまた、都市を中心に食事に関する規制は緩和されつつあります。例えばレストランに入った場合は、誰が作ったかを確認するのが難しくなっていきます。このようにだんだん緩んでいきますが、やはり農村部では依然として強く残っています。

〈職業〉次に職業についてお話します。ジャーティでは固有の職業を持ち、成員はその職業を世襲します。洗濯屋のジャーティの場合、おやじさんが洗濯屋だと、息子も洗濯屋を継ぎます。ただ、そうすると次男以下はどうするかという話になります。あとは新しい職業、例えばIT産業へ就職する場合にはどうなるのか。実は、ジャーティと職業の結び付きというのは決して固定的ではありません。現実的には同一ジャーティの成員が異なった職業に就く場合も多いです。また、農業はほとんどすべてのジャーティに開放されています。そもそも、インド共和国憲法は原則的に職業の自由を保障しています。

ただ、ジャーティ固有の職業を離れることと、ジャーティ自体を離れることとはまったく別です。いかにジャーティ固有の職業を離れたとしても、ジャーティを離れることにはなりません。彼らの出身ジャーティへの帰属意識は依然として強いです。「私はそういう意識を持っていない」



と言うインド人の方はもちろんいますが、全体としてやはり強いのは事実です。

〈自治機能〉また、ジャーティは自治機能を持っています。先ほど申し上げましたように、各ジャーティというのは「結婚」や「食事」、「職業」をはじめとする独自の慣行が掟、義務、ダルマとしてあります。そして、それに反した成員には制裁が加えられます。例えばインドの独立の父といわれる M. K. ガーンディーさん（モーハンダース・カラムチャンド・ガーンディー）は、カーストを追放されています。彼は弁護士資格を取るためにイギリスに渡りました。当時、外国に出ると穢れると信じられていたため、皆が出国を止めたのですが、彼はそれを無視して渡航したので、カーストのこの自治機能に基づいて破門されたのです。

その後彼はインドに帰ってきてどうかカーストに戻して欲しいと詫びを入れます。通常は追い出されてもきちんと贖罪をすれば戻されます。ただ、とてもひどいことをした場合には永久追放になります。永久追放された者は、他の通常のジャーティでは当然受け入れられません。家族からも見放されます。結局不可触民に落ちてしまうということになります。

ジャーティは自治機能を持った排他的な集団です。ジャーティの成員は追放されない限り、貧富の差や成功、失敗に関係なく、自らのジャーティに所属し続けます。そして生涯自らのジャーティを離れることができません。ジャーティ制度の下で個人の自由は大きく制限されてきました。ただし、ジャーティに属し職業を世襲する限り、最低限の生活は保障されます。仕事はきちんと与えてもらえるわけです。それが次の分業関係です。

・ジャーティ相互の関係

〈分業関係〉ジャーティ相互の関係についてです。旧来のインド社会というものは、排他的なジャーティ同士が経済的、社会的な相互依存関係によって結合したものとされています。これをある社会学者がジャジマーニー制と呼びました。貨幣の媒介をほとんど必要としない自給自足制の高い分業関係。つまり、そのある村落の中で役割が決まっているわけです。床屋は一軒しかなく、壺作りは一軒しかない。洗濯屋も一軒しかないのです。相互に職業を分担し合って、その村の中で完結しているわけです。

足りない部分は場合によって隣村などから調達することはありますが、基本的にお互いにギブ・アンド・テイクで、自分たちの持っている仕事を分け与え合っている。例えばインドに行ってこの部屋の掃除をしてくれと頼む。一万円払うからこの部屋を掃除してくれると言うと、日本だと一人の人がばっと掃除をするかもしれませんが、インドだと何人かがやってきます。どうしてかと言うと、机の上を拭く係と、椅子を拭く係、あとは下を掃く係など、役割が違うからです。



私たちはともすると、全部一人でやって一万円もらってしまえばいいと思ってしまいますが、違うわけです。向こうは。例えば四人来たら、四人で 2,500 円ずつ持って帰るわけです。分業しているということは一人勝ちしないということになるのです。一人がやって一人が一万円を持っていけばいいだろうという経済効率の話は、ここではまったく通用しません。ただ、こうしたシステムもインドの近代化とともに崩壊の過程にあります。

〈上下関係〉ジャーティ間には上下関係があります。バラモンが最上位で不可触民が最下位です。さまざまな慣行がバラモン目線、「上から目線」ですね、浄、不浄かによって評価され、上下関係が定まっています。当然地域差はあります。また、最上位と最下位は決まっていますが、中間ジャーティの上下関係は曖昧です。例えば床屋さんジャーティの地位が、北と南で全く異なっていたりします。さらには、中間ジャーティの職人間でもどちらが上かがきちんと決まっていななど、曖昧さは常にあります。

ジャーティは政治的、経済的、社会的な変化に対応して、相応の流動性を発揮します。だから決して固定化した、硬直化したものではありません。特にサンスクリタイゼーション（サンスクリット化）が特徴的です。サンスクリット化とは、ジャーティの全成員が一丸となって上位ジャーティの慣行を採用することにより、ランクを相対的に上昇させようとする動きです。

先ほど申し上げましたように、人は（追放は別として）自分のジャーティを離れることができません。でも、自分がもう少し良く見られたい場合には、自分の所属するジャーティのランクそのものを全体の中で上昇させていくことができます。いいですか？ 個人ではなく個人の所属するジャーティの成員全体で動くわけです。その方法は、上位ジャーティの真似をすることです。特にバラモンの真似をすることです。だからできるだけ菜食をする。酒を飲まない。再婚しない。そういう慣行の模倣によって自らの所属するカーストの地位を、全体の中で相対的に上昇させていく。それを、ある社会学者が、バラモンの使う言葉（サンスクリット語）になぞらえて「サンスクリット化」、「サンスクリタイゼーション」と呼んだわけです。

伝統社会が崩れ始めている近現代で、サンスクリット化が中位、下位ジャーティの間でかえって活発化しています。逆にカーストの縛りが強くなっているわけです。「今、社会が流動化しているのだから、この機会に自らのジャーティのランクを上げてしまおう」、「だからお前、カーストの掟をしっかりと守れ」と。近代化により、かえってカーストの縛りが厳しくなり、ジャーティの規制が強化されるというような、ある意味の逆行現象が起きているわけですね。

・伝統的なインド社会

伝統的なインド社会というのは、この分業関係、つまり横の関係と、上下関係、つまり縦の関



係とを有機的に結合したものです。そして、ある程度流動性はありましたが、全体として極めて強固です。そして、ムスリム（イスラーム教徒）やキリスト教徒もジャーティ制の枠内で生活するわけです。本来イスラームにもキリスト教にも身分差別の制度はないわけですが、インドの中ではムスリムは「ムスリム・カースト」として認知されています。キリスト教は「クリスチャン・カースト」として認知されています。といたしますのも、実際にはこのようにカースト制度に組み入れられなければ社会活動が難しいからです。

・ジャーティ制の起源

先ほど申しましたように、このジャーティ制の起源はヴァルナ制、プルシャ賛歌でした。それをさらに強固にしたのが、紀元前後 400 年ぐらいの間に出来上がった『マヌ法典』です。これは、いわば最上位のバラモンの目からみた他ジャーティやカースト認識が反映されたもので、現代のインドの法律にまで影響を及ぼしています。しかし、マヌ法典だけで今のジャーティ制が成立したわけではありません。

古代インド社会には、職業や地縁、血縁で結ばれた排他的な集団がありました。実はこれはインドに限りません。どんな社会でも、発展する以前は職業や地縁、血縁で結ばれた排他的な集団がありました。日本でもそうです、ヨーロッパでもどこでもそうです。ただ、他の社会とは異なり、インドでは排他性を維持したまま社会的役割が固定化してジャーティとして存続してしまいました。そこで強い力を持っていたのはやはりヴァルナであったのです。また、時代の経過の中で旧ジャーティが分裂しながら新しいジャーティを形成していきました。そのときにも常に、ヴァルナ制というものがお手本になっている。「上からのジャーティ化」と、前述した「下からのジャーティ化」があり、この下からのジャーティ化を促すときにヴァルナ制、つまり上からのジャーティ化を常に参照するのです。

カーストの話をする場合、ともすると上位ジャーティからの目線でのみ話をしているように思われがちですが、そうではないのです。きちんと下からの目線にも注意を払う。そうすると、下位ジャーティの彼ら自身が、上位ジャーティのヴァルナ制を参照していることが分かってきます。つまりこれは、インドの人々が自ら選んでつくってきたシステムであり、決して支配的な立場から押し付けたものとは限らないのです。

ジャーティ制というのは経済発展の一定の段階においては、生産性を高めそれを維持するのに非常に有効でした。みんながそれぞれスペシャリストであり、特殊技術を高度に発展させます。そしてジャーティを基礎とする社会というのは大きな安定性を持っています。ヒンドゥーの支配者もムスリムの支配者も、ジャーティを温存し、その上に君臨しました。植民地支配を行ったヨ



ヨーロッパ、特にイギリスも、実は同じ手法を使っていたのです。

・近現代インドにおけるジャーティ制

インドの近代化に伴い、ジャーティ制はたしかに解体の方向には向かっています。ただ、ジャーティ制を成り立たせているもの、それは社会的な要素もあります。経済的要素もあります。そして私の研究の中心分野ですが宗教的な要素ももちろんあります。それがすべての面で消失しつつあるのでは決してありません。例えば内婚制、村落生活者の所属ジャーティへの依存度は依然として高いです。

また、先ほど申し上げたサンスクリット化や選挙制度もそうです。サンスクリット化は先ほど申し上げました。インドでは自由な選挙制度が導入されています。そうすると、今まで低い立場に置かれていた不可触民でも、候補者を出せるわけですよ。実際にたくさん当選しています。そうすると、うちのジャーティはこの候補者を推そうじゃないか、応援しようじゃないかということになって、これまた、かえってジャーティ的結合が強化されていくという、皮肉な現象ですね。流動化しているからこそサンスクリット化が起きて強化される。自由な選挙制度が導入されたからかえって強化される。底なしです。現在でも村落を中心に根強い影響力を持っています。

【なぜインドからジャーティがなくなるのか】

ここから本題に入ってきます。なぜインドからジャーティはなくなるのか、というか、インド人がなぜジャーティ制をなくさないのか？という点です。なくさないんですね。1950年1月に施行されましたインド共和国憲法では、第17条で不可触民の差別はいけませんと明言しています。ただし、誤解されやすいんですけど、これはジャーティ制の撤廃を謳っているのでは決していないということです。不可触民差別はだめですよと言っているのです。つまり人間扱いされないような人たちを作るのはだめだといっているのです。ジャーティはだめですとはどこにも書いていません。つまりカースト自体がだめだとは言っていないのです。

先ほどのガンディーさんも、ジャーティは差別的な支配秩序ではなく、インド社会を成員相互の協力関係をもとに一つの有機的統合体たらしめている原理である、というふうに考えており、ジャーティ制には基本的に賛成しています。不可触民の差別撤廃を訴えたアンベードカルという方がいますが、ジャーティおよびカーストに関しては、その方とガンディーさんは意見が合わず、仲違いをしてしまいました。

・ジャーティ制を支えた思想

では、このジャーティ制を支えた思想とは何か。私自身の研究はこちらの方からのアプローチ



が主になります。

〈浄・不浄思想〉 浄、不浄の考え方。つまり各ジャーティが持っているきれいさ、もしくは汚さというのは集団的なものです。誰か一人が汚れているわけではない。そのジャーティ全体がある程度の浄性とある程度の不浄性を持っている。完全な浄性を持っているのが一番上だし、不浄性ばかりだと一番下。それ以外の者はある程度の浄性と不浄性、そのジャーティ特有の浄性、不浄性を持っている。集団的に持っている。一様に生涯にわたって持つというものです。そしていずれのジャーティも相応の浄性を保つ必要がある。つまり、自らのジャーティを相応以上の不浄から守ってジャーティのランキングを維持し、場合によってはランキングを上げていくために、成員は各ジャーティが成員に課すさまざまな義務、ダルマを守っていくのです。そうして宗教的・儀礼的に定められた上下の秩序が、社会的・経済的な分業関係を支え、維持してきたわけです。

〈業・輪廻思想〉 あとはもう一つ、業や輪廻についてです。こうした言葉を聞いたことのある方は多いと思います。輪廻思想って何でしょう。すべての生きとし生けるものが無限の生死（しょうじ。生まれることと死ぬこと）の繰り返しの中にあるという思想ですね。生死輪廻（しょうじりんね）や輪廻転生（りんねてんしょう）と呼ばれます。例えばインドのバイブルといわれる『バガヴァッド・ギーター』には、「生まれた者には死は必定（ひつじょう）であり、死せる者には再生（さいしょう）が必定である」と、生死の無限のサイクルがあることが説かれています。こうした考えは、仏教を介して世界各地に伝わったため、日本人にも多少はなじみ深いでしょう。しかし、日本人は輪廻というのは半分ぐらいしか信じていないと思います。もし輪廻を本当に信じていたらお盆の行事はできません。お盆では毎年霊魂が帰ってくることになっています。日本人の最も古層にあるものは、柳田國男が言っているような「すぐ傍にある他界」だと思います。その上に知識として輪廻が入ってきたわけですが、心情としてはやはり霊・先祖は傍にあり、そして年に一回帰ってくるんですね。

〈輪廻思想の淵源〉 輪廻思想の淵源には二つあります。一つは、宇宙の最高存在の探求、そしてもう一つは、ウパニシャッド（等置）です。

宇宙の最高存在の探求。実は『ヴェーダ聖典』の神々は完全に強いわけではありません。（ヴィシュヌやシヴァという神々は非常に強いのですが、彼らが出てくるのはかなり後です。）ヴェーダの神々はバラモンに祭ってもらわないと力が出ず、弱くなってしまいます。つまりヴェーダの神々というのは、祭式をしてもらいたいがためにバラモンに従属するという関係になっているわけです。そうであれば、バラモンが祭式で唱えている言葉が世界最高であり最強だろうと考えられました。でも、バラモンの言葉が持つ、神々をも従わせる最高・最強の力とは何だろうか。そ



れは「ブラフマン (梵)」です。バラモンの言葉に秘められた、神々をも従わせるこのブラフマンこそが宇宙の最高存在、宇宙の本体、宇宙の中心・根源だというふうには考えられたわけです。

一方、ウパニシャッドとは何でしょうか。ウパニシャッドというとウパニシャッド哲学と思われそうですが、もともとの意味は等置です。異なった事物や事象をアイデンティファイすることです。同じものだと考えることです。例を挙げます。自然界にあるものと人体に関係するもの。太陽。太陽が昇ると明るくなってものが見えるようになります。目を開くと、ものが見えるようになります。ということは、太陽の働きと目、これは等置できるのだ。風が吹くと空気が動く。呼吸をすると空気が動く。じゃあ、風と呼吸というものを等置しましょう。水。これが生き物を育てる。精液、これが生き物が育つもとになる。等置しましょう。季節の移り変わり。人の生き死に。等置しましょう。生死も繰り返される。季節が永遠に繰り返されるように、生きものの生死も永遠に繰り返されるのだとインドの人たちは考えたのです。これが輪廻転生 (サンサーラ) というふうには呼びならわされています。

〈ブラフマンとアートマン〉一方、ブラフマンと自己の本体というものも等置されています。ブラフマンは宇宙の本体。ということは自己にも本体があり、それも本来は同じもののはずだろう。つまり、全宇宙がマクロコスモスであれば、人体は小さな宇宙、ミクロコスモスである。それは等置できるのだと。等置された自己の本体のことをアートマン (我) と呼びました。いわゆる靈魂、魂みたいなものです。これを「梵」と「我」が一緒に、まったく同一だということで「梵我一如」というふうには呼んだのです。

「ブラフマンとアートマンが同じだったら、何で生き物は輪廻するのだろうか?」。当然出てくる疑問だと思います。それは「カルマ」があるからです。

〈業 (*Karman*)〉よくカルマ、カルマと呼びならわされていますけれども、原語のサンスクリット表現はカルマンです。「業」。行為および行為が残す影響力です。もともとは「行為」の意味です。例えば誰かに向かって私が、「お前なんかばかやろう」と言ったとしますね。そうすると、その言った言葉というのはそれにとどまりません。言われた相手の中にとっても嫌な気持ちを残してしまいますね。行為というものは、その行為だけではとどまらず、その後には何か影響を残す。そのことを含めて業、カルマンと呼んだのです。そして「この業のせいでアートマンはブラフマンに帰ることができず、その結果生きとし生けるものは輪廻し続けているのだ。人が古い衣服を捨てて新しい衣服を身に着けるように、アートマンは古い体を捨てて別の新しい体に赴くのだ」。これも『バガヴァッド・ギーター』に出てくる言葉です。

〈六道輪廻〉輪廻説には発達したものもまだ発達していないものなど諸説ありますが、一番ポピ



ユラーなのが六つの段階に分かれている「六道輪廻」という考え方です。これはチベットに伝わる輪廻図です。下から順に地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天界と六つのランクになっているのです。そして、六道それぞれの中にまたランクがあると考えられています。例えば地獄の場合には最上位は等活地獄で、最下位には阿鼻地獄（無間地獄）があります。無間のゲンは「限」ではなく「間」という字です。間断なく苦しみが来るといわれています。また天界では、最上が有頂天で、最下位が六欲天です。当然人間にもまたランクがある。最上位をバラモン、最下位を不可触民とするヴァルナ、ジャーティ制は、この輪廻転生の考えによって支えられているわけです。

さて、この業、輪廻思想は宿命論なのか、という問題について考えたいと思います。過去世の業が現世の在り方を決めます。過去世の業はもはや変えられません。ということは現世の在り方も変えられません。つまり現状を甘受せねばならない。そういう意味で、この業、輪廻思想には宿命論的な様相が多分に見えます。しかし、現世の業が来世の在り方を決めます。つまり努力次第で現世の業は変えられる。だからこそ来世の在り方も変えられる。よりよい未来は自らつくり出せる。その意味では宿命論ではないということが言えると思います。

【『マハーバーラタ』にみるインド人の解脱観】

〈人生の四大目標〉 古来、インド人は人生の四大目標を掲げてきました。義務を果たすこと。これはカースト、ジャーティの義務です。そして、働いて儲けること。そして、楽しんで子孫を残すこと。この三つはいずれもジャーティの存続に資するものです。しかし未来世のいつかは、永遠に続くかと思われた輪廻のサイクルを脱して解脱（モークシャ）したい。これは、輪廻からの離脱、アートマンのブラフマンへの回帰ということです。

〈マハーバーラタ〉では、解脱というものに関して、インド人はどう考えてきたのか。今、例として『マハーバーラタ』を出してみたいと思います。『ラーマーヤナ』と並ぶインド二大叙事詩の一つです。古代ギリシャのホメーロスの詩が二つある、それを合わせたものの8倍の分量になります。世界最大の古典文学です。

内容は、バラタ族という伝説のインド人の祖先の部族がありまして、その親族間の領土獲得にまつわる大戦争の物語、それが中核になっております。そこにさまざまな話が付け加えられて、膨大な全18巻の叢書になりました。この6巻に、『バガヴァッド・ギーター』が挿入されています。バガヴァッド・ギーター、神の歌。インドのバイブルと呼ばれています。このバガヴァッド・ギーターは、ギーター（歌）と略称されることがあります。つまりインドで単に「歌」といった場合はバガヴァッド・ギーターを指すぐらい有名だということです。



『ギーター』の舞台) バガヴァッド・ギーターの舞台というのは、クル平原、現在のデリーの北方にあります。そこで、バラタ族同士が戦火を交えようとする。バラタ族という同じ部族が、カウラヴァとパーンダヴァの二つのグループに分かれてしまっています。それが、いざ戦火を交えようとするまさにそのときが、『バガヴァッド・ギーター』の舞台です。このパーンダヴァ軍の将軍の一人であり、主人公でもあるアルジュナは親族同士の争いを厭い、戦闘に入ることを躊躇します。嘆いています。「ああ、私たちは何という大罪を起こそうとしているのか、王権の快樂をむさぼり求めて親族を殺そうと企てるとは」。第1章の第45番目の歌です。

それに対して、御者であるクリシュナが、怯むアルジュナを諭します。先ほどご紹介した一文は実はこの部分に該当します。「人が古い衣服を捨てて、新しい衣服を身に着けるように、アーツマンは古い体を捨てて別の新しい体に赴くのだ。生まれた者には死は必定であり、死んだものには生が必定である。だから、避けられない事柄について、君が嘆く必要などないのだ」と。

実はクリシュナは、最高神のヴィシュヌの化身です。これはヴェーダの神々とは全く異なり、超越的でオールマイティーで、カースト制度を含めて世界を全て作ってしまった神様です。ちなみに化身の原語はアヴァターラ (*avatāra*) です。これが英語に取り入れられてアバター (アヴァター *avatar*) という単語になりました。

〈スヴァダルマを実行しさえすればよい〉クリシュナのインストラクションは続きます。「自らの義務を考慮して、おののくべきではない。クシャトリアに生まれた者にとって、義務に基づく戦いほど崇高なものはないのだから」。そして次が最も好まれた歌です。第2章の47番目の歌。あなたの権限の及ぶ範囲、これを「アディカーラ」と言いますが、責任を取るべき対象は行為であって決して結果ではないと説得するわけです。つまり、「スヴァダルマ (*svadharma*) を実行しさえすればよい。自らに課せられた義務を実行すればよいのであって、その結果に対する責任を負う必要はまったくない。結果責任は、その義務を負わせた側 (神) が引き受ける。すなわち神によって生来の義務、スヴァダルマを課せられた者は、正否にとらわれずひたすらその義務を実行しさえすればよい。義務を実行した者の幸せは、義務を課した神が保障する」。

これは結果至上主義の対局になっています。ガン告知の問題に当てはめて少し考えてみたいと思います。日本ではガン告知は非常に難しいらしいです。私は専門家ではないのですが、私の大学には看護学科がありまして、そこの先生方がそういうことをおっしゃっていました。キリスト教圏では (ガン告知が日本に比べ) それほど難しくないのでどうしてかという話を色々していたところ、もちろん様々な要因がありますが、一つには、キリスト教圏の場合にはやはり神の観念があるんですね。キリスト教の考え方に従えば、癌になったのは神の意思なのです。つまり、ガ



ンになったらガンと闘えばいいのです。神は、ガンと闘うことを欲したから、その人をガンにしたわけです。ガンと闘って、それでガンが治ろうが治るまいが、ある意味ではどうでもいい。ガンと闘えばその人は、神より下された命令を果たしたことになるので、たとえ死んだとしても天国に行けるわけです。日本だと、ガンで死んじゃうと、ガンに負けちゃったと。ガンを治せば、ガンに打ち勝ったと言いますが、勝ち負けじゃないんですね。闘うこと自体が大事。結果主義じゃない。それを支えているのが、絶対的な神からの命令だという発想です。

良い悪いという話をしているのではありません。ただ、私たちが持っている、「カーストは差別だ」というものの見方だけでは理解できないのではないかと、ということを提示したいんです。世の中にはさまざまな物の見方があるということです。

〈クリシュナの教誡〉クリシュナの教誡が続きます。ひたすら行為を実行すれば、私のもとに来ることができるよ、と言っています。

行為の結果は私に任せ、ひたすら行為を実行せよ。そうすると、(蓮のように) 泥の中に生まれて、泥水に染まらずに咲かせる。そのように罪悪に侵されることなく、私のもとに来るのだと言います。「私に到達し、最高の成就を達成した偉大な者たちが、苦の巣窟である輪廻を繰り返すことはもはやない。天涯に至るまで生きとし生けるものは、六道を輪廻転生する。しかし、アルジュナよ、私に到達すれば、もはや再生することはないのだ。」

「私は、すべての生き物に対して平等である。私には憎むものもなければお気に入りもない。信愛（バクティ）をもって、すべてに私に託せば、すべての生き物が私の内にあり、私もまたそのものたちの内にある」。道理としては、最高神、クリシュナあるいはヴィシュヌとの一体化は、バクティによって到達されるということです。ここでいう「バクティ」とは、乳飲み子が無条件に母親にすべてを委ね全幅の信頼と愛情を置くように、最高神にすべてを委ねることです。

そしてクリシュナはアルジュナに、自らの本体、ヴィシュヌ神を顕します。クリシュナの教誡、「ひたすら私を信愛せよ、バクティせよ。そしてスヴァダルマを果たせ。そうすれば、私は生死、輪廻大海から必ずお前を救済してあげよう」。これがインドのバイブル、『ギーター』です。

「自らが属するジャーティの義務、スヴァダルマを、正否を問うことなく果たし、結果を最高神に委ね、最高神を信愛することで、万事うまくいく」。難しい教義も大掛かりな儀式も不要です。自らの日常の務めを果たすことが、そのまま最高の宗教修行の実践なのです。そして未来の幸福を見いだす源泉となっている。

この論理がジャーティ制を宗教的な意味で支え続けています。与えられた義務、生来の義務を果たす。果たしていくことがよいことなのだと、神から保障されているわけです。神



を信じていけば、いつかは解脱もできるし、少なくとも来世は今よりもよいジャーティになれる。

さまざまな要因はありますが、そのような考え方がインドの人たちを支え、たとえ低いジャーティに生まれても、そう悲観することはない。また高いジャーティに生まれても、驕ってはならない（というのも、あまり高く生まれて権力者だからといって変なことをしていると、次の世で低い者に生まれてしまいますから）。いわば倫理的な規範を提供してくれるということです。

(鈴木) 以上でございます。ご静聴、ありがとうございました。(拍手)

(司会) 何と申しますか、圧倒されて、ただただ感無量でございますけれども、最後のところは本業が分かりませんが、本業に近いようなところもありました。おそらくご専門の近い方々もたくさんおられると思いますので、その後半のメインのお話に踏み込む前に、ちょっと素人ながら前半の我々でも質問できるようなところを、司会者の特権として二つぐらい聞きたいと思います。

一つ目は、イスラームのことを考えると何となく乖離ができそうなんですが、パキスタンに行くと、明らかにジャーティが残っていますね。彼らはたくさん分業していて、ご飯だけ作る人とか、掃除だけする人とか、洗濯だけする人などに分かれています。それから見るとムスリムなのに、何でこういうのが残っているんだろうというのがずっと疑問でした。今日の話を知ると、ムスリムそのものがもとの広いインドでジャーティであったとすると、そこから抜け出したのがパキスタンですから、それが残るとするのは社会生活的な影響であるというふうに考えるのか。

しかし、そうは言っても宗教のもとが違うわけですから、そういったものは本来のムスリムであれば超えていく話になるはずなので、そのところはどちらが強いのかというのをどう理解したらいいのかという、もう一歩抜けた場合のお話を、パキスタンの考えを教えてください。

もう一つ、サンスクリット化が中下位へのジャーティが多いという話は非常に興味深くて、北大で中島岳志さんというヒンドゥー・ナショナリズムのことをやっておられる方がいるんですが、その方の研究にも関連して、サンスクリット化が多いということが、最近ヒンドゥー・ナショナリズムやヒンドゥー原理主義が強いということと関係があるのか、それについて教えてください。

(鈴木) ありがとうございます。まず一つ目のご質問ですけれども、インドが 1947 年に分離独立しましたので、イスラームとヒンドゥー教は全然違うものだと思われがちですが、実際にはあそこはまさに線引きに使われた部分が強いといえます。ムスリムなのか、ヒンドゥー教徒なの



かという部分は単に線引きのために使われただけで、実はインドのムスリムは非常にインド的な影響を受けており、そのために一時はいわゆるイスラーム正統派といわれる人たちからは、「インドのムスリムは異端だ」と言われたことがあったぐらいです。非常にインド的な、例えば神の内在性を説いたり、というのがインドのムスリムの大きな特徴です。長きにわたってイスラームというものはインドの人たちが奉じていたわけで、インドにおいてイスラームは、もはや外来の宗教ではなくなっていたのです。それが破綻して別れたのは、色々原因はあるものの、やはりイギリスの植民地政策で内圧を上げていったことが一番の要因でしょう。

つまり、元に戻りますと、イスラームの本来のものからすれば、あんなジャーティなどは関係ないのであって、パキスタンで分離独立したのだから全部廃止してしまえばいいのにとお思いますけど、それがもともとインドのムスリムたちが建設した国であるために、そうした慣習が残っているのだろうと、ここではお答えしておきたいとお思います。

あと二点目ですが、ご質問の内容がちょっとよく分からなかったのですが...

(司会) 中下位のジャーティがサンスクリット化で上に上がっていきこうという、社会運動のような感じになっている。そういうことが起こると、国としてはヒンドゥー・ナショナリズムが盛んになることと関係があるのかと。

(鈴木) ちょっと分かりません。関係するという理屈がちょっと見えないので。ヒンドゥー・ナショナリズム、ヒンドゥーが中心だという考え方と、サンスクリタイゼーションというのが一致しますか？ 私の考えでは一致するところが見えないんですけども、社会学を専攻してないので分からないだけかもしれないので、もしご存じの方があればお教えいただければとお思います。申し訳ありません。

(司会) 今日結構たくさんの方が来られていますので、どうぞ、せっかくの機会ですので、鈴木さんのご専門に近いところを含めて、この際ですから何でも質問をしていただければとお思います。一応、報告書を作る関係で記録を取っていますので、マイクでしゃべっていただけますか。どうぞ。

(質問) ちょっと最初の方、遅れてきてしまったので、もしかしたら既にお話があったかもしれないんですけども、私自身の偏見だと言われたらそれまでかもしれないですけど、やはりカ



ーカスト制はそれでもとにかく差別だと思うんですね。というのは、おのおのの職分が決まっていることで、それはある意味で近代的に考えると、例えば社会保障的な要素を、全員が何らかの就職が保障されているという点で、ハローワークに行っても俺の仕事が見つからないなど言っている日本よりは、別の意味で社会保障が足り得ているとは思いますが。

前に読んだ、学陽書房で『豊かなアジア、貧しい日本』という本なんかであったのですが、つまりアマルティア・センという経済学者が言うところの潜在能力アプローチ。つまり潜在能力の機会が保障されていないこと、経済的な従属関係が貧富の温室であるという考えに立つのなら、ある意味で社会保障という側面があること自体は、たぶん論破できないとしても、今、言った潜在能力を保障しているかという基準で考えた場合に、たぶんそうではないと。

そうだったら、やはりその基準である限り差別だと。もちろん基準が正しいのかという、メタ基準がどこにあるんだと言われればそうだと思うのですが、逆にそうすると先ほど言われたガンディーが外国にいたら汚れたと見なされる状態が、その差別を自認してしまっているように私には思えるんですね。もしそれが素晴らしいのだったら、何でインドの考えがすべてを征服して、英語なり、サンスクリット語なりが普遍言語になってないのかという、何でイギリスごとき島国に植民地化されてしまったのかということとの整合性が、私から見ると全然見つからないと。

そうすると、ただ、僕は共同体的なところを、自分自身は戻したいと思っているんです。というのは、ある意味、お金だけで結び付くのは感情的なものじゃなくて、いろいろな意味で人間にとって負荷が多すぎると。そうすると、物々交換がもっとあっていいと思うし、ですから先ほど申したように社会保障的な制度の意味合いはあるということにして、たぶんできないと。

ただ、それが、つまり潜在能力の成長をどれだけ保障しているかとか、そもそもインド人自身の考えの中で海外に出たら汚れると言っているということは、それは偏狭なナショナリズムと、日本もかつては神の国とか言っていたからお互いさまかもしれないけど、どっちもどっちもの偏狭な心のありよう、心性に思えるんですけれども。

(鈴木) ありがとうございます。大前提として、私はカースト制、ジャーティ制が差別でないとは一言も申し上げておりません。私が言いたいのは、うちの学生にも教えているんですけど、今、自分が持っている尺度だけで相手を測ってはいけないよということなのです。それが国際文化という学問、インターカルチュラルスタディーズという学問の方法論の基本です。今日の場合には、逆にカーストが持っている差別以外の意味、インドの中で有機的に果たしてきた意味というものに、若干力点を意図的に置いたんですけれども。ですから、私がカーストを差別ではな



いかのように考えていると思われたかもしれませんが、そんなことはありません。本当の国際理解というのは、相手の言うことをご無理ごもつともと言って引くことでもなし、逆に全部突っばねる、自分の物差しで相手を切ることでもありません。

相手のことをきちんと理解して、ここまではこういう意味で理解できるけど、ここは受け入れられない。逆にこちらのことを相手にもできるだけ分かってもらって、できる範囲のことだけ受け入れてもらう。その交渉をしていく準備のための知識をつくるのが、国際文化学という学問だと思っております。

ですので、私の考え方としても、当然、カーストには差別の発想があります。人が生まれによってきれいか汚いかという発想は、そもそも差別でありますのでね。だからそういう意味で、理解をするにはするけど受容はできません。

(質問) ただ、つまりおっしゃることは分かるんですけど、私もある意味そうかなと納得してしまったというか、分かれていて何らかの形で仕事がある状態が社会保障という側面もあるなど、産業革命以降というか、要するにいわゆる先進国と呼ばれる視点から見ても、それはたぶん論破できないと先ほど申したように、それは認めている。

ただ、今おっしゃった話で、こちらだから正しいとか、俺の文化だから正しいとか、あいつの文化だから間違っているとかじゃないとは思んですけど、そうすると差別かどうかというのは、基準の基準の基準というふうに、要するにメタ次元でいかないで済む発想をするのであれば、先ほど言ったアマルティア・センの潜在能力アプローチとかのように、選択が実質上あるかというふうにすれば、つまり、この基準は別に日本人が偉いと言っているわけでもないし、日本の中でも、ある意味ではインドより遅れている点もあるとは思うけど、こういう点ではおかしいと思う。それは別にどこどこ国だからという国籍によらず、こういう普遍的な概念を希求するものであるからというあれであれば、それをいえば、逆にその基準で見た場合、日本人はインドに比べてこの点で遅れているじゃないかというふうに言われるリスクも、自ら負う論法なわけですから、けんかにはなるかもしれないけれども、対立は生むかもしれないけど、一貫性はある基準なんじゃないかなと思うんですけど、どうですかね。

(鈴木) ちょっと分かりにくかったんですけど、私、そもそも世の中に普遍的な概念があるのかどうかは疑問だと思います。普遍的な概念があるのに、何で分からないんだというところからけんかが始まるような気がしてならないんですね。



(質問) あるかどうかというか、究極的にあるかどうかって、さっき言った基準の基準の基準とかって、どんどん無限に対抗しちゃうから、それは本当にあるかというのも僕も自信があって言っているわけじゃないんです。ただ、その潜在能力をどれだけ保障する社会制度であるかという点があればというのが、僕自身には心に響いたというだけで、もちろんそれは別に普遍的じゃないんじゃないのと言われてたら、そうかもしれないんですけど。

普遍性を希求していく動き、ありよう、その基準を受け入れたら、自分自身も裁かれるかもしれないというリスクを負いながら、でも普遍性ってあるのだろうかという立論をしていくと、もしかしたらそれはとんでもないものを見落としていて、あ、これでいけるかなと思ったら全然いけないかもしれないけど、それを積み上げようという営みを。だから逆にそれをやらないと、じゃあ、逆にジャーティ、差別じゃないじゃんというところまで行き着く流れに、僕は乗っちゃいそうな気がするんですけど。

(鈴木) 質問者の方のスタンプポイントが分からないのですが、哲学的にこれをアプローチしようとしているのであれば、それはあり得ると思います。しかし、これを国際文化的なアプローチ、つまり「理念のみ」ではなく、向こうに「現実の人」がいるという立場に立ってやろうとする場合には、若干、自分中心で尊大なイメージを感じるんですね。つまり概念操作だけでカーस्टの問題を考えて、そこで無限遡及に陥らない範囲の中で普遍性を見いだしていこうという、哲学的、論理的なアプローチをされるのであれば、賛同はいたしますけれども、そうではなくてインド人に対して、インドの文化に対して、そのようなアプローチを日本人の立場からするというのは、私はややルール違反ではないのかなと感じざるを得ません。

(質問) いや、こういうふうな基準でやってみたらどうだともしいうと、じゃあ、その基準で日本人を裁いてやると、インド人がこっちを裁くこともあるなというリスクを背負って、うわあ、やばい、こんな基準を言うんじゃないかと思うようなリスクも背負った上で、でももしかしたらこれって普遍的なんじゃないかな、いや、そうかな、違うかなと積み上げていくという。

(司会) 哲学的な論争、メタレベルでいくと、どこまでもいってしまうので、今日は鈴木さんのご報告は、どうしてインド人がそういうふうを考えるのか。それをまず我々は知ろうということなので、その議論はまた別の機会にやっていただければと。ある意味では非常に重要な論点だ



とは思いますが。

(司会) ほかにインドの理解、考え方について、どなたでも。

(質問) インドには当然、科学者がいるわけですがけれども、科学者たちとか、そういう物理学者とか、そういう人たちはカーストというものをどのように認識しているのかというのを、ちょっとお教えいただければ。

(鈴木) 当然、個人差はありますが、つまり、宗教的な事実と科学的な事実は同じである必要はまったくないわけですね。分かりやすい例では、キリスト教をバックにしている西洋の科学者の多くが、宇宙をつくり出したのは神だと言っておりますし、インドの中にも、もちろん無神教という人も宗教ですね。神がいるもいないも、どちらを信じるかというのは一つの宗教ですから、その中で肯定的に取られる人もいますし、そうでない人もいるというだけの話だと思います。

(質問) 大変、興味深いお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。私もインドに何回か行って、カーストの実情みたいなものを非常に感じたんですが、以前からちょっと疑問に思っていた単純なことなわけですが、先ほど先生もちょっとと言及されましたが、ガンディーは不可触賤民のことをハリジャンと言われましたが、カーストそのものに関しては反対されてなかったと。

これ、それを反対すること自体が、インドの現状を見ると非常に難しいだろうなと。むしろそれがあることによってインドというのは一つにまとまっているのかなという、漠然とした思いが一つあるのですが、なぜガンディーはそこまで踏み出さなかったのか。あるいは、カーストに関してどういう考え方を持っておられたのか。

それとアンベードカルのごときは、種姓平等を脱却して仏教徒になると、カーストから逃れられると。その桎梏から逃れようとしたアンベードカルが気付いてしまうと、あたかもヒンドゥーの神の一つのごとく、彼らの祭壇を見ると、アンベードカルが中心にあって、仏様がそばにあるみたいな、最終的にはヒンドゥーの神様のようになっていますよね。そういうところはアンベードカル自身はどう考えていたのかなというのが、長いこと疑問だったのですが、お答えよろしく願います。



(鈴木) ありがとうございます。最初に後の方の質問、アンベードカルの方からまいります。まずアンベードカルの運動は大きな失敗だったと思うんですね。マハールカーストの者が全体で集団改宗をいたしました。でも、全体が動いたことによって、単にマハールカーストが仏教カーストという名前が変わっただけにすぎなかったのです。インドにおいてカーストから逃れようとするときには、一つはインドからいなくなっちゃう、インド文化圏の範囲外に行く。あとは出家する、あとは死ぬ。基本的にこの三つしか方法はありません。

社会生活をしていながらカーストから逃れようということは、基本的には無理な社会なんですね、インドは。その中でやってしまっただけで、アンベードカル自身も仏教を自己流に解釈して、非常にアンベードカル的な仏教を創り出した。だから彼自身が最終的に望んでいたかどうかは別として、彼自身が教祖というか、神に祭り上げられていく要素というのは、彼自身が最初につくっちゃっていますし、インド人そのものからかなり批判されるものですし、仏教徒からもかなりの部分は、アンベードカルの宗教は大いに批判されている部分だと思います。

あとガンディーの方ですけれども、不可触民を神の子、今はその呼び方は使われなくなっておりましたが、当時はハリジャンと呼んでいました。彼自身は「サナータニーヒンドゥー」、永遠のヒンドゥー教徒であると。どちらかという、カーストの持っている分業体制というものをガンディーさんが評価して、その背景には、それを軸にしてインドというものがちゃんと自立できるんだ、独立を勝ち取ろうという意図がたぶんあったんだと思います。

ただ、インドが持っている力というものを分業制に見だして、そしてイギリスを追い出した。ただ、その中でも人間扱いされない不可触民の差別はやめましょう。そこがやっぱりインド人としての彼の立ち位置だったし、私から言えば、個人的な意見ですけど、ある意味では限界だったのかなという気がしております。お答えになりましたでしょうか。

(司会) 順位評価に関して、なかなか難しいところで、さっきインド人と真っ向から違うとかいう議論をして、いろいろあるようですが、ほかにありませんか。何か関心のありそうな方が多そうなんですけど。いいですか。私からちょっと一つ聞きたいんですが、私がインドにいたときに何がショックを受けたかという、普通の社会というか、空間の構成法というのは物理的な境があるんですね。ここは豊かな人です、ここはスラムであると、ここは治安が悪い場所だという感じなんですけど、デリーはともかく、コルカタとかがそうなんだと思うんですが、ほとんどどこの空間がそういう空間なのか分からないわけですね。



五つ星ホテルを出た瞬間に乞食がばーっと並んでいるみたいところがあって、いわゆる一般的な空間構成法とまったく違う世界なんです。それはたしかに洗濯をする人が決まっていれば、五つ星を裏返すと洗濯をする人がいるから、そうなるんだろうと説明できるんですが、鈴木さんの最後のボーダーなんかは、心にあるというのは、まさしくある意味でヒンドゥー的でないんですよ。

だけど、要するに我々は乞食が見えるんだけど、たぶんインド人には見えないんだと思うんですね。だからそこにボーダーがあるんだと思うんですね。私は何でインドにこの10年ぐらい興味を持っているかという、まったく我々と違う空間構成法であると考えますね。それってやはり、今日の話でいうと、カーstens的なものがそうしている。これはインドにしかない世界だと考えてよろしいですか。

(鈴木) インドにしかないかどうかというのは、私も全世界を知りませんので断言はできませんが、まさしく岩下さんがおっしゃったような、カーstensとか、ジャーティながらの空間構成があると思うんです。そもそもインドも村落が中心でして、村落では一番いい場所に一番高い人が住むわけです。だんだん周辺部に低い人が住んでいくのですが、明確な線引きは常にはないです。

でも、この人のうちはこの辺だからこうだというのが、暗黙の了解のうちに全部成立しているんですね。住んでいる場所によって分かっちゃう。だから大都市が発達して、そこに人口が集中してきますけれども、その方法というんでしょうか、明確に線を引いたりしないだけけれども、心の中できちんと線を引いていて、見るものは見るし、見ないものは見ないようになっちゃうのが、自然と形成されていったんじゃないかなと考えます。

(司会) ありがとうございます。ついでにもう一つ聞きます。インドの方でいろいろ国際的に付き合っていると、すごい女性が強いじゃないですか。すごく進出している。ただ、何も知らない違う目で見ると、インドというのはなんと女性が解放されていて、すごく先進的だと思うのですが、私はまったくそうではないんだろうと思うんですね。

ある種のカーstensの人は、さっきも言ったように自分たちは何をしてはいけない、何をしてはいけないと、全部向こうの人たちはしますから、要するに彼ら勉強をするしかないわけですよね。そうすると、そこに知識が集約されますから、そしてそういう職業で出ていくから、女性が日本なんかと比べるとものすごく進出している強い世界に見えるのですが、それはやっぱり我々の文明に置き換えて、女性が解放されていますねなんて思ったら間違いですよね。



(鈴木) 文化が違いますからね。あるところとないところというのはとても極端でして、私は文化の形と、その国が持っている山の形は似ているんじゃないかなと思います。日本の山、富士山を代表とする、こういうなだらかな感じですよ。一方、ヒマラヤというのは、がーん、がーんと高い山がある。あるところとないところの差がとても大きい。ですから仕事に置き換えれば、できる仕事はちょっとだけあるけど、あとはできないこと。

日本はもっとなだらかにいろいろある。そういうなだらかな中で上に上っていくのと、自分にもともとそこだけあるというものを使っていくのは、もともとたぶん文脈が違っている。そういうものを、例えば一つで概念で囲いつくそうとすると、やはり無理があるんだと思います。

だから普遍的な概念はひょっとしてないのかなといつも考えながら、何とかそれを説明しきれぬ新たな概念があればいいなと思うけれども、常にそれはまた乗り越えられていくものだし、でも常に自分の立場というものは絶対的ではないと考えて行動していくのが、大事かなと思っています。

(司会) 答えなのですが、もう少しはっきり言っていただけませんか。いわゆる知識層で活躍しているのは、やたらとケーララ州が多いと。それ以外はカーストの高い方が、特に女性は多いとあって、何か経験則のものですか、そうなのでしょうか。

(鈴木) どうなのでしょう。よく分かりません。

(質問) 私はブータンという南アジアの仏教国の研究をしているのですが、そこでやはり先ほど先生がおっしゃった輪廻の思想が非常に深く根付いていまして、やはり日常生活の中で常に来世のことを考えながら生きているところが、非常に明確に表れていると思うのですが。

その際に彼らの中では、もちろん仏教徒として生まれ変わるということはまったく疑いがないわけですね。でも、インドを見るときに、ヒンドゥー社会を見るときには、やはり彼らの中でも転生した際にヒンドゥー教徒として生まれ変わることが自明だと考えられているのか、あるいは別の形で、もう少し仏教なり、キリスト教なりを包摂した形で、そうした世界に生まれ変わると考えているのか、ちょっとお聞かせいただきたいと。

(鈴木) まずヒンドゥー教というものが仏教やキリスト教とは違っていて、インド文化そのものという面もありますので、そういう立場からお答えします。そもそもヒンドゥー教、ヒンドゥー



一文化の中に転生の発想が出てきているわけですから、当然、行き着く先も、来世もその枠内だと思います。

その枠内を越えたら、そもそもあり得ないと思うのですね。その中でできてきた発想ですので。たとえば、神様があるかないかというのは、キリスト教の人たちにとっては大きな問題ですけど、そうじゃない人たちにとってはどうでもいい話なんですね。輪廻のこともヒンドゥー教徒にとっては大事ですけど、そうでない人たちにとってはどうでもいい話なんです。

ですから、彼らにとっても彼らの世界は結局そこですから、その中に集約される。そして仏教だったり、イスラーム教やキリスト教も含めて、ある意味ではインドというのは全部のみ込んでやって、ヒンドゥー文化にしちゃっています。ブッダだってヴィシュヌの9番目の化身、アヴァターラになっていますから。そういう意味では全部がヒンドゥーで、ヒンドゥーの中で動いていると考えます。

最終目標は解脱ですけど、それより前に彼らは神様になりたいんですね。神様になってありとあらゆる欲を満たしたいと。そのために頑張っている。インドの方々、建前では解脱したいとずっと言ってきましたけど、実際には解脱したくない。解脱して聖人君子になるよりも、神様になってありとあらゆる欲望の限りを尽くしたいと思っていることがかなり以前から分かっています、その辺がちょっとインド人、好きかなという部分であります。お答えになりましたか。

(司会) 何となく話を違うところに持っていくのは、日ごろの仕事のうまさかなと思いますね。よろしいですか、もうそろそろこの辺だと思いますけど。今日は非常に楽しいお話をありがとうございました。鈴木さんは非常にオタクであるということも分かりましたし、いろいろ逆に。私がさっき言った空間の線と心の線の話でいうと、最後の終わり方は非常にジョン・レノンの『イマジジン』っぽいんですが、むしろ空間の境界を壊す方が本当は簡単で、国境、ボーダーがないと、心であなたがそう思うだけだと言いますが、かえって心を変える方がはるかに厳しくて、今日の話を知ると、死ぬか、出ていくか、何かするしかないというんだったら、ほぼ変わりようがない、絶望しか感じ取れなかったんですが、このままずっと続くんでしょうか。これを最後に聞いて終わりたいと思います。

(鈴木) まず、今日のレクチャーというものが基本的に、ヒンドゥー文化の中で生きていない日本の方々に向かってのものだということを再確認しておきたいと思います。インドの人たちがどう考えるかは、まさにインドの人たちが考えることだと思っています。そこに私たちが口を差



北海道大学グローバルCOEプログラム

📍 ライブ・イン・ボーダースタディーズ

し挟むことは慎まなければなりません。向こうがこちらの文化を侵食してこない限りは、そして助けの手を求めてこない限りは、自由にやるものだと思います。

インドの方々がボーダーをなくすかなくさないかというのは、やはり彼らの問題です。問題は、彼らがどうかということよりも、そこから私たちが何を学べるかということなんだと思います。そういう意味で今回は、私も含めた日本の方に対するメッセージとして出してみました。

(司会) ありがとうございました。何かよく分かったような、分からないような。まあ、とにかく面白かったということで終わりたいと思います。どうも今日は刺激的なお話をありがとうございました。(拍手)

ライブ・イン・ボーダースタディーズ No.4

特集「ボーダースタディーズ・セミナー2010」

編集者: 藤森 信吉

協力: 平山 陽洋、福田 宏、宮本万里

発行日: 2011年1月11日

発行者: 岩下明裕

発行所: 北海道大学スラブ研究センター内 GCOE 事務局

〒060-0809 札幌市北区北9条7丁目

Tel 011-706-4809 Fax 011-706-4952

URL <http://borderstudies.jp/>